随筆集

地球にて

今泉由利
Yuri Imaizumi

蝸牛社刊

随筆集

地球にて・

今泉由利

蝸牛社刊

◉目　次◉

I　結婚――アルゼンチンへ……3
II　工場開設……75
III　地球つれづれ……117
あとがきにかえて……264
掲歌一覧……266

表紙絵・扉絵＝今泉由利

I　結婚——アルゼンチンへ

一

アルゼンチンへ行って「何をする！」ということも、アルゼンチンって「何処にあるの？」と地図を見ることにも思いは至らなかった。ただ「日本を出てゆく」ということが肝心だった。

いずれの日にか、世の常のごとく「角隠しかな！　ベールかな！」と思ってみたことはあるけれど、そんなに急いで「貰われ」なのか「押し掛け」なのか、そういった当事者になるとは思ってもいなかったのに、一枚の貫禄の無い紙切れに「アルゼンチンへ行く手続きに必要なのだから」と取り急ぎサインをしたのが、私の結婚ということだった。でも仰々しいことをしないで、常識の関門が通れたから、「駈け落ちするのかな」と思っていた私にはありがたかった。

「私の旦那様になる人は、頭はキラリ、背は電信柱のごとく、その上、気がやさしくて力持ち、正義の味方の大金持ち、こんな人を探して！」などと冗談ともつかず言っていたのに、「力持ち以外は何も当てはまる所がないのにねえ！」の面持ちの母を急がせて、着物は手描友禅。はまなすの紬。庭の芙蓉の花弁の色を絹に再現させたり。父が選んだ貝の光沢を折り込んだ古典模様のその絹の艶。

着物に白足袋姿の職人さんが、私の足型を取りに来て下さった足袋も、束になって出来上ってきた。十三家に注文した櫛も出来、私の生涯の持物作りに大わらわ。

学校で使っていた木の香も香る織機。ステンレス製の持ち運び自在のもの。昔、福島で使われていた焦色深い、とてつもなく大きな織機。京都の古道具でみつけた綴れ用のもの。織機だけでも、

新旧大小とり混ぜて四台かかえ込み、その付属品。ちょっとやそっとの荷物の量ではありゃしない。銀座でひょっとしたらもうここに戻ることはないかもしれないと楽しかった日々を思い思いブラブラし、時間を忘れ、「何処へ行ってた！」と、ほとんど動きかかっているブラジル丸に引っ張り上げられた。息切れが続くまま、涙を流す訳でもなく、「さあ、行ってくるぞ」という気負いもなく、だんだんと遠くなって、夕方の露に消えてしまいそうな淡紫の着物の母。「どうして、母があんなに遠くなってしまうのでしょう」。なかば茫然と日本国を離れてしまった。

立てる高さもなく、重なった小さなベッド一つだけが自分の場所の旅。そのベッドに「不法出国の人をかくまっている」ほどに見えた縫いぐるみの〝ワン〟と共に。山男すなわち私の旦那様はもちろん高い所が良いのだから、上段に住んでいました。

日向ぼっこをすること、「退屈だなあ！」ということ、日常生活ではとてもそんな風にはしないという食事の形式で三度三度。おいしいのに、立派なのに、飽きてしまう。

乗り合わせた、南米の山へ行く登山隊の荷物の中から出てきたメザシを、誰の知恵か、ライターで焼いて、そしてまた誰彼かの荷物よりのお酒で、もう限りなくおいしいという夜を重ねて、何とか節ともつかない踊りを輪になって踊ってしまう。飲んで飲んで、酔いつぶれて甲板でお星様がゆらゆらしていた夜もあった。

厨房から失敬してきたジャガイモや玉葱をライター以上の火を持たない船中の生活で、「いかにうまく食べるか」が何時間もかけての話題であったりした退屈の時。

「あ、海亀だ」あきあきするほど船に乗っているのに、まだ一度も陸が見えない、とてつもない水の広がりの中に、プカプカ一匹。「あの速度で、いつ陸にたどり着けるのかしら」「産卵は砂浜と小学二年の時習ったもの」万年もあれば何とか……自然の摂理はうまく出来ているのだから。

「イルカかな、サメかしら」とがって黒いのがスイスイとゆく。

「飛び魚だ」キラッと光る。

真赤な、巨大な太陽が、海の中に沈んでゆく。いつまでも余韻を見守っているうち、泣いてしまいそう。

ふと、「吸い込まれてはいけない」と我に帰る航跡。

地球の丸みが見えてしまう海。

おとぎ話とすぐ結びついてゆけるような接点での日々。

日本を離れゆく時いつまでも見えていたよ淡紫の私の母

二

「せめて海賊でも来てくれたらなあ」と贅沢な生あくびの頃、私の初めての外国、ハワイの土の上に立つ。どっしりとして頼りがいのある足元。「動かないことって素晴らしい！」「大地って懐し

い！」

船の動きのままに過ごした十日間、その揺れが残る身体が、動かない大地にびっくりして平衡感覚を失う。

せっかくの大地、遊覧バスに乗るなんて気にはなれないで、「ここがハワイ、ここがハワイ……」としっかり踏みしめて。植物なしでの日々を取り戻すがごとく緑、濃い緑。花、赤い花。大きく繁った南国の木々、手入れのゆきとどいた芝、建物、ムームー姿の黒く引き締った美しい人々……。みんなが私の近くにあり、木々を渡ってくる風のもと、土を感じて飲むビールは旨い。

海苔巻ずしを売っていた。「まあ！　こんな異国の風景の中に、小さな日本が」〝隣家の味〟って感じを、ハワイの景色の中を歩きながら食べる。「おいしい、もっと欲しい」干瓢もしいたけも食紅で染めたデンブも入った、ドルで買った日本の味。このおすしを作ったであろうハワイに住む〝日本の人〟のことをしばらく思いつつ……。

ワイキキでは波乗り。どちらが前か後かほど真黒く日焼けした子供が、小さな枝の上で手を櫂にして、ピチャピチャしている。

「私にだって出来るさ」板をかかえて水の中へ。ハワイの海は引く力が強い。「怖い」生まれ育った三河湾の様子とは、だいぶ違う。「わあ！　津波みたいなすごいのが来る」やいなや、波のもみくしゃ。確かに乗っかっていた板からは放り出され、「どっちが空？」もう滅茶苦茶。生きている。かろうじて。

「指輪がない」。「困ったことがあったら」と母が最後に指に嵌めてくれたの、どこへ行ってしまったの？　広く、大きな、力持ちの海、とても私の力には負えない。あきらめる。

まだ、大仕事が残っている。何ドルかで借りた板ッペラが遙か彼方で漂っている。貝のかけらがぎっしり混った足元の砂を大きく削ってゆく波は容赦してくれない。どうあがいても近づけない。慣れない所で慣れないことなんかするものじゃない。半べそ。

ワイキキでの大半の時間は、板ッペラを追いかけることで費してしまった。

気分を変えて、「さすがアメリカ」、とても一人では食べきれないほどの、その巨大な一人前のアイスクリームを前にして、思わず微笑んでしまう。常夏の国の果物。買いたてのムームー姿でくつろぐハワイ。豊かで、清潔な所。「私の行こうとしている所も、こんな風な国だと良いな」と思う。

面食らいと暇がいっぱいあった船旅でのつれづれを、父に母に友人に、せっせと書いては、船の中の郵便局に運んだけれど、やっとこのハワイから日本へ向けての航空便となることでしょう。

本当のことをしながら、旅をしてきました。そして、また、本当のことだけをしながら旅を続けてゆくのです。

生まれしは三河の海辺太平洋ハワイまで来ぬまだ太平洋

三

ハワイがどんどん小さくなってゆき、いよいよ点。見えなくなってしまうと海、海、海の日々が重なる。そして辿り着いたのはまだアメリカの内、ロサンゼルスでした。

思いもかけず、私たちを迎えて下さった父の友人の自動車は、大きくて大きくて、王様専用車みたい。

赤と黒と白が調子良く混った絣の、まったく大好きな着物を、ロサンゼルスの為に選んだのだけど。この大型の光り輝やく車と、大都会なのに、青い大きい空のもと、私の存在は似合っているかな。

親の光は海をも越えて、車は走る。走る。ロサンゼルスを見るため、偉大なアメリカを知るため。

薄紫の雲か霞か、天国みたいな色。出てきた船を見送った母の色。ハカランダという木のその花の色にはじめて出逢う。

私の生まれ育った庭、父母の庭に、あまりにも上品なこの淡紫を置いてみたい。あの庭を出てきたのは、竹の子の二節ばかり皮の落ちた頃。カラー、矢車草、マーガレット、金盞花と庭中、花に満ち満ちて。

私を横浜に送る朝、庭の花々の花束を作って下さった父。その花束が枯れてしまったのは、まだ一度も陸を見ない頃。船酔でまいっていた頃。私の庭であった、その庭の花々が航跡に消えていっ

た日。

「何がよいか？」って尋ねられ、正直に答えると、ロサンゼルスの中に日本の人がかたまって出来上っている町で、日本から飛行機が運んだという、トロ、イクラ、アナゴ……。十六日間、海に囲われ、飼育されている動物のごとく、与えられた物を食べ続けた舌に、いまや憧れとなっていた味の再現。「旨い！」

船が出航するべき夕刻、まんじゅうを箱いっぱいにいただいて、とてつもなく大きいサッカー場を見たことや、映画に出てくる人の家が立ち並ぶ所を見たことよりも、あんこがうれしくて。そんな日本の味が入るということに、驚き、感激して、またまた船中の人となるのです。

日本の食物を「断つ」とかの決心をして出てきた訳でもないので、食物に関しては、だらしなくも日本へと靡いてしまう。

今まで、学生であったのに、自力でもないのに、まわりから甘やかされて、旨い物を食べた日々は過去。

明けても、暮れても、水、波、海。甲板に腰をおろして、ロサンゼルス製のカルカンまんじゅうをほうばりながら、今や水には少々ゆとりを持って接している。

メキシコの沖。ガーガー、ギザギザのテレビが、メキシコの歌を歌っている。地図の上のみに存在すると思っていたのに、現実に、こんな所までやって来てしまった。陸を遠くに見るメキシコについて考えてみるのだけれど、あまり沢山はそのイメージはない。勉強不足で生きてきた故か、一

般的日本人とは私程度であるのか。

百聞は一見の諺まであるのに、近寄ってくれることもなく、陸が遠くに見えている位置にて、しばらくの間はゆく。

船に乗るにあたって、「この船は、どこを通り、どこに泊って、どこにゆき着くか」というごく基本の質問をするということにも気が付かなかった。実を言うと、地球上のどの辺に、私が行こうとしている国があるのかもつかみ得ぬまま。船が泊り、錨を下す音に「ここはどこ？」港の名前を聞いて、その国も聞き、頭は小学校の教科書をかけめぐるのだけれど、空しくあきらめてしまうことが多い。無知といおうか、呑気なのか。知らないということに気が付かないほどの幼さでもって、地球を半周もする引越の張本人となって船に乗っていたのです。

太平洋に白く引きゆく航跡に矢車草を投げ入れし日よ

四

「パナマ運河を通るんだって！　そんな大それたことしても良いのかな」日向ぼっこぼけの頭にもおもしろそうだ。

「鰐がいるのかな、河馬かな？」熱帯の動物に現われてもらえれば非常に都合が良いのだけれど。

細い人工の河を、一隻一隻時間をかけて通してゆく。大きな船、小さな船、あらゆる国籍かとも思われる幾多の船々が順番待ちをする河口。順番待ちとして泊った日本国籍ブラジル丸の甲板を、ドキドキ、ウロウロ、ソワソワして歩きまわること長く長く、日が沈んで暗くならないうちにと気をもんだことも無意味となり、やっとやっと順番がきて動き出したのは、電気がなければ視界ゼロの闇の時刻となっていました。

「闇を見る」ことは、船中の幾多の人々の興味を引かなかったらしく、場所争いをすることもなく、私は、もうこれ以上前には出られない先端を一人じめ。「船の光の届く範囲だけでも」目を凝らしさえすれば、闇の彼方に何か見えてくるようなつもりになって。

細くて波のない、切り開いたばかりのような新しい土が見えている所を、神妙に進むことしばし、鰐にもぶつからなかったし、両側のジャングル？　にプーマが現れることもなかったけれど、太平洋と大西洋の水位の異なりを水門で仕切って、水位調節し、名前の変わる海へ押し出すというセレモニーもあり、通過するに当って、急激に幾多の知識を得たのだから。そして大西洋に浮かぶことなる。

いくつ船が泊ったら、私の山男が引越そうとしている国へ着くのかしら。その国について知っていることがあるだろうか。弟がタンゴが好きだから、気をゆるしているのだけれど頼りない話。

三度、日本とアルゼンチンを往復している山男は、自分は知っているから平気であって、ネホリ、ハホリ語らなかった。何にも知らない私の心の底の方には、あきらめといおうか決心とは少しちが

うけれど、何事が起ころうとも、もうジタバタせずに、自分自身で解決してゆかなければならないという思いがデンとしていたのだと思う。

原地人が踊ろうが、雨が降ろうが、人間が住んでいるというならば、私にだって何とかならなければおかしい。

私の知らない言葉が話されているという。母は、私の使い慣れた化粧品があるだろうかと、そればかり心配していたけれど、船に乗ってしまった時から、顔に何かを塗るのをやめてみた。髪は自分で切ることにした。ヘヤークリームもドライヤーも何もいらない。ザボザボと洗えばそれで仕舞い。ありがたいことに私の髪は、洗うだけでツヤツヤピンピン。持って生まれた天然の艶が私の最高のお洒落となるような、人間の基本にもどろう。天照大神が人間の元として織物をしたということを聞きかじって、これが女の私がすること、と織物を始めた私です。だんだん切り捨てて、飾りのない基本にもどってゆくことがどんなに清々しいことであるかを、じっくり味わいましょう。なまけもので、虚栄心の塊みたいな私でしたけれど。

パナマ運河を越ゆる時刻は闇の中何も見えずに何か探して

五

とある港に着きました。名をクリストバルという。船の接岸ももどかしく、幼子のごとく陸へとび出す。未知への一歩一歩は浮き浮きと。

ギャングとか密輸とか、要するにちょっぴり胡散臭く〝何かおっかないことが起こりそうな映画の中に紛れ込んでしまったのかしら〟という雰囲気の港近辺。

「ギャッ」丈高い草が生えている港の貨物列車の線路を横切ろうとした時、現れ出たのは大蜥蜴。六十センチ、七十センチ、一メートルかしら。今までかつてそんなに大きな蜥蜴が地球上に生息しているという予備知識がなかったから、悲鳴をあげる以外ない。

つい何日か前まで、銀座を銀座にふさわしく歩いていた私と同じ空気のもと、同じ時間同じ土の上で、私以外の人影も無くはないのに、逃げようともせず、昔日の威厳を保ち踏ん張っている。蜥蜴の目と私の目が合う。丸い目。歴史として消えてゆく一瞬に間に合った気持ち、生涯忘れられないでしょう出逢い。

スーッと延び上って、かなり上方にのみ葉がついている椰子の木もあり、舞台装置も満点で、まだまだ先が長そうな私の旅を思いやる。もうこんな大それた情景になってしまって。旅ゆけばゆく程、原始に近づくというのは間違いかもしれないけれど、未知へのイメージは原始へとなりがち。地が果てる所まで行くのでしょうか。ジャングルへ分け入ることになるのでしょうか。私の引越し

……。

でも今はまだ弥次馬、旅人の身で、こんな風景の中に、突然自分がウロウロ出来ることがジワーッと感じられ、退屈していない気持ち。

地球儀の真中あたり、スペイン語が話されている国の太陽に近づいてしまった明るさのもと、私の歩く速度で、私の目の高さより。

貧乏風な、おしっこ臭い、薄暗い屋根の中へ。旅の傲慢さも加わって、躊躇なく入って行かれる。おびただしい数の裸に近い褐色の子供たちが遊び回っているマーケットでした。

木からゴソッとはずしてきたままの大きな単位のバナナの房々が山と重なり、とにかくバナナだらけ。パイナップルもある。この国の人々の主食なのかしら。緑濃いもの、熟しているの、大小さまざま。バナナにも種類が多いのですね。

私が子供であった頃、〝遠く暑い国からやってくる果物〟と思い大きく憧れた品が、原産地域で、異国の顔をした人たちが、わりと無造作に扱っているのは現実感がありました。

割り込んで行って、この場合なぜか、ちょっとかじったイタリア語が咄嗟にでて「持ち上るかしら」ほどの大きな一本を我が物と買い求め、熊が鮭を担ぐ絵のように私も担いでしまう。重い。香る。充実。

船に帰り着き、乗り込む時に唯今の買物、バナナもパイナップルも、バケツの消毒液に浸さなければなりませんでした。熱帯の虫も病原菌もついているからということなのでしょうけれど、こん

なことをして手後れ、気休め。バナナの大房を抱っこにおんぶと格闘してきた私ごと消毒液に突っ込むとは言わなかったもの。

〝見たい〟と最後まで頑張ったけれど、船の給油の間だけの歩く範囲に見当らなかった「バナナ畑」に思いを残して。

動き出した船の中、先程のマーケット出身とはとても思えぬほど文明的に変身させたパイナップル料理をいただきました。甘く、強く香り、そして舌が痛くなる。

カンヅメで知った果実の、本物との出逢いでした。

船室の高くより吊した巨大なバナナの房の持ち主は、もいでは食べ、千切っては人々に配り、言いたいことを言い、思いたいことを思いつつ。その間も船は黙々と進むのです。

パナマにてわが前をゆきし大とかげいついつまでもその顔忘れず

六

ある日曜日、元オランダ領のキュラソーなる初めて聞く名前の港へ着きました。小さな島のようで、また得意のテクテクでもって。

正式に町へ入ってゆく道はあるはずなのだけれど、接岸作業中に甲板をうろうろして見定めた、

まだ土が乾いていない開発途中の崖を登ってみたい。露出している木の根につかまり、足場をたしかめ、〝これから先どんな生活になるかも保証のない身の上〟との気持ちがあるから、これきしのことが出来ない、なんて言えない。土まみれになるのも平気。

何メートルほど登ったかしら。単調な船の生活からほんの一時の脱出。大人近辺の女なれど、お転婆なことをするのは面白い。

登り詰めた所は、小じんまりと平和にみえ、明るさがひと際。見渡す家々のどの庭からもハイビスカスの赤が強烈。風にゆらぐブーゲンビリア。

手足の泥を払いつつ、「どうしてこんなに人影がないのかしら」と思う。店は閉り、店員が居ない、アッケラカンと静まり返った坂の多い島を、足の向くまま我が物顔で。ブラジル丸から下りてきた、要するに横浜以来の顔見知りばかりに出逢いつつ。

日曜日の昼食後、掻き消すように人影がなくなる中南米の昼寝の習慣を後になって知るのですが。

夕暮れて、やっとこの島の人たちの姿が三々五々見られる頃、今度は正式の道を通って、南国の夜のアバンチュールはルーレット。

この夜、一点張りが三回も当って少々お金持ちになってしまった。とは言っても三十六倍する元金がちょっと子供じみていたのが残念ではありましたけれど。

久し振りの踵（かかと）の高さが気持ち良く、真黒いジョーゼットの洋服と象牙の指輪はついているのだ。

自分の持ち前をすぐすってしまい、私の目の前にザクザクおし寄せてくるお金になるはずのプラ

スチックの山に、遠慮しつつも手を出してくるほどついていない山男、もっと言えば日本でパチンコをした時も、すぐ私のところへ玉を貰いにくるほど儲けることが下手な人を養いつつも儲かったのです。

浮わついたお金のゆく先としてはあまりかっこ良くないと主張する私に逆って、食料を荷造りして船に積んだり、ロバに積んだりして山へ出かけていったその習性が残る山男は、アルゼンチンすなわちアンデス山脈へ登りにゆく途中のような気になって、船の売店で、醤油、椎茸、梅干し、味噌……そんな物をダンボールにどんどん詰め込むほど買いこんでしまった。

狭い船室にまた三個のダンボールが仲間入りして、引越し道中たけなわ。

土の上歩みていたり赤々きハイビスカスのキュラソー島

七

何回目かに泊った所は、ラガイラという名前の港、ブェネスエラです。

通ってきた国々、どこも同様だったけれど港というのは貨物の要素が多く、殺風景、殺伐、ちょっと錆っぽく、石油っぽい。

四角く、黒い塗が所々はげている時代物の乗り合いタクシーに乗って、山を縫うことしばし、大

きな規模のスラムが見え、そして首都カラカスに着く。
黒い人が多い。なにも予備知識のない所でお仕着せに連れてゆかれる名所、旧跡、そのおしっこ臭いこと。歴史を知らないこと。
隅っこを避けて、つま先だって歩いたにもかかわらず、夕焼け色が誰かの銅像を染め、あまりにも知らない国に、まぎれ込んでいることがもの悲しく思われる。
ちょうど仕事から開放された人々が町にあふれる時刻、その人々の中に混って上手に歩く。東洋系の顔が見当らないまま。
この夕方の記念にイヤリングを買うつもりになったら、どう探しても耳に穴が開いてないと使えないものばかり。これは大変なことになった。そういえば重いイヤリングの為、耳の穴がダラリと大きくなっている人を沢山見かけて気持ちが悪くなったのだったけれど、ふさわしい時のイヤリングはいい感じだけれど、身体もだぶついて、耳の穴もゆるんで、それでなおかつブラブラさせてもちょっぴりだって美しくはない。
生まれたての赤ちゃんが、もう穴を開けられて、金色のがピッチリはまっている。なぜわざわざ身体に穴まであけて物をぶらさげなくてはいけないのかしら。
道ゆく人たちの耳からイヤリングを取ったらもっと美しく感じるのにと、思いつつ歩く。
ボーリング場があった。東京では、ボーリングに浸っていた時があったけれど、船に乗ってからは太陽の下でしょうことなくワナゲやデッキゴルフなど……さっそく腕だめし。四レーンあるばか

り。何時間か前にこの国に着いて、また何時間後には出ていく私たちが、黒い人たちが隣りでゴニョゴニョ言いながら遊んでいる場所で、玉をころがしてみたことも忘れ得ぬものとして。旅の途中の浮わついた気持ちがボーリングに適しているのか、かなりの成績となり、いつもと違う筋肉を使って良い気持ち。

「めくらへび」で、何語で話している国かも知らずに乗り込んできた、もっとも日本語以外だったらこうなれば何語でも同じ。勇気を出して日本語で「アイスクリームを下さい」と言ってみる。この程度のことなら何も言わずに黙って立っても通じてしまうのでしょうけれど、人間として何とか言ってみなくてはかたがつかない。

カラカスのアイスクリームを食べながら歩く夕刻、薄暗い中、黒い肌の人たちの目があまりにも鋭く感じられ、カラカスというと目ばかり思い出すこととなるのです。

お菓子屋さんらしい所で、これはお菓子ではなかろうかという得体の知れないものを買ってみた。少々薄気味悪いながらも何か違う味を欲しているから。同じ船室の、かぶら寿しをどんなに上手に作るかということをいつも話しているおばさんにも買っていってあげよう。彼女はカラカスの休日をどんなにして過ごしたかな。

もう六十歳を過ぎていると思えるその人は二度目の旦那様のところから逃げ出して、パラグワイにいる子供の所へ行くのだと言っていた。私の母など、何がどうなったって私のあとを追っかけて来るということはない。あまりにも立派みたいに育てられて淋しい。もう少し無知的に動物的に、

ベタベタして欲しかった。母に抱かれたという記憶はない。母は彼女の子供の中では一番出来の悪い五番目にあきあきしていたのだろうか。思えば私の今までは親の注意を自分に向けさせようと心を砕き、あきらめ、遠慮して。日本国を出てきたのも、潜在の心に、こうすれば少しは私のことを思ってくれるかしら、という気持ちが確かにあった。

船の友人へのおみやげに日本と同じ形をしたスイカを買った。これでラガイラ寄港はお仕舞い。次はいったいどんな所へ着くのでしょうか。私の行く所はまだまだ遠いのでしょうか。

肌の色は夕方に同化してゆけり目ばかり歯ばかりカラカスの町

八

海は穏やかな日が続く。人間とはいくらでも怠け者になれるものであるらしく、このまま進めばどれほどヌケてしまうことか。

せいぜい考えて、〝今夜の食事は何が出るかな〟という程度頭を働かせ、思ってみたとて変動の出来ないことを嘆いてみること。シャワーで水びたしになること。お日様に向かって日光浴。あとほんの少々のことしかすることがないのだから。本は沢山持ってきたつもりが、ロサンゼルスを過ぎる頃にはすっかり読み尽し、補給は出来ない、阿呆けて日は過ぎる。

本来怠け者の私は、こんな生活がすっかり身体に乗って、水に潜っている部分の船室ではなく、寝ころびながら海が見える船室で一生旅を続けていたい。願わくば、あの可愛らしい目のなまけものという動物と一緒に。

テレビのルポ番組で、東南アジアの国、なまけものという動物が生きたまま四足を一つにしばられ、食用としてマーケットにつるされているのを見た時から、彼等が、何が起こったのかと目をキョロキョロさせつつ、お買上げを待っているなんてことがないように、なまけものが怠け放題暮らせる保護区を作りたいと使命感に燃えたけれど、今だにどうすることも出来ないでいる。甲板で寝そべって浮く雲と話をしている間にも、親愛なるなまけものが、誰かの胃袋におさまってしまうのではないかと気には掛るけれど、実力行使？　の出来る日まで、なまけものを絶滅させないだろう自然の摂理を信じつつ、それとは別に私自身の怠け癖は増々つのる。

音にきく、リオデジャネイロという美港に、波もなく、風もなく、静かに静かに——早朝でした。どんな風景も一日が動き出す前の静けさは清々しいのに、それが久し振りに陸を見て、その目に美しい水あり、緑あり、山もある世界の美なる地、本当にさわやかな見ものでした。その美の静かさを破って陸に飢えている私たちがドタドタと船を降りる。

船の出口で待ちかまえているタクシー、そのタクシーの商魂に乗っかって、一日さらりとリオ一巡りという約束が成立、さあ探検だ。頃は六月、南半球は冬。暑くもなく寒くもなしと感じるのが腕をにゅっと出した夏の洋服。

海が見える。ジャングルがある。さすがにここは日本的ではない。日本の、私が知っている裏山の森とは違って、映画で馴染みのターザンがぶらさがって移動する太い蔓が何本も垂れている。苔がある。その湿った感じが本格的なジャングルだとワクワクするけれど、何の心配もない立派な道を走るタクシーの窓から、その大それたジャングルを見たのです。

木陰のヒャッとする風を受けながら、ちょっと高い部分から、下の海の方の眺め、美の観光地にも学校がある。水道局がある、人々の生活が見え、ちょっと裏からのぞきの感じ。

コパカバーナで靴をはいていたら、もったいない。驚くほど細かく、白く、ゴミが混じらないサラサラとした砂。足をうめたり、もう寝ころがっちゃおう。シーズンオフで多くないとはいえ、黒い人、白い人、私の立場から言えば外人という種の人たちが、ボールを追う、日向ぼっこをする。

どこからでも良く見える売り物の丸い山。キリストの像。名所旧跡はおしっこ臭くていや。仰々しい見せ物は好きじゃない。それよりも、我が家と同じ花が咲いていたとかいなかったとか、初めて見る花、らしい花。人々の服装、街の清潔度。それから自分の身につけたいと思う独特な布があるかしら、とか、ささやかな何の足しにもならないようなことが好き。

好きも嫌いも関係なく、お仕着された丸い山の頂上まではケーブルカーに乗って。頂上で飲んだガラナという、コップの中でプップッと小さな泡がいっぱい上ってゆく味の付いた水のおかしいと思ったこと。

プップッを飲みながら見おろした風景は、海があり、別荘が立派に建っている。足の下の方に鳶

が飛んでいる。たいした高さでもないと思った山も意外と高いんだ。
あ、私たちの乗ってきた船が泊っているのが見える。夕方の風が始る、さあ、続いている旅を続けるために、お船に戻らなければ。

見ゆる物皆実物にしてジャングルの湿度の中にしばし立つ

九

終点に近づいたんだなと思う。それぞれの港で降りていってしまった人たち。ガランガランともの淋しくなってしまった船に、まだ乗っていること二、三日。サントスの港では面白い電車に乗れる幸運にめぐまれました(七年後に尋ねた時には取り払われてしまっていましたから)。ちょっと変わったこと、風景、みな映画みたいと思う。そんなに映画に狂った訳ではないのだけれど、外国の知識はラブロマンスを通しての映画ばかり。
ひょいと棒につかまって、どこからでも乗れ、どこからでも降りられる囲ってない電車、ニューっと大きく見上げてしまうような黒い人が身軽にピョイと乗り、私の隣りに坐る。とても悪戯っぽい気持ちになってしまう。どこからでも乗れる電車でも只乗りはいけないんだね、電車の中へ黒いおじさんが切符を売りにくると、運動のかたまりみたいな子供たちはピョイピョイと次の車輛へと

逃げてしまう。こう開放的な電車では逃げてみたくもなるのでしょう。やっと私のところまできたおじさんにブラジルのお札を沢山渡しました。山ほどお札を出して電車に乗るなんて、きっとインフレがひどいのでしょう。

目的地だか何だか、何と名が付く所なのか理解し得ないけれど、着いた所で、何にも持ち物もなくポケットに手を突っ込んで歩きました。知らない国の知らない町の片隅で、いったい何を思えば良いのかしらと、ちょっと途方にくれておりました。

初めての所、初めてのこと、それほどキョロキョロすることもなく、まるく歩いて自然に行き当ったことだけが私の興味の範囲です。隅の方まで「それでどうした！」とほじる性格ではない。素焼きのレンガ色をした土鍋みたいなのをあちこちで売っているのが見られたから、土鍋のお料理がこの国の庶民の代表的な食物だろうと思う。その味に出逢うこともなく、鍋と同じ色をした土が敷きつめてある椰子の木の公園を中心とした小さな町ともさようなら。

次の日、目を覚しても船窓からの風景は昨日と同じ。もう慣れっこになり、過ぎてしまったグレープフルーツの朝食を早々に、土の上を歩こう。砂の上までベットリの石油。海の水も上に石油が乗っかっている感じ。あの美しかったリオデジャネイロの水、そして同じ国の内なのに、ここはどうしてこんなに汚くしてしまったのかしら。昨日の電車には沢山の人が乗っていたのに、海辺に人の気配はなくて地の果までやってきてしまったとの思いが強く、砂浜を思いきり走ってしまう。

贅沢が大好きで、勤勉に物事に対してゆかないなまけ者で、まったくよろしくなかった。だけど

これから始まる自分で作る自分の人生は、いかなる努力をしてもいい。しばらく後に、私が持って生まれた性質をのさばらせて生活出来るようになる為に。太く、やさしかった親の臑とは関係なく、自分自身で自分の気に入る生き方作り出すのだから。殺風景な海岸を、石ころも貝がらも拾うこともせず。

今来たり今いでてゆくサントスの海辺の石ころ拾わぬままに

十

あれやこれやと平和のまま、甲板に出ると少し肌寒さを感じるようになってきました。夏を感じる国々ばかりを通り過ぎ、「なんだ赤い線引っぱってないじゃないか！」と本当の赤道も知り、海が凪いでいたその暑さは冷房の船室に逃げ込んでしまって、直接、フウフウ言うこともなく。

広い範囲の海の色が黄土のアマゾン河の色になってしまっている地域に、傷んだ布袋葵らしき漂流物を見つけ、いたく感激してみたり。

この上もなく地球儀を学び、この次に着くのは、いよいよやっと、私の山男がデカいビフテキを食べ、荒馬に乗り、夕日に向かって走りまくったという国アルゼンチン。

未知に夢見る私には、まったくロマンチックに、憧れに聞こえたのだけれど、さあどうかな。

あちらこちらの国々で下船する人たちを弥次馬の目で見てきたのに、いよいよ降りる番がまわってきた。

一九六六年の六月、南半球の冬。雨の降り出しそうな黒っぽい雲の厚い夕方、山男に船に引きずり上げられ、海に濡れて切れ、まつわるテープがいたく惨めであった日から四十五日間。生涯またとあるとは思えないほど怠け者の時を重ね、怠け者でいるのにも厭きてしまったほどの後に辿り着いた船の終点。

ある移住花嫁さんといわれていた人は、写真で逢ったきりの彼と今、現実に出逢い、「わー！　思ったとおり禿げている、写真よりひどいわ」などと大きな声で言って、それでも嬉しげに降りて行ってしまった。

もう一人は、本当にやさしそうな彼を前にして、どこが気に入らなかったのか後を向いたきり。なんてかわいそうな初対面。

いろいろな出逢いを見まわしながら、山男と私は、船にも、人にも、何一つ未練を残すことなく特別な初対面もなく、オーバーを着ても寒いブェノスアイレスに立ちました。

初めて見るブェノスアイレスは、ずっと続く芝生の向こうにニョキニョキと連なって立つビルを含めて、とても冷めたい。北米を除いて今まで通って来た国々にくらべたらえらい立派さ、気取った大都会みたいで、冬なのに緑は沢山、赤い屋根の家々は御伽の国のよう。だけど何だか灰色を感じるのは陽気な南国の太陽を見て過ごしてきたせいでしょうか。ここは冬。日本の冬と同じ様なオ

ーバーを着る冬。

船に乗る日の朝まで使っていた薬罐や、益子へ焼物を尋ねた時その地の荒物屋で見つけ、何に使ったら良いものやら！　買った本人が考えてしまうような直径一メートルもある笊とか。縫いぐるみのクマ、これが地球を半周もする引越しに持って行くのにふさわしい物かと自分でも思うけれど、結果的にはこういうことになってしまった。長年使いなれた枕も、ちゃんと小脇にかかえて。

これらの品々が一番大切であるべき手荷物なのだから、この調子で十四箱も造って何万円も超過料金を払った船倉の大荷物にはいったい何を詰め込んだことやら。

第三者から見たら全然値打ちのないような物が、私の自分であり、神経を張るほど大切なものなのだから。昔、二十歳を過ぎた人などえらく立派な大人の人間と見ていたのに、自分がその年になってみると皆、私同様なのか、私だけ取り残されて大人になりきれないでいるのか。こんな遠い国まで出てきてしまう心がまえが出来ていない。自分が思っているよりか、もっと重大なことをしでかしているのかもしれないというのに。

羽根枕を抱えておりぬしつかりと未知なる国に着くという時

十一

冬のブェノスアイレスの夜は早くやってくる。手荷物は使用途中の薬罐や枕だから相手にもされず税関を通過し、船倉荷物は時間切れで船の中に預ってもらえる形となり、とてもありがたいということが急にわかった。あんな大荷物をかかえて行かれる先がなかった。

明日は祝日、その次の日も。陸に足をおろすなりこの身は日本人でも、他人の国の法律のいうなりです。

八カ月ほど前、アンデス山脈の一部へ登りに来た山男が、予め住むべき所を決めておいた「知らない所に始めて住むのだから庭付きのちょっと良い所にしたよ」という家はどういう理由か訳のわからぬまま御破算になっており、憧れてみたり心配になったり、早く着くと良いなと思ってみたり……心の中でまあるくふくらみかけていた国にて、着いてはみたものの、その夜からどこへ行ったら良いのかわからない。

日暮れて、寒く、助けを請う知人もなし、言葉もわからない、おまけに雨まで降り出した。惚けになっていた心にも、長い船旅の日向ぼっこでゆっくりこんがり焼きあげた頬にも涙が走る。泣きながら一夜をしのぐ所を探して歩く。

行き当ったホテル。異民族の匂いといおうか。私は病的な潔癖性じゃない、普通の感覚の持ち主だと思っているのに顔を洗っても備え付けのタオルでふくのがいやで、自分のハンカチをポケット

から出した。トイレも坐る気になれない。トイレットペーパーにもさわれない。そこにある布が私の膚にさわることに耐えられなくて、洋服のままベットの上でオーバーをかけ、まったく肩に力が入って、アルゼンチン始めての夜をぐっすり眠られる訳がない。父を母を思うのでもなく、日本を思うのでもない、大して何かを思う訳でもないけれど、生まれてこのかた経験したことのない大騒動の私の頭。

それでも朝がきた。異民族の音が聞こえる、声が聞こえる、この部屋さえ逃げ出せば落ち付ける所があるような気がして、早々にチェックアウトしてみたものの、朝食、これがまた困った。出てきたコーヒーカップにどうしても口を付けて飲めない。お皿もいや、スプーンもいや、座っている場所もいや。私の前に置かれているのと同じコーヒーを、人種は異なっても皆おいしそうに飲んでいる。「大丈夫飲んでごらん」と自分に言い聞かせてもだめ。道を歩くのもいや、この異国の空気を吸うのもいや。「今、ブェノスアイレスの町の一番きれいな所に居るんだよ」と山男。「どうしよう、ここに住めるかしら」。このまま爪先だって歩き続けている訳にもいかず、飛び出してきた日本へ「やっぱりだめだった」なんてみっともなくて帰れやしない。

それよりも何よりも、本当にあきあきするほど乗ってしまった船に、また同じ日数だけ乗ってゆかれるほど神経は太くはなかった。

途中の国々でも少々は「いや」だったけれど、こんなに甚だしくはなかった。途中の国々ではすぐ通り過ぎてゆかれる弥次馬だったから、逃げ道が開かれていたから、我慢が出来たし、それを楽

しみすらしてきた。今度は当事者となってここにとどまり、逃げ隠れ出来ない身、すべてを受けて立たなければならないのだもの。

外国の人とあまり話もしたこともなく、絵や写真、映画、活字にて日本以外にもいろいろな国があるらしいというほどの知識の持ち主ですもの、直面して、どんな反応を起こしても、致し方のないことなのでしょう。

明けてゆく朝の光に未知の音異国の音のまつ只中に

十二

「畳紙を破かないで！　汚い手で着物にさわっちゃいや」などと、ナイフを持って荷物を切り開いてゆく税関氏に訴える言葉は日本語であり、まったく理解などしてもらえなかったに決まっているけれど、のんびりの国の税関もとうとう私たちの引越し荷物を押し出した。そしてこの沢山の木箱を持って行く所がないなんて。荷物の中から出て来てしまって、どうしても元に治まらなくなってしまった大皿一枚をだき抱え途方にくれてしまった。

寒さ？　心細さ？　かしら、身体中に力が入って震えが止まらない。新天地への武者震いなどではありゃしない。頭痛薬も効かない爆ぜてしまいそうな頭。悲観さをつのらせる雨また雨。声もな

く涙をこぼしつつ、足元ばかり見ていたブェノスアイレス。私の涙を雨でうすめて吸い込んでいった石畳道。

私たちの工場が建つはずの建てかけの隙間を囲い、まず荷物の置場所が決まりました。

なにしろどこからかも知れない所から働きにきている家造りの人たちは、何でも持って行ってしまうのが得意だと聞くから、気が気ではない。番犬みたいに荷物のまわりをうろうろ、番人かたがた家探しは新聞にて。新聞はスペイン語で書かれ、どこを見れば家が探せるかという基礎から始まり、辞書では引ききれない符合のごとき省略単語が家探しの文字とまず知りました。

前の年、ペルー――アンデスの中の一処女峰に登りに来た山男が、山のついでにアルゼンチンへ立ち寄り、ちょっと手と口とお金を出して工場を建て始め、彼の帰日中にも建て続けられ、私を連れてのアルゼンチン再到着と同時に出来上っているはずの建物が、かろうじて敷地だけはなくならないであったという程度の進み工合。

銀座を歩きつつ、眩いショーウィンドウの何カラットもあるダイヤを見つめながら……「夜の富士山を見にゆこう」と真夜中の高速道路を突走った時……ガッポガッポとお酒を飲みながらの……その時々の会話の端々にチョコンと遠慮がちにでてきたアルゼンチンに築かれているはずの工場は、今や正に無であったという現実ではあるけれど、涙ばかり流していた私のたった一つの取り柄といえば「なんだ嘘じゃないか」と断じて言わなかったこと。「案の定、いよいよ始まったぞ」と思っただけ。

いくら頑丈な山男だって、今はこんがらがっているに決まっている。大好きな私にこんなカッコ悪いところ見られたくなかったはずだ。予定が狂って、すべての出来事からいじめられているのだから、この上私にまでいじめられたらかわいそうすぎる。

涙なんか流れてもいい。頭もどこも痛くったってかまわない。大切な着物を盗まれちゃったってしようがないよ。今夜また寝る所を探しに行くのでもいい。本当は何もなくて良かったのだ、夢作りに私も初めから参加出来るのだもの。

ネオンが原色だったり、二時間だけだったら良いけれど、一晩中では困ると断わられたり、連れ込みらしき所を転々と泊り歩いた後、「昼間だけ使っているから夜はかまわないわ」とマンションを夜だけ貸して下さるという妙でありかつありがたい人とめぐり逢い、鍵と住所を頼りに探しに探し当てた所は、こじんまりと清潔で、アルゼンチン到着の一番始めの夜からこんな所があったのなら、アルゼンチンとはひたすら希望となっていったでしょうに。じっとり湿度の寒い冬にアルゼンチンへ着いたのが一番いけなかったことだと思う。他国の他人の部屋で落ち着ける訳はないけれど、ここで不潔感から少々解放され、当地到着以来始めてホッとしかかった所へ、黒光りする電話が凄まじく鳴る。後退り。

安らかに眠る所のなきままに夕暮れてくる今日もまた

十三

電話の主は昼間だけこの部屋で彼を迎え、夕方お互いにそれぞれの家へ帰るという鍵を貸して下さったルシータおばさんだった。「いま、革命が起きた、絶対に外へ出てはいけない」と聞き取ったのは、第二外国語でスペイン語を専攻したという山男。

そういえば本当か空耳か、バンバンなんて音が聞こえるような気がする。耳慣れない異国の音が恐しく恐しく。ふと見上げた棚の上に無造作にピカピカ光るピストルが置いてある。一瞬冷えた。さてはあのおばさんもピストルすなわち武器を持って戦う人だったのか。着くなり政治の争いに巻き込まれちゃうんだろうか。火事、流血、逃げ惑う人々。今にこのビルもドヤドヤと人々が……と知る限りの革命の図が頭の中をかけめぐる。

「いやだ」これから始めようというのに他人の国の革命で死ぬのなんていや。逃げ込むべき頼りの船はもう出航してしまった。

「万事休す」

翌朝、山男は建てかけの工場を、これ以上建てかけの状態が長びくのはやりきれないとすっ飛んで見に出かけた。時を同じく涼しい顔をして私の面倒を見るというルシータおばさんが現れた。

あれこれ聞く言葉を持たないのがもどかしく、辞書を手にただあせるだけ。私の指差すピストルには「女の人は護身用にハンドバックに入れて持っているよ」とさわやかに言う。自分がピストル

を〝パン〟とすることに思いが進み、また悲鳴をあげたくなった。なにがなんでも殺し合いはいけない。私の手から〝パン〟は絶対に出来ない「護身」。神様、どうかそんなことが必要のない人生でありますように。

昨夜「外へ出ちゃいけない」と言ったおばさんが「朝市を見せてあげる」という。なんだかモヤモヤ思いながらも断りの単語がわからないからついていこう。「革命でも何でも見てやるぞ」とついて出かければ、蚊帳のような布で出来た買物袋を、トマトやジャガイモや肉で満たした太ったおばさんたちがあちらにもこちらにもいっぱい。なんて落ち着いている人々。

「革命はどこ？」そういうことは関係者だけでやっているのであって、それも椅子を坐り変えるだけのことだったんだと。一応夜間外出禁止などとカッコもつけて。

何がどうなっても庶民の意志ではどうなるものではなし、参加しようにもそれも無理。お昼の食事のことの方が大切なんだ。そうに違いない。革命であるからとお昼ご飯を食べないでいても誰もほめてくれないし、そんなことすればお腹がすくだけ。何かわめけば政治犯にされかねない。

「でも良かった、何事もなくて」そして私の住もうとする国の大将はオンガニーア大統領と決まったのでした。

朝市のゴチャゴチャ人だらけ、品物だらけのところで、私を連れているおばさんは、よーく選んでトマトを一つ。他の店でベーコンを二枚、もう一回他の店で牛のレバーを二切れ。こういう買物の仕方を知らなかった、ある程度の量を買わなければいけないものだと思っていた、とは言っても

今までの人生、肉や野菜を自分で買いに行くということをしないで生きてきてしまった私の目は、あっちこっちに見るものだらけ。

牛のたて半分に切られたそのままの形をしたのがいくつもいくつも吊るされる肉屋。あんなに沢山の肉をどうするんだろう。その目に骨付きや脂付きの大きな塊を、並んでいる人たちが次々と買ってゆく。日本のすき焼用、シチュー用なんてきれいに切ってあるそんなおままごと的じゃない、もっと動物的、原始的、実質的感覚でもって。二人居た内の一人の肉屋は半分の牛を手ぎわよく解体し、もう一人は大きな計りにドサッと肉の塊を乗せて「ゴニョゴニョ」と言いながらおばさんたちの買物袋に入れている。

そういう肉屋が軒を連ねてどこまでも。肉屋は肉ばかりではなく、レバー、心臓、腸詰、胃、脳、どこどこまでも並べられ、吊るされてありました。どでかい胃袋を持った人間が住んでいる国。

八百屋のコーナーになると、今度は八百屋ばかり、どこが隣りとの境目かわからないように並んで。こうなると、どこの店の前で立ち止まると決めたら良いのでしょう。泥のついているもの、形も不揃い、野菜の種類は少ないけれど見たこともない葉っぱもある。いつか私もあんな葉っぱを食べるようになるんだ。

大小さまざま、色、型、チーズばかり並べたチーズ屋、アンパンのないパン屋、雑貨屋洋服類まで並んで、朝市へ行けば何でも生活必需品は揃えられることになっているらしい。

動物園よりサーカスより、異なった生活をしている人の食べ物、生活の道具、それを買っている

人々……を見るのはおもしろい。いまにきっと私も、平気であんなのを買う人になるのです。そして道路を交通止にして出来た朝市のおびただしい物、売る人、買う人の集団は、午前十一時、レタスの葉っぱや腐ったトマトがわずかばかりの名残りであって、その道を何事もなかったように車が走る。

じっくりと朝市を見て、私の食べられる物が売られていることがわかり、誰の言葉よりも何よりも、何とか生きてゆけるのではないかという気持ちになった。

はじめての物あり味あり言葉ありひたすらひたすらアルゼンチンに

十四

ルシータおばさんは、念を入れて買った、他の太っちょの人たちに比べたら恥しいほど小さな包みを、「買物上手でしょ」とあまりしたことのないことをした満足感でもって、公認されていない後めたさなどどこ吹く風と、足取り軽く私を従えて秘密のマンションに帰りました。

これから後、事あるごとに何々家の出であるということに直面するのですが、まずイギリス系の良家の生まれであるというおばさんは、食事の仕度ということはしたことはないけれど「ユリのために」と台所でガランピシャンとはなはだしい音で一人籠ることしばし。私には「遠来の客なのだ

から今日は台所へ入ってはいけない」と言い置いて、
「何か話したい！」とスペイン語会話集や辞書で話すべきことがらを探しながら待っている私の所へ、最高級の笑顔でもってうやうやしく運んで下さったこれから食べる物を見て私は泣き出した。その時まで、お皿からはみ出すような大きなレバーのステーキなど見たことも聞いたこともなかったのに。
半焼けみたいな、お皿いっぱいに血がにじみ出て血まみれのレバーと、フニャフニャの油だらけのベーコン。「どうしよう」レバーの生は寄生虫がいるとか、そんなことが頭に浮かぶけれど「さあ、冷めないうちに」とおばさんにせかされ、「おいしいよ、おいしいよ」と呑み込んだ。親切にして下さった人なんだから、一緒にお腹が痛くなっても仕方がないよ。
サラダの皿には、大きなトマトが半分に切られ、塩、コショー、油をたっぷりたらりと、それにオレガノをパラパラ振りかけて。「これはおいしい」太陽を吸収した味。「冬なのにトマトが？」と辞書で尋ねる私に「アルゼンチンは大きいの、熱帯のバナナから南極のペンギンまで。ブェノスアイレスが冬でもこの国の中に今夏の部分があり、一年中、あちこちから運んで来るのだから」と。
アルゼンチンの人と会話（？）がありつつ、恐しいと思ったレバーも平らげ、今度は頼み込んで台所へ入れてもらい、おばさんとお皿を洗い、拭き、私の張りつめていた神経が少し少しやわらいでゆくのもつかの間。今度は今からやってくるルシータおばさんの彼が現れる前に私は姿を消さないといけないだって。

間違った所へ行ってしまわないように、教えられたアルゼンチンの金額を、汗でベトベトになるほど握り締め、これまたよくよく教えられた場所から、教えられた番号のバスに乗り、ゆるみかけた神経をピンピンに張り直し、広いアルゼンチンの唯一の私の行く先、工場建設予定地へ。碁盤割りの町並に、同じような型をした家々、どこで下りたら良いかを判断するのが至難であって、神経は頭痛になってしまう。それでも一人でアルゼンチンのバスに乗れた勲章を持って無事、山男の笑顔に出逢えた。

汗ばみて体温伝えし銅貨にてアルゼンチンのバスに乗りたり

十五

「昨日のレバーステーキはよくなかったから、今日はおいしい物を食べよう」とルシータおばさんは、彼女の〝取って置き〟の彼を連れて現れた。両手には、朝市の人並の大きな包。

しばらく前、イギリスの大使であった人を父親にもつという彼。マルコ氏は、地球のどこかから突然アルゼンチンへまぎれ込んできて、たちまち彼の秘密のマンションの夜だけの住人となってしまった私ごときをも疎かに扱わない紳士で、初対面の握手の為に出した私の手を、うやうやしく取り〝チュッ〟とキスの挨拶を下さる彼は、片膝をついて。〝ああアルゼンチン〟、私の生涯の名場面

として。
世界を知り、味も知るというマルコ氏がコックをつとめるとかで、期待。
前日は女二人であったけれど、大食漢の山男も加わる二組での昼食。
包の中味は、これからベランダで炭火で焼こうという品々。何度も生まれて始めて、というものばかりと出逢うけれど、今から食べようとする物も「これは何？」と聞かないことには正体はわからない。
マルコ氏は、肉やニョロニョロする物に、手つきよく四角い塩をパッパッと振りかけての準備、アルゼンチン料理アサードの始まりです。
細かいバラの刺繍がしてあるテーブルクロスを広げて、イギリス製の立派なお皿と銀のナイフ、フォークを用意するおばさんの後を追って手伝っているつもりになったり。
昼間のおばさんとの生活のために、「彼が家から持ち出してきたんだ」なんて、それとなく聞かされ……。ともかく上等の食器は気持ちが良いな。
テーブルも出来、サラダも山盛り、ワインも用意して。待たされること待たされること肉類が焼ける匂いがたまらない。
白っぽくて三つ編になっている物が、コリンコリンに焼け、ちょっとフォークで突くと中の熱々の液体がピューッと飛んでくる。火の上から直接お皿に取り分けられ「さあ、早く〳〵熱いうちに」。ピューッと飛んでくるのを警戒しながら口に入れた物の〝ギャ〟っと叫びたいほどおいしかっ

たこと。外はコリコリ、中はめったり。このおいしい物の正体は小羊の小腸、小腸を三本一緒にして編んだもの。羊が人間の食料にされる何時間か前に食べた草が、消化しかかっているのを、そっくりそのまま、また人間が消化し直そうという訳なんですね。

隣りに坐っている山男が「小腸のもっと下だったら大変だったな。」などと、日本語で素早く言う。さすがにスペイン語で言う勇気は持ち合わせてないみたい。

次に、金網の上からお皿に移ってきたのは、黒といいましょうか、ブドウ酒の色が混じった黒っぽさ。ねっとりとパンに合い、ワインにも良い。豚の脂や肉をきざんだものと〝豚の血〟、それに胡椒の粒や干ぶどう等の調味料と共に、豚の大腸に詰めた腸詰。こんなに何から何まで食べられてしまったら豚も喜ぶ以外ないでしょう。やはり肉を主食としている人々のすることはすごい。本物のピストルを見た驚きにくらべたら〝食べられる物を食べる〟などということはなんでもないから、〝気持ちが悪いのなんの〟って言わないで、パクパク食べてしまった。

まだまだ……。牛のあばら骨が、骨ごと肉ごと脂ごと、木琴を平行にしてしまったような形に切られており、かなり長いまま焼いてしまう。焼けてくると肉がちぢんで骨がとびだして見え、金網の上で骨二本分くらいに切り分け、銘々の皿へとマルコ氏のサービスが続く。一番外側に付いている肉はコリンとするほどに焼け、まん中はしっとり。もう両手で骨を持って、肉にかぶりついてしまう。骨から肉がゴソッと取れてくる時、骨に一番接した部分の、歯ごたえがあり、味があり。

身も心もぐっとこの焼肉料理アサードに傾斜してゆく自分がわかる。

これらのおいしい数々が焼けてくる炭の工合は、消し炭みたいになってしまったのを平たく並べる程度で、じわりじわりと時間をかけて。時々肉の脂が落ち、ジューと煙が上がる。その煙が肉にしみ、また一段と味を増す。

丸くって、やわらかく、白。濃い味がする。これは〝何であるか〟を教えてもらえなかったけれど「もっと欲しい」などと口走ってはいけない雰囲気。こうなってくると、どの動物のどんな部分でも、ひたすらその味を味わうのみ。良い食物がある国。ちょっと入ってきただけで、自分たちの不手際でもって住む所が無いからと、これから世話になるべき国をどうこう思うのはいけなかった。海を渡る前の明るく善意な私たちに戻ろう。

ルシータおばさんのこんなにもやさしい笑顔。初対面の私たちに、〝アルゼンチンはおいしいぞ〟を額に汗をしつつのマルコ氏。

肉とサラダとワイン、よく組み合わされたものだと感心するばかり。この組み合せが人間のもっとも基本の食事の仕方なのでしょうけれど、めぐりめぐって基本の味に帰ってくる人もあるでしょうし、始めから終わりまで基本だけで通す人もあるだろうし、基本をいかにうまく食べるかということが味の中の味なのだと思った。

デザートは朝市にもあふれていたオレンジ。口の中の脂を一掃し、このしめくくりのみごとなしめくくり工合。そして、アルゼンチンの中へ、ぐいと入り込んだ感じの昼食は終わり。

お昼寝の二人を残し、とにかく外に出なくては。また現実の宿無しになってしまった。

肉食の歴史の中へ割り込みぬ岩塩もちて焼かるる獣ら

十六

二、三社の新聞、電話もかけ、押しかけて行ったり、あらゆる方法でもって家探し。

これから先の建設用資金、生活費……、どれほどの金額が必要なのか見当もつかないありさまだから、まずは家賃は安くなくてはいけない。お風呂とトイレだけは、何がなんでもきれいでなくてはいけない。会社を作ろうとしている所から遠くてもいけない。身のたけより大きな十四箱に入った引越荷物が入りきる大きさでないと困る。と切羽詰っていても贅沢にいろいろと条件がつく。

新聞でチェックして見に行った先に、魔法使いのおばあさんが丸い玉を前にしてムニャムニャ言うのにちょうど良い、と思う様な家がありました。どうしてこんなに薄暗いのが好きなんでしょう。我が日本人は、太陽が入ってくる家が好き。

長屋というのかしら、その敷地内に住んでいる四、五軒の人々が共用する中庭があり、ちょうど入って行った私たちをあちらの家、こちらからとものめずらし気に見ています。こんな所に住めば井戸端会議よろしく、皆から世話をやかれ、早く一人前のアルゼンチン住人になれるかもしれないけれど、私のムードからはずれすぎる。

お年寄りが死んでしまったばかりで、妙に生々しいものがありました。天井は高く、お化け屋敷の道具になるような、デコボコゴテゴテの飾りの付いた家具が置いてある、異民族の生活が何十年も浸み込んでしまった空気はいやだ。

着いたばかりで、いつになったら収入があるのか皆目見当がつかない身の上だから、謙虚にずいぶん安い所ばかり探し続けたようだった。

そして反動、すっかり前世の遺物みたいなのに嫌気がさし、出来たばかりで、異民族の家具など何も置いてない、明るく、トイレがきれいな所に決めました。それは、ビルの十一階にありました。

アルゼンチンとは、その国へ一歩踏み込めば、見渡す限りの大平原、大きな夕日が地平線へと、帰りを急ぐガウチョと牛の群、なんて思っていたのに。高く、遠くまで見渡せる私の部屋と決まった窓からの風景は、いつまでも続くと思われるビル、灰色のビルディング。

本物に直面してみないことには、正確なデッサンはあり得ないのだと思いました。

やっとやっと、もう誰に遠慮しなくてもいい所が出来たのです。あれだけの荷物もなんとか治まってしまい、まだ生活のスペースは充分残って。蛇口から水が出ます。湯沸し器があったかいお湯を。ガスコンロに火もつきます。電気は？　というと、スイッチはあるけれど、天井にぽかんと穴が開いて線がむき出しになっているばかり。二二〇V、一〇〇Wの電球を二つ接続し、この国の家々のように、石膏で出来た笠（？）も取り付け、それでも電気はつきません。

もちろんベットはないのだから、山男がアンデス山脈へも持って行ったという寝袋に入って、今

までかつて、こんなに床を感じる状態で寝たことはなかったけれど、やたらとうれしく、今、幸せなんだと思えてしまう。ただ単に寝る場所ということだけでも、この国にて私にとっては大変な努力だったから、こんなことにでも幸せなのであって、傲慢で生意気な私にも、潜在の持ち合わせにしおらしさが加わりました。

かれこれ十日間もローソクで暮らしたかしら。ある日、何となくスイッチを入れてみたら、電気がつくじゃない。いったい、いつからつくようになったのかしら。四、五日前、管理人のおじさんが、ブザーを押して何か言いに来たけれど、結局わからず仕舞いで、大切な用事ならまたくるさ、と思った、あの時だ。たった一言、異国の人の口から出た言葉は、私にはあまりに遠い音。この心細さに〝ゾッ〟とした。

戸惑いを幾つも重ねてアルゼンチン今日は点すよ自分の明りを

十七

日本からの荷物の木枠を壊し、食器や、織物染物の材料など取り出していたら、九十歳の山男の祖母が「引越しには雑布が要るからね」と縫って下さったのが沢山出てきた。いろいろな縫い模様に「ハッ」とする。祖母とは大の仲良しだった。

お使いに行った祖母に、清水次郎長が小遣いを手渡したこと。その当時としては地の果北海道へ、御用牧場の場長をしていた勅任官の祖父の所へお嫁入りした時のこと。歯科医として働く母親に代って、山男を育てあげたこと。山男の仲間の山男たちが、入れ代り立ち代り祖母のまわりに集まってきていたこと。祖母とは短い付き合いで、振り切るかたちで日本を出てきてしまったのだけれど、大福や無花果をいただきながらの話の内容は濃い。高齢で外出出来なかった祖母の為、神前でも仏前でもなく、祖母前結婚式を主張し、泣きごねてまでも実行に移した私。

他人様に白い紙をパッパッと振って御祓いしていただかなくても、私の人生の一番初めの雑布を沢山下さったのだから。何十年来の恩給を全部私に手渡して、「もう貯金する楽しみもないね、だけど、年寄りが若い者の足を引っぱっちゃいけない。どこへでもお行き」と後を向いてしまった人。

祖先がしっかり私の血になっているから国を出ても大丈夫。親の範囲はまったく気楽で、だけど自分が一人になった時の力が全然計れない。木偶漢か、良い力を持ち合わせているのか、もうそろそろ自分を知らなければならない年齢になっていた。このまま日本に居て、私の八十歳になる時のことまでわかってしまうような環境にいたくはなかった。祖先、父母、兄弟、親戚がみせてくれたことを、自分もやっぱり同じだったと念を入れてみる気持ちにはなれなかった。

下の方に生まれ、下の順で家に連なるのはまっぴらだと思い続けていたのだから。

ロサンゼルスまでは親の光りは届いたけれどそれ以後はもう届かない。言葉もゼロになった、知人もいない、何もかもなくなったからもう安心して自分が思うとおりに生きてゆけば良い。

荷物から出てきたばかりの日本のお茶を、アルゼンチンの私の家と決めたその台所の初めてのガスの火で……。足の先っぽまで伝ってゆくような、あまりにも馴染みすぎてしまっていた緑の味。二十年間も、日本で生まれ育って、私は日本以外の何物でもないことは確か。この日本から一番遠い異国にて、日本人私を高めてみたい。

何もかももう無いという安心を求め来たりぬアルゼンチンまで

十八

私の十一階の窓からは、屋上がよく見える。異民族の洗濯物がヒラヒラ。習慣が、国が異なれば〝いったい何に使うのだろう〟という物も干してある。干し方がまた、弛んでいるロープにダラリ――としていて、日本人のようにパンパンピンピンとはなっていない。ワイシャツも首が下、逆立をしているみたいで、気になって気になって。

干してある洗濯物の下で坐っているおばあさん、なにしてるんだろう。いつもいる。よく飽きもせず。そのおばあさんの屋上登場前から、登場中は言うに及ばず、退場してしまって……夕ぐれてきて……それでもまだ眺め続けている私の方が〝飽きもせず、まあ〟と。私の場合、行く所がないのだから。哀れ。一歩外に出れば、たちまち迷子になりそう。いくら考えてもやはり行く所がない。

学生時代、姉の家のピアノの下とか、友人の二段ベットとか、思いたてば出かけてゆき三日も四日も泊ってくる場所があったのに。

自分の居るべき空間は出来、ルーレットの儲け分で買ってきた日本の食料品はワンサとあり、今差し当って困ることはなくなったというのに……。

朝、山男は出かけてゆく。我が家の唯一の椅子に腰をおろす。悲しいなんてはっきり思わないのに、涙が落ち始める。次から次へと……。

幼かった頃、生まれたてで、頭が重く立てないような子猫が雨の中に捨てられていたのを拾い、「他人が捨てた物を拾うなんて、碌な者になれない」「生き物はだめ」と大反対の家族に立ちはだかるように守り、育てた。尻尾が出るように、なおかつフリルがついて愛らしくと、幼ない工夫を重ねて作った洋服を着せ〝将来は猫の洋服のデザイナーになろう〟なんて夢みていた相手の猫が交通事故で死んでしまった時が、物心ついて一番初めの悲しい涙だったけれど、その時以来、二度目の涙の総動員。

食べることも、時間の経過も忘れ、身動きもせず、ただ坐って空ろな涙を流し続ける、という日々がしばらく続いてしまった。こんなに涙がこぼれること、人生にそう何度もないのだから〝心ゆくまで泣けばいいんだわ〟などと自分で自分をみているような面もあって。

十一階に住み始めて、初めての洗濯物を抱え最大級の勇気を奮い起こし、屋上へ干しに行った。私のみ顔を知っているおばあさんが、その人と異なる血の顔をしているにもかかわらず、世界に言

葉はスペイン語しかないと思っているのか、すぐ親しげに話しかけてくる、私がわからないで困惑していることなどおかまいなしに。

まったくわからない言葉にもかかわらず、「洗濯物がなくなるから、乾くまで見張っているんだ」というように理解した。どうしてそのようにわかったのか、わからないのだけれど、「人間と人間、何とか通じるものだ」という思いを持つ。

事実、それから後、日本製のタオルは、真っ先に姿を消した。靴下も、気に入っていた縞シャツも消えた。何をしたら良いのか皆目見当のつかない時間が、有り余っているのだから、私も日向ぼっこかたがた屋上で坐ってようかな。

屋上からの景色は、続く続く背の高い灰色のビルディング。こんなに沢山の人間が住んでいる町なのに、ちょっと出かけてこようという家はない。一言も日本語を話す相手は、いない。

日本より一番遠い国に来て思いていたり日本のこと

十九

日本からの引越梱包の板を上手にはがし、机を作ろうと思いたちました。金槌や鋸が入っている赤い箱は、どんな生活状態の国へ行ってしまうのかもわからない私に姉が持たせてくれました。さ

っそく役にたって、手が傷だらけになる頃、絵の具や絵の具皿が置けるような棚が三段もついた机が出来上がりました。鉋などうまくかけられないから刺がささりそうな机。いちばん上に製図板を置いて机の様相をととのえました。

さあ、これで図案が描ける。暇がつぶせる。ちょっと揺れる机に向かって、十一階の窓から、鳥が飛ぶ。素晴らしく大きくブェノスアイレスのビルの街にかかる虹。向かい側のビルの窓にチラリと人が横切る。ベランダの植木鉢の上にいる猫、異国の生活が見える。家々に電気がつき始め、一番下のビルの谷間の中庭で、一家揃って食事を始める様子、テーブルをととのえ、料理が運ばれて来て、物珍しくのぞきの気持ちで見下ろしていたのに、賑やかな笑い声に思わず涙が溢れる。加速を付けた涙が中庭へ落ちていった。私の部屋は真暗。私が十一階の窓にくっついていることなんか誰も知らない。

小さな子供が、おじいさんも……皆、話をしている。私にだけ解らないこと話している。あまりにも遠い国へやってきてしまった、そのことだけでもびっくりしてしまうのに、言葉がもう……。二十何歳にもなり、意識があるのに何一つ理解出来なくて、その上何かを理解してもらう術もなく。こんな馬鹿馬鹿しいことってあって良いものなのかしら。

何かと話したい一心で、何を言っているのか皆目解らないけれど、引越荷物の一つの小さなテレビを一日中見ている。人物の名前ですら「名前を呼んでいるのだ」という、たったそれだけの発見をするまでに何週間もかかったりして。初めて聞くものばかりだから。

料理番組が一番わかりやすい。どんな食物があるのか見当もつかない所で、テレビに映る物を見、言っている単語をメモし、辞書で調べ、「ああいったことに使う食物は、そういう名前の物を捏ね回して作る」とか。店へ行き、その名前を、テレビと同じ発音で言うと、とにかく食べる物にありつける。

それにしてもどうしてこんなに疲れるのでしょう。異国の空気のもとに居ると思うだけで、もうフラフラ。朝は寝坊、昼間も気が付くと眠りから覚めたところだったり、夜になれば、もちろん寝てしまう。ちょっとゴミを捨てに外へ出、外人の顔をチラリと見ただけで疲れ果て、まして一言二言話しかけられたりすれば重症。ジャガイモを買いに出かけたなどと大それたことをすれば、その日はだめ。涙の次は眠気、疲れの総攻撃です。

生まれて始めて、カボチャを自分で買った日がありました。妙にうれしく、この大冒険は、もちろん母に手紙で知らせました。こんなことで申し訳ないみたいですけれど、私にとって、一人ぼっちで直面した重大な出来事でした。

思えば、家事雑事、一切手伝わないまま二十何年間生きてしまって。何をしなくても食事の時間になれば食事が出来、面白い思想の持ち主の母は、「女の子だから手伝いなさい」とは一言も言いませんでした。「お皿洗ったりするの大嫌い」という私に、「それではそういうことをしなくても良いような生活を自分で作りなさい」とそれだけ。その時は、一生皿洗いなど私のすることではないと思っていたのが大間違い。十一階に閉じ籠り、待てど暮らせどご飯は出てこない。それでも待って

いて、お腹が空き、何週間も引越荷物の中から掘り出した煎餅などかじっていたけれど、やっとやっと、自分で買物をし、自分で作らなくてはならない、ということに気付いたくらいだから。

着物が大好きな母は、山ほど持たせてくれたけれど、立って居れば、きれいに着付けられていた私が、日本語も通じない国で、どうやってそれを着ると思ったのかしら。そこまで考えがまわらないほど急な家出だったからかしら、放っとけば何でも自分でやると信じてくれてのことだったのか。

何はともあれ、自分で動作を起こさないことには何一つ回転、発展、解決……しない生活が始まってしまった。誰に頼まれた訳でもない、自分の意志というほどのものもなかったけれど、自分で始めてしまったのだから。

手を足を話すことすらおどおどと生きて知りゆく自らのこと

二十

アンデス山脈の中の一処女峰へ登ることを企てた山男が、七カ月間をかけ目的を達し、山での飢えのまま立ち寄ったアルゼンチン。その国の何らかのパーティで知り合いになったというルシータおばさんが、私の住いの十一階に登ってきて、スペイン語プラスパントマイムで「今まで描き溜めた図案を持って、ついておいで」というらしい。どういういきさつなのか理解出来ないまま、学生

時代に描いたのから出来たてのも、取り急ぎ重く提げ、何歩か後れつつルシータおばさんに従うこととなる。

かの有名なタンゴ「カミニート」の発祥地、家々が積木みたい、積木箱をひっくり返したような色、色、色の町ボカのキンケラ・マルティンの美術館へと……。

「あれよ！　あれよ！　そんな所通って良いのかしら」と思ってしまう所もどんどん通り、とうとう美術館の主、キンケラ・マルティンの部屋まで入ってしまい、やたら近寄れないようなその偉い人の前へ、私の図案を広げてしまっている。ルシータおばさんが、動作大きく早口で、何んやかや言っているのを、訳の解らない私は、他人事に思え、そっぽの方向。「あら！　彼の絵と同じ」と窓枠が額縁の役目をしている港漁船の風景を見ていた。

「教会を作る、そのステンドグラス絵のこと」「美術館付属の幼稚園の壁に描く絵のこと」に私を売り込んでいて下さったのらしいことがうっすらとわかると、非常に恥しくなった。私の出る幕じゃない。宗教の絵といえば宗教も違い、習慣も知らない。まして説明を受ける言葉をも持たない、たった今、この国にまかり出た私などに描ける訳がない。幼稚園の方もだめ。児童心理なんて知らないもの。子供をわざわざいじめようとは思わないけれど、進んで近寄ってゆく方法を知らない無器用人間だ。私の出来ることは、まったく私の範囲内のことに限り、〝何とか自力で生活たったら良いな〟とは思わない訳ではないけれど、外国で恥知らずなことしちゃいけない。私の名前より前に国の名がつくのだから。

その偉い人はやさしい人で、役に立たないとわかった私に、彼のスペイン語で書かれた自伝と絵画集にサインをしてプレゼントして下さった。そして、「いつまでも続けて図案を描いて、また持っておいで」と言って下さった。

「一本釘が足らない人間だから補給している」と釘のブローチを御自分の胸に付けていらしたキンケラ・マルティン画伯、ありがとうございました。

帰りの道々、石を蹴っとばしながら……石畳をイレギュラーに飛んでった石。何がというほどの自覚もないまま、一粒、二粒……涙が流れてしまった。

次の日もまた「図案を持ってついておいで」が始まり、今度は、ルシータの友人の姉君が室内装飾家で、画廊兼スタジオを持っているから、ということで、何も言えないから、他人のなすまま、のこのこついてゆきました。

目的の場所には、私とはどういった関係が出来上がって逢っていただけるのか、またまたうやむやのまま、おっかないみたいな、堂々と立派なおばさんがいて、「こちら悪くもないのに」と思うのに、怒ったみたいにガミガミ言われ、後でゆっくりルシータが説明してくれたところによると、「大変気に入ったから、自分の画廊で展覧会をする」と言ったのだそうだ。私の意志など聞かれなかった。彼女の考えでもってそう決めると、助手の美しい人が出てきて、「この作品の意図は？」とかを、英語とフランス語とスペイン語とを混ぜ、「これだけゆっくり親切に言ってもわからないの？」とばかりに聞いて下さるのだけれど、私には、ただ日本語だけで聞いていただければありがたいの

であって、うまく一致しないのを、なだめなだめの会話で、「何が何だかもう知らない！」と思ってしまう頃には、日も決まり、スペイン語の案内状も出来ることになってしまったらしい。

「いつ！」「誰に！」その招待状が送られていったのかも知らないままに、とうとう問題の日付になってしまった。

石ころは方をたがえてころがれりアルゼンチンのこの石畳道

二十一

アルゼンチンに辿り着いて半年ほどです。夜八時から始まった「私の個展」の初日は、着飾った人々が画廊の外にまで溢れて。いったい、どういう方々が私のために集まって下さったのでしょうか。何にもわからないまま当事者です。

カクテル形式で、黒いスーツの堂々としたボーイさん、こんな方にサービスしていただいてもよいのかしら、と躊躇してしまう。ウイスキーやワイン、カナッペを上手にすすめられ、ロングドレスの行き交う中、あちらの人こちらの人と皆さん知り合いの様子。親しげに、話し、笑い、画廊内はとても盛り上って。

主役ということになってしまっている私は映画のシーンさながら、昔の貴婦人のように紳士方か

ら手の甲にキスのあいさつを受け、もうびっくり。一生懸命堂々としていました。淑女方からのあいさつは、頬に口紅がべチョッとついてしまいそう。キュッと抱きしめられると、私なぞその豊かな胸の上に乗っかってしまって、足をバタつかせてしまいそう。

心細げな、言葉のわからない東洋人の私に、アルゼンチンの人々は、力強い力、厚みのあるやわらかい肉体、あったかかった体温。私が身体で知ったアルゼンチンの感覚。日本では、こんなに人に触り合うということがないのだと改めて思い至った。

夢やこの私に、こんなにもロマンチックな晴れやかな夜が巡ってこようとは。自分ではないような幸せな気持ちの反面、知っている顔一つなく、頼りのルシータは接客に忙しく、皆が話していることは皆目わからない。大きなショーウインドーに、懸命に立っている私が映っていた。日本から、あまり遠い所で立っていることが強く思われ、涙がでてきてしまう。

もう、アルゼンチンまで涙を流しに来たみたい。だけど必死で思った。こんなに涙が出ることは、これから先の私の人生にそう何度もあることじゃない。思いの限り泣こう。心ゆくまで涙を流そう。

私のありったけを飾り、新聞にも出て、テレビカメラを持った人から「この作品の所で指差して下さい」とか「皆で説明を聞いているような感じ」……ちょっぴり演出もされ、画廊専属のカメラマンのフラッシュも会場の華やいだムード作りに一役買った。

日本人だから、と猿回しのごとく、珍しがられての見世物だったのか、それとも私の作品を本当に見て下さったのだろうか。とても気になった。

決して私は、日本を売り物にしたくはない。人種を超え、さりげなく、しかも貴重な存在でそこに居たい。着物で注意を引くよりか、相手方と同じ立場の洋服で、ひけをとらないで居られただろうか。

外国へ行くとパーティが多いそうだからと出発前の残り少ない日、母と選んだリボンレースのドレスに、常に母に似合っていた濃い紫のネックレス、がそっくりこの日の私に。

このスタイルで、美しく華やかな姿、その上、洋服の歴史の長い人々に対したわけなのだけれど。何はともあれ、一番大切なことは、私の作品、図案、染物、織った布、がアルゼンチンの人々の心をとらえなくてはいけないのだけれど……。

立つているほほえんでいる涙の顔ショーウインドーに映つていたり

二十二

恥ずかしいという思いも沢山持ちあわせていたけれど、主役になったことが素晴らしかったから、十一階の小さな部屋で、またせっせと図案を描き続けました。日本の絹に、木綿に。ちょっと発展して、アルゼンチンの絹にも染めてみました。ルシータが〝アルゼンチンの絹〟という店へ私を連れて行って、大きな店なのに、小さな単位の私の壁掛け用サイズを切ってくれました。

コチョコチョと小さな物より、壁いっぱいになるような大きな作品が好き。従って、部屋いっぱいに布が広がることになり、伸子を張ってハンモックみたいに吊るした布の下をハイハイしての移動を余儀なくされ、それもまあ愉快なことでした。

張りめぐらした布の下で、引越し荷物の割れ物を入れてきたリンゴ箱の上に、茶碗と箸それに座蒲団もあったから。これでも生活出来るという知恵が、アルゼンチンで湧きました。

私たちの住む十一階建の建物の中には、イタリア系アルゼンチン人、スペイン系、ドイツ系、英国系……とさまざまな国からのアルゼンチン人たちが住んでいますけれど、生活様式も生活態度も、アルファベットを使うこと、食事の様式……ほぼ同じ様なリズムで十階まできて、十一階になってこのリズムの乱れ様。建物の断面図を思っておかしくなってしまう。人並ではない方が気が楽な天の邪鬼の私には、これ以上並ではないこともあまりないのだから安心して居られる。

小雨降る日、イタリア人の八百屋へ。辞書を見て覚えたばかり「カモーテを下さい」と言ったら、八百屋のおにいさん笑ってしまって。こちらは「薩摩薯を下さい」と言ったつもりだから、何を笑われているのかわからなく困ってしまう。正統スペイン語は、薩摩薯はカモーテ、アルゼンチン語はスペイン語なのだけれど少々方言となってバタータというのだそうだ。そしてカモーテとは「愛しい人」というような意味になるのだとかで笑われた訳なのだと。食べることが第一優先で、愛とか恋という分野を遠く忘れ去っている時に、まして金髪や目の色が違うひとの存在は、見ているだけで疲れ果ててしまう時、はしたなくも、八百屋のおにいさん相手に大したことを言ってしまった

ことになる。

それでも首尾よく薩摩薯の重量感に満たされて救いの我が家に帰ってみれば鍵が開かない。「壊れてしまったんだ」「どうしよう」「そうだ、管理人に相談しよう」。手真似やら単語一つ二つで現状を説明し、助けを求めた。

「鍵屋を呼んで来るから、ここで待ってなさい」と管理人の住いに通され、示された椅子にチョコンと座って……。管理人のおかみさんは、ほとんど開かずの扉の私の生活を知りたくウズウズ。聞き出しにかかるのだけれど私には答えてあげられる言葉がない。言葉がないということは、赤ちゃん同様であると察したのか、今度は教えのムードです。それも目玉焼の作り方とか、肉を鉄板に乗っけるとか。まあ外人もやっぱり玉子をパカンとしただけのものを食べていることがわかったことは収穫だった。教えの中には「罐詰は一度開けたら、残っても罐の中へ残しておかないで他の容器に入れ変えて保存のこと」というのもあった。冷蔵庫を開けての熱演だからよくわかった。それにしても大きな罐詰。残るのは当然だあ。

こんな単純な会話にも対等に割って入れる日はいつ来るのだろうと思ってしまう頃、大きな鞄を提げ、大きな背中が雨に濡れている鍵屋さんの応診。鍵の国の専門家にかかってトントンと三度ばかりの音でもう開いてしまいました。鍵屋さんに付きっきりで様子を見ていた管理人夫婦はびっくり。だって家中に布が張りめぐらしてあって、立って歩ける隙間なんて全然ないんだもの。こんなの見られて〝シマッタ〟けれど仕方がない。そこでまた「何を作っているの？」「どうやって住んで

いるのか？」その布を通り越しての質問あれこれ。どうせ上手に説明出来ない身〝もう聞かないで〟とばかりに「ありがとう、ありがとう」と家の中へ逃げ込んだ。

目まいがして倒れてしまいそうに疲れ、その日はとうとうリンゴ箱の上に薩摩薯料理を乗せることも出来なかった。何にしたくて薯を買いに行ったのかも忘れてしまったのだけれど。

ようやくにスペイン語の国に住み始め教えられをり目玉焼次第

二十三

そろそろ〝外国人〟に対して開き直らなくては。無理に図太くなってみようと思いたった。まず手始めに、自分が住むことになった辺りを探険しよう。

碁盤割りの街並は、四角く歩けるから自分の位置に戻り易いと身を持って知る。歩道がゆったりと人間を尊重してくれて、少し歩くと尖った屋根の教会に出逢う。

それぞれの道に、それぞれの木が植えられ並木。それぞれの時に、それぞれの花を咲かせ、葉を散らす。ティパの並木道は黄色の花に満ち満ちて、道はまるで黄色の絨氈。ハカランダの道は踏んでしまうのがもったいない。でも踏まずには歩き進めない。ぎっしりと敷きつめたみたいに溢れ花。その淡紫に立ち止まり見上げれば枝々は淡紫。どこまでも続いてゆくかの淡紫。それぞれの道が、

銅像、国旗掲揚塔、ベンチのある公園へと続く。

両掌に余るほどの拾い花を持ち帰り、水に放して暫くは、はしゃげる。たった一人の遊び。「きれい！　日本で見たことなかった、きっと豆科よ」などと話す相手が欲しい。

早朝、牛乳やソーダを積んだ馬車が活躍する。馬車がうれしくて私もさっそく牛乳を届けてもらう仲間入り。目覚めて、ドアを開けると、まちがいなく牛乳が置いてある。馬主のおじさんが十一階まで上がっている間、きっと馬は下を向いて待っているんだ。〝私の為に牛乳を運んでくれる人がいる〟たったこれだけの、異人のおじさんにとっては何の感情も入らない仕事なのでしょうけれど、私は〝一人ぼっち〟という思いからずいぶん救われたのでした。だけど一リットルが最少の単位にはまいってしまう。山男は私と日本語を話す暇もないほど外に居て、時々食べる顔と寝顔しか見ることがない状態だから、牛乳を飲まない。そこで私一人一日一リットルに挑戦が続くわけで。

「ご飯作りなんて、したことない」という私。「大丈夫、俺が作って食わせる」という山男にうかうかついてきたのだけれど、それは、たちまち過去の浮いた話となり、何か食べられる物……が私にのしかかってきた。そこで、牛乳でご飯を炊き、塩、コショー、最後に卵を入れて出来上りと知恵を振り絞って作ると「俺は今、山に居るのじゃない」などと小言を言う。十一階は結構高いのに。

行き交うというほどでもないけれど、自動車の中に混じって馬車がゆくというのを見るのは、ほのぼのとしたのに、日毎増え続ける自動車には勝てず、首都圏馬車乗り入れ禁止令が出てしまい、朝、パジャマのままドアを細く開けて牛乳を取り込むことも自然消滅。従って、わざわざ店まで出

かけてまでも牛乳おじやを作るほど気に入っていた訳ではないので、私の開拓の味として、ちょっぴりは心に残るか、いさぎよく忘れ去ってしまうか。

蔓で作った椅子や籠、それに類した品物をそれこそ山盛りに積んで、売りに来ている馬車を栴檀並木で見かけたりするのも、ほっとするうれしさだったのに。私のパン籠も果物入れも、お馬さんから買いました。馬車に代って自動車に同じように積みあげて売りにくるようになっても、どうも有難味が薄い気がして。

最後のアルゼンチンらしいアルゼンチンの様相に間に合ってアルゼンチンへ着いたような気がしたのでした。

地の色を淡紫に変えているハカランダ並木をひとりでゆきぬ

二十四

石畳。水道工事、ガス、電話、電気とあらゆる工事毎に掘り返され、その都度「こんなに余ってしまって大丈夫？」と石畳石が道の隅に残り、積み上げられ……だんだんガタボコ道になってゆく。

昔のこと。農牧国アルゼンチンは、ヨーロッパへ穀類を輸出し、空船で帰るのはなんだからと、イタリアから運んだ石で、囚人たちが働いて出来上がったというブェノスアイレスの石畳道。それ

にしても何と大変な量の石を運んだものでしょう。小さい石の石畳、大きな石の石畳。亡びゆくものへの感傷でしょうか、石畳は物思わせる要素が沢山あったのに、私がアルゼンチンへ着く少し前まで市内を走っていたというチンチン電車の線路も、掘るなどということはせず、そのままままとめてひとなでのアスファルトの下敷となってしまう。なめらかなアスファルトの道を自動車が跡絶えることを知らない。

工事の跡の、残ってしまった石畳石を一つ拾って、アルゼンチン風ではない、日本の漬物らしきを作る重石にしようと思いたちました。都合の良い大きさ、重さで、この余り石を日本に輸出し、アルゼンチンから来た漬物石なんて……だけどそんな重い物を動かすだけの馬鹿力の実行力はありませんでしたので、地球を三分の二周することなく、石たちはアルゼンチンの地に眠る。

大根の葉の青々と漬け上ったのが大好きだから、石を拾ってからの日々、大根探しに熱中するはめになったのだけれど、アルゼンチンの人たちが食料にしない大根は入手困難で、大根への夢はつのるばかり。

いつの日にか、その日が近ければ近いだけ良いのだけど、アルゼンチンのどこかに小さな私の領分、大根の種を蒔こう。ついでに三つ葉も韮も紫蘇も。日本国を離れてこのかたお目にかかれない草々。恋う。

蒔いた種は芽となり、成長し、それぞれの姿美しく、夕餉には三つ葉のお澄し、あしたには大根のお味噌汁。紫蘇の葉に味噌を包んで油で焼いたの好き。韮卵も。卵は産みたてホヤホヤ、先ほど

草を分け拾い集めてきたばかり……ということは、私の範囲内をにわとりが啄み、黒と白色の乳牛も居なくては、チーズやヨーグルトを作ろう。逆のぼってしまった織のために、毛糸の元の羊にもウロウロしてもらわねば。綿の木も植えよう。太陽はいっぱい、緑の中をただよう風。畑に残った野菜はいつの間にか一輪差しにふさわしい花となり……。そうだ窯を築いて花瓶も作ってしまおう。

アルゼンチンへやってきた本来の目的が達せられたら、大急ぎでこんなままごと百姓をしてみたい。いつになったら、何を根拠に達成、というほど大それたことではなく、自分のしたいことをしながら生きられるようになればという程度で。

空想から覚めると、日本の味を作り出す葉っぱが全然ないんだもの。もうどうしようもない。

土地も言葉も友だちも何にもないけれど、私の時間だけはいくらでもある。そしてそのいっぱいある時間をつぶしている場所は誰かに邪魔されることはない十一階のこじんまり。考えると、やりきれない。アルゼンチン中で、私の邪魔をしてくれるのは山男ただ一人。果てしなく続く大きな国の全人口の中のただの一人すら、私が部屋に閉じ籠って、一キログラムの小粒なブドウの皮をむいてはつるり、もう一つむいてつるり……このブドウを食べてしまったら、あと何をして過ごそうかと途方にくれながら。時をつぶす苦労をしているなんて、気にもしてくれない。いつまで時をつぶしてみたら私の世界は開けるのかしら。私が生きていくうちで、今日が一番淋しい日かな。あしたの方がもっと淋しいかな。こんなに淋しくなるまで我慢をしているのに、私はまだ我儘かな。

「事情は定かではないけれど、着飾る物、住飾る物……そんな物より、私は素敵にエレガントな

心を持ってアルゼンチンへ行く」と思っていた。掃いて捨てたいほどの無駄な時間をアルゼンチンで過ごしている今が、私のエレガントかと心細い。以前の憧れや夢は、次々と現実として現れ、思っていたこととは食い違いすぎる。これが大人になるということなのかしら。私も、泣かないで何にでも立ち向かってゆかれる人並の大人になれるのかしら。

蓮華色母子草色菫色草汁絞りて並べし日ありき

二十五

何カ月間もひたすら律義に部屋に閉じ籠っている私の存在を心配して下さる人が現れた。地球単位で巡った縁で、隣の同志となったアベ・マリアさん（ドアにそう書いてあったから）が、「スペイン語を習いなさい」と当国の中学校の先生を連れてきて下さるという予告に、アイス紅茶を作り、引越荷物の中から品川巻の袋を取り出し……初対面のあいさつとなる。

紅茶は万国と思っていたのに、「アイスにして飲むのは知らなかったわ」というのが、ノラ先生との話のきっかけでした。もちろん品川巻というのをノラ先生が口にするのは初めてのこと。

私より少しばかり年上、小柄な、黒い髪、スペイン系の美しい人。私は言葉のない赤ちゃん同様なので、えらく頼りに思え、この出逢いをアルゼンチンへの足掛りにしたい、と思ってました。

欲ばって週三回。バスに乗って出かける所が出来た。迷子になるといけないから、私の方へ先生が来て下さるとのところ、私としては外へ出たい。今まで、当もなく一人外へ出て……公園にたどり着き……ベンチでキョロキョロしてみても……家に籠っているより寂しく、みじめになってしまう、という事情の時。外へ出るきっかけが欲しかったのだから。

持つ限りの神経を堅く集め、バスに乗ること二十分。プラタナスの並木道にバス停。まだ残っていた石畳道を歩く。ガラス屋、八百屋、クリーニング屋、パン屋……「あった」教えられたナンバーの建物。エレベーターで三階。「よかった！」私のめざす人は、ドアを開けて待っていて下さった。

大きくはないけれど正しく外人の住い。ドッシリと世代を重ねた楕円のテーブル。皮張りの椅子。「飾り棚に日本人形が！」どんな経緯でノラ先生の家に落ち着くことになったのでしょう。私より先に一人ぼっちだったんだね。これからは、いつも私がこの家に来るのだから。

ノラ先生との勉強は、スペイン語だけ、と日本語だけ。どだい無理な話なんだけど、そこは女同士、台所へ入り込んで、物々作戦とは、鍋とか台所用品の絵を描き、ノラの口からの言葉を書き添える。パントマイムみたいでもいいし、辞書もある。

暇にまかせて眺めていたテレビの料理番組との関連がでてきて「そうか、このことを言っていたのだ」と頷け、なんだか話をしたような気持ちになり、帰りのバスの中では、余裕を持って町並を見ていられた。

ある時は、ノラの作ったお菓子のおやつがでて、その材料、作り方がその日の勉強だったり。ノラのお母さんとノラ夫婦という構成の家。お母さんがノラに洋裁を教えている所に行き合わせ、私もそのまま教わったこともあった。親が子に伝えてゆく図は、ほのぼのとして、だけど私の母は遠い、何にも教わらないうちに。この国では、自分の娘と同居の老後が普通とのこと。その方が摩擦がなくて利口な生き方だな、なんてノラ家を見つめながら思った。

主婦ではあるけれど、子供がいなくて、教師だから教えるという意欲が旺盛で、授業外にも、美術館、ブティック、お菓子の店、美しく造園された家々の地域、ラプラタ河のほとり、朝早くから出かけた一日のピクニック……、次々考え出しては、毎回新しいブェノスアイレスを見せてくれる。

「アルゼンチンに友だちあり」と日本の母に手紙した時の、ふっくらとふくらんだ私の心。

あまりうれしい私の気持ちを、言葉で現わし得ないのがもどかしく、十一階の小さな我が家にお呼びして、日本の味を味わっていただこうと思いつきました。

ティパの実の黒きを踏んでゆきゆきぬラプラタ河の水寄るところ

二十六

初めて外人のお客様を迎える日、何ったって日頃の一人ぼっちを返上して山男が協力しなければ

どうにもならない。朝早くから、この地到着以来の豪華な買物。

今まで食べ続けて生きてきたのだけれど、作ったことはない私が、人をもてなす料理をしようとするんだから、何から手をつけたものかとオタオタするばかり、少しもはかどらない。

簡単だと思っていたことで一番大変な作業となってしまったのは、スキヤキ用に適しているかなと選んできた肉塊を、ヒラヒラのスキヤキ用に切ること。

雨にはぬれ、雹が降れば傷つき、日照りをよける何物もないような、なかば野生的に育った牛肉の塊は、ユラ、グニャ、とても思うようにはいかない。厚くなったり、穴が開いたり、もちろん悪いのは腕なんですけど。

引越し荷物の底の方から、しいたけも春雨も取り出し、晴れ舞台へ登場させよう。

なぜか人参も千六本、葉っぱがないからキャベツも入れよう、ねぎの代わりは玉葱。こんなのスキヤキとは言えない、といえばそういうことにもなるけれど、ここはスキヤキの里よりあまりに遠い。味だって遠くなったって仕方がないよ。

スキヤキについての思い出は、昔、浅草で「濃く淡く、あ、ほのかに牛乳の味がする」と夢かうつつかのような味を知ったけれど、あれはもう遠い日のこと。現実は、脂を取り、筋を切り、骨まで、と肉の塊りと闘うこと。

食べたことさえあれば、なんとか似た味を作り出そうとするもので、それに友人が、出て行く船に投げ入れてくれたのが〝食べ物をいかにして作るか〟という本だったから。そういうものが、よ

もや役に立つとは思ってもみなかったのに、この本によって、中味は足らないながら茶碗蒸しらしきものも出来上がり、テーブルクロスだ！　ナプキンだ！　と騒いでいるうちに〝リンローン〟とお客様の到着。いつもより早く起き、掛り切りだったにもかかわらず、夜八時半、涼しい顔で来客を迎えるのにまだまだ時間が足らなかった。

「初めて日本人の住いで、日本の味への招きを受けた」というノラは、美男子という形容が本当にふさわしい旦那様を得意気に連れ、もちろん初対面。彼等の方もおっかなびっくり、私の方も心配に満ち満ちて。真紅のバラの花束をいただく。パッと部屋が華やいで、日本の布を広げたテーブルで夕食開始。

茶碗蒸しの説明ったって、まず蒸気という単語がわからなかったし、プリンと同じようなこと、と自分では説明したつもりでも、相手にはどこまでわかったことやら。適当に頷いて下さってしまったみたい。同情。まったく、こんな年にもなって話したいことが話せない、なんてみじめな、なさけない思いをする。

それでも会話らしきがはずむうち、とっておきの伊万里の茶碗も空になった。

それからがいよいよ本日のメイン――スキヤキ風スキヤキの開始。まず鉄の黒々の鍋に賞讃の言葉があり、脂をジャーに始まると、「これ何？」の集中攻撃。デコボコ切りの肉も大皿に平たく並べれば、オードブルの生ハムみたいで、「え！　ハムを煮るの？」「砂糖！　を入れるの!!」醤油には「ずいぶん黒いワイン」見る角度が違うのがひしひしと。

茶碗蒸しはスプーンで食べることにしてしまったものの、スキヤキはやはりお箸でなくては。お箸の使い方の練習、よくまあ、こんなに不器用なと思うほどの腕前だけれど、ちょうど煮えてきた鍋の中の食物を、お箸に引っ掛けるという形容ではあるけれど、とにかく東洋の箸を使って、スペイン系アルゼンチン人とフランス系アルゼンチン人が、丸い地球でたまたま私たちと知り合い、スキヤキの席を共にするという図が出来た。

「うまい、うまい」「ご飯にこの汁を掛けてもいい？」とスキヤキの煮汁を掛けることを思いついたのはアルゼンチン人。「こんなおいしい物、今までかつて食べたことない」と引っ掛けるお箸もどかしそうに、煮える片方から。フォークもスプーンも決して使おうとはせず。礼儀作法を尊ぶ美しい顔の外人がそれどころじゃない、といったありさまで。

外人側は自国の強みか、たちまちリラックスして、よく話をする。山男が一人受けて、私に至っては、〝何について話しているのか〟ということすらわからない部分が多い。ダンマリのわけにはいかないから「トーフは白い、白いはうさぎ……」なんて言ってみたりしてスキヤキの味作りに専念する以外ない。

朝のうちは、まだ異国の言葉を聞こうとするけれど、だんだんその気がなくなってきて夜になったら、スペイン語の席に連なることも苦痛になって、それでも我慢していると、こめかみの辺からズキズキしてくる。

おかしなもので、日によって良くわかる日、今日は全然だめとお手あげの日、があったり、進歩

しているのだろうか。

でも、ここでアルゼンチンの人と席を共にすることを嫌がって逃げだせば、何の為に移民船なんかに乗っかって日本国を出てきたのか意味がなくなってしまう。絶対に自分を甘やかしてはいけない。適当に誤魔化して楽な方に傾いてはいけない。目先の楽よりも、もっと華麗な楽が欲しいのだから。目的の楽に向かって、涙を流しながらでも、痛む頭をなだめながらでも、私は負けない。

大それた決心でもって日本を出てきた訳ではないけれど、大勢の人に「行ってきます」と言ったのだから、何事もなく、「やはり日本の方が住みいいわ」と帰るわけにはいかない。

日本に居るよりずっとずっと条件の悪い中で、日本で経験してきた以上に自分自身で築く自分の範囲。

来年の桜桃の頃には、スペイン語でケタケタ笑いながら話をするぞ！　と思いながら、ブッカキ氷にのっけた桜桃のデザートを用意した。

みな種となり、氷がとけてしまっても会話は続きながら、土曜日だったのが日曜日となってゆき、私はただ我慢して坐っていた。

すき焼の湯気の向うに花咲くよアルゼンチンの紅のバラ

二十七

たった一席、ちびたスキヤキを共に食べるアルゼンチンの友と巡り逢うまでにも月日は沢山過ぎた。その間、山男の表の言い種「アルゼンチンへ、ビフテキ食べにきた」というそのビフテキを食べ続ける経費を念出する方法。乗ってきた船の倉の部分に積んであったという、ラジオ、テレビ、ステレオ等に内蔵されている何やら小さな部品、を作る機械はブェノスアイレス港の倉庫に入れられたきりいっこうに御興を上げる様子はない。

先回、山男がアンデスの山々へ登りに来たついでに立ち寄ったアルゼンチンで、コンデンサという小物を作る会社は無いのだけれど、需要は沢山あることを聞き知り、日本の部品会社と話をつけ、月産何万個とか作れるだけの準備でもって、山男の人生初仕事となるべく、アルゼンチンへ移り住むこととしたのだそうだ。

私は、いつまでも学生でいるような、浮かれているうちに、山男の「この船に乗る！」との半ば命令に、とりあえず自分の全部を抱え、移民船の船底におさまってしまった、という訳で、部品など作る片棒をかついでいるなんて考えてもみなかった。

アルゼンチン国は、中古機械輸入禁止（その当時）なので、新しい機械を用意してきたはずが、開けてみれば中古品であって、クレームがつき、通関ストップとなった故。「南米の国なんかこれで充分」などと、相手国を侮って意気がる日本の会社がいけない。

日本から、機械を動かすべく若い技術者二人は、勇みこんで来てみたものの仕事は始められない、東北弁より突如スペイン語になってしまったのだから大変。いつ仕事が始められるか見当もつかず、ブラブラと時をつぶさねばならず、言葉もわからない「この会社大丈夫かな、騙されたんじゃないかな」などと思うことでしょう。

山男は言い出しっぺ。連れてきた責任上、経済的にも精神的にもめんどうを見なくてはいけないわけで、三つあったカメラはまず一番先に売られていき、技術者への月給の足しになった。私の唯一の友であったテレビも売られて行く運命となり、ステレオも、日本の人形は税関の人に生贄にされた。「今度は何を売ろうか」なんて会話をする、ありがたいことに日本の品々を欲しがる人には不自由はなかった。

その気になれば、売れるものはいくらでもあるけれど、父母の心の品々、私の好きな物を、そのまま売ってしまうなんて「いや」。

仕事さえ順調に始められたなら。中古機械とケチがついて通関出来ないが故に、予期せぬ出来事が多くなってしまう。

まったく、税金も払ったことがない他人様の国へ、ドヤドヤと入り込んできて、そう事が思いどおりに進むわけはないのだ。ということと不慣れの数々が不手際をまねき、いくつもいくつも悪への要素が重なってゆく。

山男は、連れて来た技術者と共に、野球をして暇をつぶすことに思い当り、アルゼンチンの野球

連盟に申し込みをして、「あれよ！」と思う間に公式戦で打ったり、走ったりしてしまっていました。この国では、野球はまったく忘れられた存在。何といっても人々の興味はサッカーです。でも広い国だから無造作に野球場もありました。中心部を除いては足首どころか膝にとどくような草が生えたまま、グランドの続きの草を踏み踏み席に着くなんて。観客席は、しなうような木が渡してありました。観客といえば、ポツンと一人ぼっちの私の他は、ずっと向こうにぴったりと寄り添った恋人たちが二組、三組。

そして試合が終わると、次の日一流の新聞のスポーツ欄に、昨日の野球の結果として、山男の名前も四打席二安打なんて出ている。

私たちをおおいにとまどわせてしまったアルゼンチンの国が、返してくれたほのかな安らぎ。

私の命を保つ幾日か日本人形売られてゆけり

Yuri

野球をしたり、遅々と進まない中古機械の通関手続、私のノラとの散歩、染物……その間何の収入もない。持っている全財産を広げ月々の家賃、いくばくかの食費……。計算では「二年間は暮らせるよ、クヨクヨしないで勉強費と思ってお金尽きる日まで生きてみよう。その間に、この国に慣れて、小さな部品がいよいよ造れないという事態になれば何か他のことを探せばいいよ」と結論を出し、二年間に向かって暇つぶしが始まった訳だけれど。

計算で二年間暮らせるはずでも、現実はそううまくはいかなかった。何しろ収入のない大人が四人、寝て食べ、工場建築中の予期せぬ出費、通関の為にも……あらゆる面で思わぬ費用がかかる。アルゼンチン国に着いて一年目がやってこようとするよりも前に、目的の仕事を始めるに到らないうちに、所持金は底をついた。

最後の一枚のお札を持って、山男とビールを飲んでしまった日のこと。キルメス印のビールの泡、リバダビア通りの道に面したテーブル。忘れてはしまえない一シーン。帰りの夜道、石畳を歩きながら「さっぱりした、すっかり終わってしまって」。その夜は、私の人生のうちの大きな出来事であったはずなのだけれど、歩きながら見上げた星は、あまりにも沢山清かったことの方がうれしくて、「明日からどうしよう」なんて思わなかった。呑気なのか、怖さを知らないというのか、一つのゲームを楽しんでいるみたいで悲愴感には至らなかった。

退屈だし、ちょうどお金もなくなったことだし「働いてみたいな」と思っても、言葉もわからなければ習慣も……何もかも、一人歩きすらままならない所で誰が雇ってくれるものか。この期に及んでプライドというものはデカデカとしていて譲るということを知らないし、「洋服のポケットを片っ端から探したら、いくらか出てきた」なんて喜んだり、本の間を探していたら面白い所にゆき当って、そのまま読み続けてしまったとか……笑い話で暮らしていても、それでもいよいよ「したいことをする」という目標から日々遠くなることに気付き、私にはもっとも不向きで「よもやそういうことはあるまい」と思っていたことではあるけれど、前々から声が掛っていたのを頼りにし、日本からアルゼンチンへ来て間もない小学生の女の子二人の絵の先生になってしまった。社会や理科や国語の日本の教科書をも頼まれ、アルゼンチンならでは、日本の遠さが思われる俄先生。

子供たちを連れ、パレルモの公園まで絵を描きに行ってしまうほど勇気を出してみたり、その絵は、ハカランダが満開で、花の落ちた地面もハカラングでした。その淡紫を拾い糸に通して首飾り、水に放す、本の間に押す、子供たちの存在で、私にも日本で育った子供の頃の思い、笑い、心がもどってきた。

理科の実験では、頼られている先生となったんだから、いつか通ってチラリと見たのを思い起こしつつ、ブェノスアイレス大学医学部近くの薬局まで、細いガラスの管や試験管、ビーカー等買いに行った。

ビンにコルクの栓をして、ガラス管を通しビンをお湯につけて温めると、空気が膨張しあぶくが

プクプク出てくるという実験。昔々その実験をした日のことが思い出されて。設備、既成の材料のない所で、簡単なことではあるけれど、とにかくしてみなくてはいけない実験が次から次へと続く教科書と同じに試みるのには、材料集めに大変苦労したけれど、この子たちの決して忘れないものとなるでしょう。でも案外、私一人喜んでやってたのかもしれない……なんて。

授業後、子供たちと散歩して「あ、露草、日本と同じ、だけどひとまわり大きいみたい」と草々花々を見つけ懐かしがったり、新しがったり。日本と異なる形の家々、住い方、庭、子供たちと一緒にスケッチしたものは、私の図案となり、織物となり、次の個展へと。

こんな家庭教師みたいなことがあちこちから、けっこう忙しくなりかけた頃、あの手この手を使い続け、サビサビにはなってしまっていたけれど、機械がやっとお出まし。大きく重い鉄の機械が幾つも、なんとか形がつきかけている工場へ運び込み、さっそく整備が始まる。喜びはしゃいでいる技術者たち、日本で実習してきたことを忘れてしまってなければ良いけれど。花形野球選手たちも、もう野球どころじゃない。

この鉄の塊を見た時、私の知らない間にこれだけの鉄を我が物とするのには金銭的にも、信用的にも、やはり山男はたいしたことをしていたのだ。私も手伝おう。何も知らなく、まったく私の範囲ではないけれど、こんなにも待ち望んだことが始まるのだもの。

とても楽しい日々だったけれど、冷血を発揮して、子供たちに「さよなら」した。

かそかなる気配を肩に感じたりハカランダは散る私に散る

二

朝、六時半には家を出る。バスに乗ること十五分ほどで、工場に着き仕事開始の段取り。指先の細かな仕事。首は痛い、肩も、腰だって。だけど「手伝う」と宣言してしまったから、どんなに身体にしんどくても、早起きもあきあきするほど単調なことがくり返されるだけのことでも、それについて「文句」を言うという知恵がなかった。ひたすらその作業に関して、いかに上手に、早くやってのけるかを工夫しつつ。

山男と私には、これで今日の仕事はお仕舞いとやめてしまえる時がなく、夜ふけても、この世にどんな行事があろうとも、働き続けた。

一番小さなサイズの一番初めの百個が出来た日。「神様ありがとう、作ろうとしていたものを作らせて下さって。こんなにも物事を望むということを知らなかったの覚えたもの。大変望み、大変な努力をしないことには欲しい物が飛び込んでくるものじゃない、ということ自分で知ったもの」

「欲しい物は常にあった」という生活から抜け出てきたことが新鮮。

欲を言えば、もう一年前に、これが作れていたのなら、少しの涙で乗りきれたかもしれなかった

のに。

出来たてのホヤホヤをビニール袋に詰め、電話帳で調べた電気メーカーへセールスに出かける山男。

「途中、コンデンサの入ったビニール袋を抱えてバスに乗ったら、袋が破れてバスの床に、バーツとこぼれてしまったんだ、まわりの人が助けてくれて、拾い集め、後で数えたらちゃんと百個あったよ」などという話も加えつつ、次の百個が出来上る。また袋に詰めて出かける。

なかなか信用されなかったり、密輸か正当か、その部品を使用するメーカーにはすでにルートが出来ているから、そこに割り込むのには、良品であることを証明し、安価でなくては。

何軒もまわる。あちこち歩くうちには「長期に渡って買っても良い」という会社にゆき当る。「本当に国産か？　毎月納品出来るか？　どんな所で、どうやって作っているのか？」工場を見に来るという。

山男、私、日本からの技術者二人、計四人で一つの工程が済むと、四人そろって次の工程に移る……と、とても流れ作業なんてものじゃない。これでは人様に見ていただくのにはみじめすぎる、それに日本国の信用にもかかわるかもしれない。

近所のアルゼンチンの人五人ほどに「ちょっと坐っているだけでいいから」と来てもらい、日本の作業服を着せ、各機械の前に、少なくとも仕事をしているような手つきだけでも……その場を切り抜けようということになり、笑い話しじゃなく、真面目に立ち向かいました。

約束の時間、工場視察の立派な紳士たちは、私たちを最高級に緊張させた後、長期の契約がまとまった。

「さあ、話が決まれば毎月穴を開けることのないように渡さなくてはならない」

早急に人を雇うにはあまりにも資金がなさすぎる。「一人で何人分も働いてしまおう」

朝は朝の星、夜も夜の星、そのアルゼンチンの空をおおう南半球の星を見ることも忘れ、地には花が巡ることも。何もかも忘れ果てて動ける時間の間中、工場の屋根の下の生活が続く。

日本のことも、図案のこと、すべての思考がストップし、コンデンサを作ることにのみ心を奪われ、そしてその出来上がったアルミニウムの製品を花よりも美しいと思ってしまう。

夜の星朝にも星あり星尽し俯き加減の私の日に

三

山男の兄が、ロサンゼルスでの歯科学会のついでに、日本―ロサンゼルスよりなお距離のあるロサンゼルス―アルゼンチンを加え、私たちを訪ねるという便りがあった。

締りがなくガタピシガタピシの乗り合いバスにて二時間ほど、あの村この村皆寄ってゆくのだから。私たちは船の港に着いてから飛行機の港エセイサに行くのは初めて。

工場が動き始めて以来、土曜も日曜も、太陽が輝やいている時間に外をウロウロしたことがなかったので、激しく揺れるバスの窓ではあるけれど、何カ月ぶりかの太陽。ただ平たい牧草の広がり、その上を渡って来る風。外はこんなに眩しかった。

バスに揺られはるばる逢いに来た人は、これまた本当にはるばるの旅を今終えたばかり飛行機から降りてくる。

私たちがこの国に着いたばかりの時、宿を提供して下さったいつものルシータおばさんの弟君がブェノスアイレス大学の偉い人とかで、ルシータが上手に立ちまわったので大学から迎えが来ている。破産寸前の、いや寸前よりもっとひどい状態の弟に逢いに来たところを大学招待に切り変えてしまった訳で。せっかくこんな遠くまで……なんだから何か御利益があった方がいい。

本物の兄貴、やっぱりニコニコ。母の写真。国を出る時ハイハイもしてなかった姪は、歩いている写真。私たちがマイナスでいる間にこんなに時がたっていたんだ。皆元気だって。祖母も。

さあ十一階へ。もう染物とは御無沙汰だから這って歩き回るようなことしなくて良くなっていた。いつの間にやらテーブル、椅子、ベットもそろった。私の家庭教師みたいなことで、家具という名の物が買えたなんて。生まれて初めて稼いだお金。

兄のスーツケースより家族からのおみやげがいっぱい。懐しい。地球上にひとりぼっちじゃなかった。

そしてひと束のドル紙幣の差し入れも。この金額を見て、普通の常識では言えないものなのに、

私は叫んでしまった。「家を買うわ」。また少しずつドルをペソに直して、その日暮らしに使ってしまうのにはもう耐えられない。発展的なことしなくては。

はとバス的なのと、少々アカデミックな雰囲気での五日間は、またたくまに過ぎてゆく。

この国に住み始めて一年半、兄と共に絵葉書みたいなブェノスアイレスを味わえることになった。

町中から三十分も観光バスが走ると、景色はもう地平線までまき込んでしまった草原。遠くで、近くで、牛たちが草を食む、子牛が親にまつわり、道の両側の雑草に花。「こんな風景見たかった」

着いた所は、牧場の家。昔の造りそのままガウチョスタイルのガウチョたちに迎えられ、旅の人を遊ばせてくれる。

アルゼンチンに着いてすぐ、マンションのベランダや工場建設用地の一角で……などアサード（焼肉料理）もどきを経験しているけれど、ここは本格的、ユーカリの巨木の下、野生的かつ大掛りに。もうすでに肉の焼ける匂が満ち満ちて、すごい、すごい。

芳ばしく焼けた臓物や肉に、トマト、玉葱、セロリ、ニンニク等を各々微塵切りにして混ぜ、オレガノ、油、レモン、塩、胡椒で調味したのをかけていただく。うまい。草原を渡って来た風のもと、ブドウ酒もいい。

ちょうど気分が良くなったところで、ガウチョがギターを弾き始めた。牧場の柵に掛けてあったポンチョをかぶり、ガウチョたちの踊りの輪の中に入って踊ってしまった。

ブェノスアイレスの町から、ガウチョの家とは反対の方向へ四十分も車でゆくと、上流から流れ

てきた木の根に虎が乗っかってきたという名を持つ、数えきれない島々が寄り集まってどこまで続くとも知れない大水郷ティグレ。

島一つを一軒の別荘とし、それぞれきれいに手入れされた庭、家。水遊びの人々。それにもまして驚いた、舟いっぱいにオレンジを積んで、オレンジの重みで水面ギリギリ、やっと浮いているような舟が、三々五々舟着場に流れついてくる。あたりをオレンジ色に染めてオレンジの山。「こんな風景、みたかったんだ」

舟着場はそのまま市場となって、オレンジのみならず、ラプラタ河の上流からの作物、オウム、インコ、猿、野生のラン……この先にジャングルあり……がしのばれてドキドキしてしまう。それにしても大きなカボチャ。なんて恵まれた国。私の流れ着いた国は何とありがたい国だったことよ。初めてその豊さのカケラに接することが出来た。

兄と最後の夜、ボカのキンケラ・マルティンの美術館近くのカンティーナ（居酒屋）で飲んで歌いかつ踊る大騒ぎ、ああよかった。こんな大それた気分転換、忘れてた。お金を使ったり、遊びがあるということをすっかり忘れていた。

船に乗る前の日々、親の範囲のマンションに住み、もちろん働いてはいなかったから、収入は両方の親から普通の習い事などの生活には充分と思われる月給？　をもらい、その月額が三日ともたないような大雑把な生き方をしていたのだから、日本国を出てくる以外なかったみたい。

いざとなって、竹の子生活をするという知恵を発揮しはしたけれど、もう持ち物を売らなくても

済みそうな状態になってきた。
テレパシーで「見殺しにはしませんよ」と言っている母を心に甘えていたから、ポケットの小銭を探しながらでも何となく心にゆとりを持って居られたのでしょう。だけど絶対にSOSは打たない、との確心は自分自身に持っていた。
とても駄目かなと思えてしまった工場を始めるに当り、無一文を有一文に出来た原動力は、日本の会社との間に入って兄が保証のハンコを押していたから。たとえ兄にはたいした額ではなくても、私たちが「もうやめた」と言うことでの兄が被る恥ずかしさを考えると、何が何でもそのカッコ悪さは避けなければならなかった。私たちの人生初めての仕事を投げ出してしまえば、一生このことがついてまわるにちがいないし。
しっかりと私たちを放さない心に囲まれていたから。あまりにも距離は遠いけれど。
工場は動き出したし、兄にも逢えた。さあ夢からさめてまた工場の屋根の下に戻ろう。

太陽を吸いたるトマトのまる噛り塩の砂漠の塩ふりかけて

四

ひと束といっても、厚さの度合があるのだけれど、束と言っていいものかどうか……その辺のと

ころが頼るすべてとは、はなはだ心細いはずなのに、「借りるのじゃなく、自分の家を買ってしまう」と私の我武者羅開始。

それからの日曜日は「家探し」という、いかにも発展的なことが加わることになる。

値段が高過ぎだったり。まわりをビル壁に囲まれ、外の景色というものがないような所。小さ過ぎたり。バス、トイレが汚いところはだめ。環境だって選びたい。

そう簡単に見つかるとも思えないし、あまり安々と決まっても困る。問題の一束のドル紙幣以外は、まったく当てはないのだから。

ウロウロしているうちに、美しきアルミニウム製品の製産数が増してくるはず、という希望的観測の行動で、いつでも実力より行動が先走ってしまう。

時には茶目気で、手持ちのお金にゼロを幾つも付けないといけないような豪華なマンションを、すまして見に行った。

朝の目覚めは、その名も高きラプラタ河。アマゾン色の流れではあるけれど、水面が光る、ヨットが浮く。向こう岸は見えない程広い河。私の一番の望み、きれいなバスルームは各寝室毎にあり、寝室の隣りは衣装部屋。この部屋に世界の美なる布での衣を並べ……。

お友だちを招いてパーティするホール。使用人室も幾つか。

いつの日にか、こんな所に住む日がやってくるのかしら、そこに住む人がいるのなら私がその人になりたい。

それからの日々、自分が探している所がずいぶんみじめに思え気が滅入ってしまった。

むきだしの針金をよけつつ、作りかけの所を通りビルの四階。入ってゆくなり明るい。テラスに出ると、手が届くほどの所に樅の木、大きな実がいくつもなって。

木目の美しいリビングルームに陽が入り、寝室、バス、トイレ、物入れ戸棚が沢山。台所、洗濯室。

今までの例のごとく気に入る所は高価すぎて、という例外ではないけれど、四十何軒も見てまわり、日本風に言えば建物の五階にあがってもでもまだ梢をはるか上方に仰ぐ樅の木、「切らないでね」と管理人に頼み「ここに決めた、絶対にここ！」と叫んでしまった。

どんな方法で支払うのか、そんなことよりここに住みたいのだから。

地下鉄の駅にも近く、九階建の屋上に上ればラプラタ河が見える。自分の窓からラプラタ河というのにはちょっと難ありだけれど。家の前は、塔が高く聳えて教会。その付属学校。プラタナスの並木道。石畳道。

ほぼ出来上っているけれど、住み始められるのは二カ月先とのこと。「よかった！」その間に少しでも稼がなくっちゃ。

頭金の〝一部〟を納めて予約完了。そしてこの家を売っている一番偉い人の所へ直接面会を求め、〝百二十カ月払い〟〝頭金まで四回に分けて払う〟という引き延ばしを頼むと、太っ腹に受けて下さった。

だけど、これからの日々食費も交通費も計算に入れるの忘れた。ただ家の払いに全部消えることになるのだけれど。

食費といえば、日本の家族から罐詰、乾いた物、真空パック……食料品がぎっしり詰ったダンボールがどんどん届く。

お茶は手もみだったり、海苔も羊羹も最高級品ばかり、何だか貧乏しているのじゃないみたいな気がしてしまう。日本の生活だってこんなに頑固ではないけれど、外国にまで送るのだから、と良い物ばかりであって。

早朝から夜中まで、二人そろって工場に居るから食物を買いに行く暇もないわけで、ダンボールで命をつないだことになる。

緑濃き川根のお茶を飲む時に南米に住むを思いいだせり

五

細かい手先の仕事だから、人材があるのなら日系の人の方がありがたいな……いよいよ日系二万人相手の日本語新聞に求人広告を出しました。ドキドキしながら。

次の日、さっそく反応があり、アルゼンチン、パラグワイ、ブラジルの三国の国境辺りミッショ

ーネス地方の原始林へ入植し、切り開き、恐しい虫たちと戦い、毒蛇、猿……あらゆるアマゾンの動物の攻撃を受け、それにもめげず収穫した作物は、消費地まであまりにも距離があるため商品とはならず、苦労のしがいがないと……一家でブェノスアイレスへ仕事を探しに出てきた、という経緯の姉妹が尋ねて来ました。

十八歳と十六歳。日本では忘れ去られたような丁寧な敬語を使って話をするこの子たちをすっかり気に入り、文句なく採用。

また次の日、今度は、ボリビアへ移住してみたものの調子が良くなく、ブェノスアイレスへやってきた日本人一家の姉妹が、やはり十八歳と十六歳。まったく世慣れない様子、私の含めるように言う日本語を、わかるのかわからないのか……との風情。もちろん採用。

真面目、やろうと努力することは最高だけれど、今までの生活とはあまりに掛け離れた細かな仕事、全部日本から運んだ材料での不良品が山となる。寿命が縮む思いだけれど、もう少しの我慢。あと少しリズムをのみ込むまで。祈る思いで手付きを見つめる。私の経験から出てきた良かれと思う方法を数えながら。会社の宝となる子たちだもの。共に働き、数え、お弁当も食べ、四人子分を引き連れた女工頭としての毎日。

この子等の為にも、小さな部品工場を、大きくしたい。月給遅配は当り前、という国ではあるけれど、彼女等の働きは、日本から外へ出てきてしまった一家の、何とか立て直そうとしている一生懸命のお金の一部なのだから、決まった日には必ず払おう。彼女たちの誠実な仕事ぶりに対して、

会社が出来る精一杯のことをして答えよう。

家も買いかけてしまった。人も採用してしまった。今まで学生という者であって、人に使われたことも、使ったこともなかったのにこんなこと始めてしまって良かったんだろうか。私たちの方法は世の常識にかなっているだろうか。教えを請う何物もなく、自分の内に持ち合わせている真心のみが唯一の処世術。

私のどの部分にこんな処世の術が隠れていたんだろう。相手と事柄によって色を変えられるカメレオンみたいだったのかしら。

アルゼンチンのブェノスアイレス、誰も知っている人は居ないのだから、見栄も外聞もない。ちょっと一ぱい飲みに行こうという誘いの電話もかからないから、ただひたすら、全力でもって、自分の仕事ということに集中すればいい。ひたすら基本的人間であろうとする戦い。私の人生の一時、こんな時が与えられたということは、とても、とてもありがたいことだった。

日本より移し植えたる紅梅の花の散りくるところに坐る

六

四十何軒目かに見つけ出した、百二十カ月先にやっと自分の物となる住い。パレルモの公園にも、

センターにも近く、それでいて、ちょっと入った感じのプラタナスの小道に面した建物の四階へ引越しです。百二十カ月と簡単に言ってみても、その月々が経過した時私はこの国で、いったいどんなことになっているのでしょうか。

もともと二年契約で借りた十一階のアルゼンチン最初の住いは、いずれ引越さねばならないと、日本よりの荷物は、差し迫って必要な物以外は梱包を解かなかったから、横浜で荷造りされたままの大きな木箱を動かすのが主な仕事で、他の細々したものは大したことない。一年ちょっとの、物を買うどころか日本から持ってきた物を売る生活だったはずなのに、それでも何やら増えてしまって。良い物が消えてしまい、質の悪い物が入り込んだ感じでありました。

運送屋のおじいさんと我々と、どうにも動かない物だけ管理人に登場してもらってのささやかな引越し。

ありがたいことに、十一階の大家さんは素人みたいで、二年契約を中途で出てゆくことにも何事もなく笑顔で送ってくれた。家賃を払いに行くことだけのふれ合いだったけれど細身で、丸くらい丸い目のアラブ系かな、こういう人との出逢いがあったこと、ずっと忘れないでしょう。

少しばかり知ってる道など出来たブェノスアイレスの町を、小型トラックで町の中心部に向けて走ると、新しい本当に出来たて、私のコンクリートの囲いに着きました。

荷物を運び込み、納める所へ納めてしまうと、日本から大荷物で来たはずが、ガラーンと広い板の間に、ポツンと居る感じになってしまった。地下に、大ざっぱな物を入れる物置があったから。

広さがうれしい。床の木目が新鮮。

大きな窓での明るさがいい。樅の木は、大きな実をつけて緑。壁は、私が注文をつけた白がかったクリーム色。新しい管理人の所へ壁の色を注文しに行ったのでした。濃い緑やピンク、紫になってしまっては大変だと……この国の人が大胆な色で住むことを知り始めていたから。まだまだ私は順応途上です。

やっぱり辞書を持ったのですけど、我が家に電話が付くように、一人で電話局にも行きました。順番カードを取ってから、長く長く待って、とても心細くなる頃、私の心細いスペイン語でもちゃんと応対してくれて、訳がわからないようなことではありましたけれど、結果は、我が家に私名義の電話が引けました。

いろいろなことが、この我が家の為に出来、そしてもう自分の家なのだから、何となくソワソワして暮らさなくても良いこととなり、あとは月々の払いをしていくことだけ。

それは、アルミニウムの小物を、いかに能率良く作るか、を考えていさえすれば良いのであって、ごく単純なことになってしまったはずなのに、外国へまで来てしまった心は揺れなければ治まらないみたい。

視野広くなりたる心地しておりぬアルゼンチンより日本思いて

七

従業員が帰っていった土曜の昼下り、私は工場の生産計画や後片付け、いつまでかかっても終わりがないようなことをしていました。

物音で中庭に出ると、山男が隣家との境界の五メートルほどの、そこしか文句をつけるところが無かったのか「壁が汚い」と市の工場監視人のワイロ欲しさの脅迫？　を、経費節約の折「自分でペンキを塗ってしまえ」と、資材の入ってきた木箱やドラム罐を重ねた上の梯子のテッペンで、「いざ塗らんとしている」

「落ちるよ！　やめなさい」「伊達に山に登ってきたんじゃない、これくらいのことで落ちるなら、もうとっくの昔に死んでるよ」と言い終わらぬうちに、ドラム罐がころがる。梯子が倒れる。山男が猫みたいに丸くなって、頭をかばって落ちてくる。「うーん、さすが山男、上手に落ちる」と見ていて「あっ!!　あんな高い所からコンクリートに落ちたら死ぬじゃない」倒れてゆく梯子は、かろうじて純水装置からはずれた。「当って壊れてしまえば工場お仕舞い」と素早く思った。

山男は立ち上った、歩いた、「だからたいしたことなかったんだな」

「大丈夫？　どこ打ったの？」「ここ何処？」「工場に残って居たんじゃない」「工場って何？　自分の家何処にあるのかわからない」

私はガタガタ震えた、こんな恐しいこと聞いたことない。始めたばかりの外国で、変になってし

まった人を抱えてどうやっていけばいいのか……。山男を事務所のソファに寝かせ、救急車に電話した。どう調べてその番号を回したのか覚えてないけど、通じて流暢にスペイン語がでてくる。すぐ救急車が到着。隣のイタリア人の床屋の夫婦や、向かいの雑貨屋のおじいさんなど飛び出してきてくれた。

「自分がしっかりしなくては」と思っていたのでしょう。「頭のこの辺を打ったらしい」とか、話せないで苦労していたスペイン語が、何の抵抗もなく、私の方が頭を打ったんじゃないか、と思うほどおかしい。

今まで、他人が話かけてきたり、電話が掛ったり、スペイン語で対さなければいけない時、本気で受けてたとうと思っていなかったんだ、いつも「山男が何とかしてくれる」「後で聞けばいいわ」と逃げていた。

救急車は、市立の、誰でも何病でも只、の病院に着く。さすが只だから、学校の構堂のような広さの所に、ベッドは男の人ばかりがずーつと向こうの方まで。老人も子供も、重症も内科も外科も。女人は別棟とか。私は医者の娘ではあるけれど、人が注射されているのも見ていられないほどの出来。管がつながっている人がいっぱいいる所へ足を踏み入れるのはただ困惑。

正気に戻った山男が、「大丈夫だから家へ帰れよ」。そうだ、「家へ帰って日本の熱いお茶持ってきてあげる」

外人ばかりの中に、チョコンと寝かされているのを見届けると、急いで家に帰り、おむすびを作

り、お茶を魔法ビンに入れ、また急げるだけ急いで病院へ。

さすがの山男も、まわりの故か、打ちどころのせいか、全然食欲無く、「それじゃ後で欲しくなったらね」と置いて帰ろうとしたら、先ほどから良い見せ物が出来たと我々を見ていた隣りのベッドの病人が、「置いていくとすぐ盗まれるよ」。この場に、日本製の魔法ビンがひときわ立派だったのがとても淋しい。「魔法ビンなんか無くなったっていい、一口日本のお茶を飲んで安まってくれれば、よみがえってくれれば！」

婦長さんの所へ行き、「お願いしますね」とチップを渡すと、「現金なもの」という言葉のとおり、「ちゃんと注意しているから安心して」と大きな乳房がフワンとやわらかい抱擁で送り出してくれた。異民族の体温が私に残り、複雑な気持ちでトボトボ。

わが話すスペイン語少きにありありと見破られたり外国人と

八

土曜日に始まった入院騒動は、日曜日には救急を除いてお医者様が休みなので退院許可はおりません。日曜はただただ寝かされているだけ。月曜日の朝迎えに行きました。何だか保護するべき弱き者を持った気持ちになって。

朝の回診の間、立派な木の生えている中庭で、風にゆれる木漏れ日など見ながら、長いこと待っていた。

髭がのびて、むさくるしくなった山男は「オーイ」と元気に出てきた。「よかった」と思っても、「後遺症があるんじゃないか」言葉には出して言えない心配を残し。

「昨夜、隣の隣のベッドの人が、ずっとうめき声を出してて、ウーと言って静かになってしまった。そしたらお医者さんと看護婦さんが来て、ベッドのシーツでその人をクルクル包んで運んで行ってしまって、今朝はもう新しい人が来て、そのベッドに寝かされてたよ」

「入院している人は皆、各自の食器を持っていて、ワゴンに積んで回ってくる食物を、食器を出して入れてもらうんだよ、俺、食器が無いから何も食べさせてもらえなかった。もっともあそこで物を食べる気にはなれないけど」

「薬も飲まない、注射もしない、ろくろく見てもくれなかったし、ただ寝かされてただけ、何もしないで放っといてもらえて良かったよ」

「ベッドの真中がへこんでいて、すごく寝にくいんだ、なるべく横の方に居るんだけど変に力が入って疲れてしまった」

「お家へ帰って、お風呂に入って、ゆっくり寝たい」

そして、病院からの足で会社へ行き、行けば忙しく、そのまま夜ふけまで働いてしまった。

梅檀の木の下に梅檀の香りあり梅檀の木影に長くいたり

九

「一年に一度くらいは染色展をして、日本の続きを保ちたい」と思っていたから、もうそんな時期です。セリーナとたちまち話がまとまり、今度は、案内状も自分好みに構成出来、それは、室内装飾家のセリーナの友人たちや長年の得意先に向け発送された。

少しずつ作り溜めてはあったものの、もっともっと作品数を増やさないことには画廊の壁が埋まらない。

日本では、着物巾やクッション大程度の大きさの作品が多かったけれど、大きな国へ来たせいか大きな物、壁掛け、間仕切り……に興味がでて、今までの伸子や張手では間に合わない。自己流に考えた木枠を、アルゼンチンの大工に注文した、少々住居が大きくなったとはいえ、またまた広げられた布を避けつつの生活に突入。

日本から運んだ糠やもち粉で作った糊で防染し、日本の染料で、アルゼンチンの風物の中に住み、アルゼンチンの人たちと少しずつお友だちになってゆく日本人の私が描く図案。

アルゼンチンの材料での染色の可能性を試さなければいけないのだけれど、失敗している暇がな

いからついつい慣れた方法でしてしまう。
バスルームも最たる仕事場。バスいっぱいに水を溜め水洗。流れる川で、というような訳にはいかない、そして洗い上った布を、樅の木に手が届くベランダにロープを張って広げる。さあ、あとはお天道様にお願い。しばらく後、その広げた布を見に出て悲命をあげてしまった。
ブェノスアイレスの町の生活は、各々のビルがゴミ焼却装置を持っており、ゴミを捨てるのは、自宅台所の壁の蓋付き穴にポンと投げ込むだけの簡単さなのだけれど、管理人が各家庭から投げ込まれたゴミにガソリンをかけて燃やす。ビルの高さを煙突とする強い火力にあおられた煤や黒い燃えかすが、ヒラヒラ黒い雪みたいに降ってくる。ビルがぎっしり並んでいるのだから、その黒い雪も大変な量。空はどこどこまでも青く、輝かしいブェノスアイレスなのに、これはいけない。その煤が私の湿気の布に積って、もう滅茶苦茶。
個展の前日まで焦りつつ制作せざるを得なかったけれど、何とか予定の作品数に達した。期限があることってすごい。
前の時見て下さった人もいる、スペイン語もわからないながら、わからないことに慣れてきたし、作り笑いではない顔で二度目の染色展となりました。
やはりカクテルパーティ形式。前の時は何が何だか訳もわからず、立っていたらウイスキーを勧められた、という調子だったけれど、今回は少しは自分も参加させて、私好みのカクテルやワインも振る舞うよう、カナッペ、サンドイッチも指図した。ボーイまで選んだわけではないけれど、年

配の落着いたボーイが三人、パーティの格を醸す。
この国では、初日、開店祝い等は、会社が終わり、家に帰って着替えが出来る夕刻より始まる。ウィークディだから、この日とて工場の方を休む訳にはいかず、作業服を脱いで画廊へ、といった状態だったけれど、先程まで有能女工だったこと忘れ、調子良く飲んだ勢いで、スペイン語らしきことしゃべったつもりになれた。
大きな壁掛けが幾つか売約となり、売られてゆくのは勿体無いが、個展が終わり、残った作品を家に持ち帰ると、人に相手されない〝売れ残り〟かと思うと佗しいし、物を作って他人に対することは厳しい。
こうして布を広げたきっかけでもって、異民族というより未知の人たちとの間に暖ったかい仲間を作ってゆかれたらいいと思う。

地平線まで続く平らな国にいて白詰草を描きていたり

＋

何カ月も前に発注済みの、コンデンサというものを作り上げるのに必要な、細々と数多い資材が、日本の契約会社から送られてこない。だんだん時に追いつめられる。手持ちの資材は日々心細く、

とにかくアルゼンチンでは調達出来ない物ばかりなのだから。

地球を半周する引越しの、私が乗ってきた船の船底に、コンデンサを作る機械と資材が積まれていたわけで、それでもって、今まで生産してきたけれど、後続資材を輸入するのは今回が初めてになるわけで、〝アルゼンチンへ向けての輸出の方法がわからずに遅れているのだろうか？〟資材輸出の書類手続きの方法など図でもって具体的に現し、指図したけれど反応はない。国際電話での直接の催促も要を得ず、手紙の一通すらも帰ってくることなく。

従業員も増えているし、工場の作業が止まってしまったら、どうやって月給を払うの！

這い蹲るほどの努力でもって獲得した信用は、どうなってしまうの！

我が社のコンデンサに合わせた設計で、テレビやステレオを製作し始めているアルゼンチンの会社も幾つかできた、というのに！

日本側と山男の出資で始まり、それも回転しかかっている今、何個分の資材によってアルゼンチン工場を開始し、現在の生産高も日本の企業の社長以下に報告済み、すれば自ずからアルゼンチンの手持ちの資材が不足しているのがわかり、もう急いで送らねばと気が揉めるはずなのに。

正々堂々とアルゼンチンで製産したコンデンサでの収入で資材を輸入しようというのに、外国への手続きをめんどうがり〝南米なんか〟とヘラヘラ一日延ばしにする。なら、どうして外国へ工場を出す話に乗り気になってきたのか。対他人とは、私の育った常識では理解し得ないことがこんなに大きいことを知らなければならなかった。

山男は、切羽詰って日本まで見に行き、資材をアルゼンチンへ送り出してくる、と夜のエセイサ空港に、たった一人私を残して出掛けて行った。深い闇と、この深い一人ぼっち。

私が採用し、私を頼っている従業員に心細い思いをさせないよう、材料が最後の最後になってしまっても、何か仕事を作って作業を継続させなければならないこと！　どんなことがあっても、この工場は私の満足と思える状態になるまでは手を放せない！　ひとりぼっちの私の決意のかたわら、このままふと死んでしまっても、誰も気付きもしないだろう、この町を歩いていたとて、私がその時そこに居たということなど誰の記憶に残ることもなく……何と長く感じた一カ月間。

山男は荷物だらけになって帰ってきた。スーツケースの中からは、なかば止まってしまっている工場を動かすべき材料ばかり。「工場に関係のない物は何も持てなかったよ。そのうち順調にいけば、いつでも何でも持ちにゆけるさ」「リベットは！」「アルミ箔は！」と頭のシンに応えている部品の名を矢継ぎ早に。「これだけあれば、明日からちゃんと働ける」「後の材料は送り出してきた？」「航空便の用意した？」「船便の大きなのも送った？」

スーツケースよりの材料で継いでいる間に後続の荷が、うまく着きますように。

今は何も贅沢なことは言わない。ただ思いの限り働きたいだけ。

こんな働き手を海外に持ちながら、注文している資材を送らないなんていう契約会社ってあるかしら。

聞いた話、日本に親会社を持つアルゼンチン在の会社は、原地の給料にも充たない働きでも、会

社の名前の対面上日本から援助があるという。
私、そんなみっともないことして欲しいなんて言っていない。資材さえ順調に入手出来れば、この素人会社だって限りなく発展させてみるものを。ちょっと大きく出すぎたかな！

ユーカリの落葉焚きいる煙の中資材不足のこと思いつつ歩む

十一

スーツケースよりの資材で作業を繋いでいる時、私にとっては面識の無い三人の紳士が揃って来社。山男がアンデス登りに来た時、将来の仕事の為に、と工場の敷地購入、建設に融資した方々とか。
戦争よりずっと前にアルゼンチンへ移り住んだ人たちの子孫、すなわち日系アルゼンチン人で、日本へ帰るということは、そう安々と実行するものではない、という教育のゆきとどいている人たちに、彼等が融資した会社の、それもずっとずっと後、まだ来たばかりの若造が、理由は何とあれ、日本へ帰った、住居を買ったということで、「そんなに儲かっているのに利益の配当も無いのはおかしいではないか」という理由なのでした。
私たち、会社を続けるのあまり、引越し荷物の中の売れる物は売り、私の布切れの収入だって従

業員の給料や日本への旅費やらになっている、などということを言わなかったのがいけなかった。公の会社というものは、自分の手の中でゴチャゴチャしてはいけないんだ、とは知らなかった。

まず、彼等は社長になりたがった。一年毎に交代の持ち回りで社長をやろう、という提案で、四年に一回巡ってくる閏年みたいな社長交代制は、ちょっとみっともなさすぎる。

それに、不親切な契約会社を持つとはいえ山男の名前でもって始められた会社、その兄が、日本側に全面保証をしているということも。月給を貰うという発想ではなく、会社に良かれと思うことには全身で取り組み、素人考え…素人技術…盲蛇に私が作ってきた工場。

「他人の名前の下では働けない」とでしゃばったから、会社は争いの場と化した。

アルゼンチン政府の手持外貨を庇う輸入禁止政策により、物を作るのに必要な資材をもそのとばっちりを受けて再度……数度、工場の作業は跡絶える。

我が社の部品にサイズを合わせた設計で作業を始めている得意先の会社も増えているので、こちらが製造出来なければ、それで御仕舞い、というわけにはいかない。

「理由は聞かない、契約どおり納品するように」と脅迫やら哀願やら、直接会社に現れる人、電話でどなる人、朝から晩までもう大変。どこの何を相手に解決が出来るのでしょうか。お国の政策が相手では、もう運が悪かった、というだけ。

こんな状態だから、執念の工場もガタピシ。経営参加してみて、このガタピシに恐れをなした社長一年交代制を主張した紳士三人は逃げ腰し。「出資した分だけ払い戻してくれれば、この会社をや

めても良い」と言いだした。
もちろん、早急には払える訳がないから分割で、ということで話しが合った。潰れてしまえば一文にもならないどころか皺寄せがあるのだから。
例によって、何処から支払うべき資金が出てくるのか見当はついてないのだけれど。〝大借金をしています〟という紙切れを引き替えに、たった一人、何年間でも有効な社長の座が山男のものとなる。

海を来たりし自動機の始動する花ある枝のユーカリ揺れて

十二

アルゼンチンで仕事をしようと試みてから四年の月日はたっていったけれど、相変わらず不安定な国策にゆさぶられての資材の中断、契約先の怠慢による中断、とあまりにも進歩がなさすぎる。アルゼンチンの国の方針は、この国を出てゆく以外方法はないけれど、日本から送られてくるべき資材が跡絶えるということはゆるしがたい。だれの利益にもならない。つまらないことでなぜ、アルゼンチンの会社の足を引っ張るのか。その事実も確かめたかったし、工場の中で一番確かでなければいけない身の上で、あまりにも電気の方面の知識がないことも秘かな悩みだったから、この際、

固め直し、大量の資材を確保の為、工場実習をする為、日本まで行って来よう。
決めたとなると行動は早い。帰りにはいっぱい詰め込まれるはずの、今はカラッポスーツケースを提げて。
アルゼンチンの真夏の昼下り、飛行機は真冬の日本へ辿り着くべく、エンジンの音。どれ程の距離を飛んでゆくのでしょうか。地球儀がポコンと私の頭の中に浮く。果たして日本まで間違いなく……心細さは絶大。
たちまち景色はアンデスの山々を見下ろし、こんなに沢山、山が重なっていて、とびだして高い峰に飛行機のお腹がさわるんじゃないか…所々白いのは雪？　塩？　その白を隠すように赤茶色、この赤茶色は南米の色……ここで不時着したら誰も助けには来てくれない！　木の様子が全然見出せない山々の中を通り過ぎ、チリーのサンチャゴ空港に着陸。アンデス山脈を横切ってきたことになる。
飛行機に乗っている人も、空港内のツーリストも断然男の人が多い。世の表面に出ている女の人って少ないのに気付く。
次はペルーに向けて、目前に迫る山をうまく避けて飛びだした。また、たちまちアンデスの山。アルゼンチン側から横切ってきたアンデス山脈を、今度は縦に飛ぶのです。
ペルー――アンデスの上空かしら。五年ほど前、結婚するかもしれない相手が、「高くて、遠い山へ登りに行ってくる」と、縁日で買った百円の指輪をおいて、それ以上何にも言わないで出かけて行

った。そして、地球始まって以来誰も行ったことのないアンデスの山々の中の一つの山へ登って、今度は只の石ころを拾ってきてくれた。

飛行機の窓にくっついて、強い日射しの中の山々の中の私の石ころの山を探している。

あまりにも沢山ある山の中で、山を見るという目はないのだし、わかるわけない。

今までの一番高い所は、バスで行った美ケ原高原、自分の足で登ったのは鷹の巣山、横着だから重いものかついで汗を流してなんてことしない。それに、きれいなトイレのある所以外は行きたくない。行動範囲がせまいはずなのに、日本から一番遠い国へ住みついてしまうなんて。それも山男と。

いつの日にか私の石ころの山の麓にまでは行ってみたいと思っていたけれど。

ペルーに着いた。初めてその空気を吸う国とは思われない。七カ月間、毎日毎日手紙を書き送った国だから。でも鰯の臭いが満ち満ちている飛行場だ！　なんてこと知らなかったなあ。ペルー特産魚粉工場近し。

手に受くる如く数多の星の中を翔びてゆくなりアンデスあたり

十三

囲われた円い筒の中、絶対に今すぐ外の空気が吸えない状態で、ギャーと叫び出すんじゃないか、と心配になるほどの飛行時間。

気怠い、手も足も腫れてしまって、甘爪が切れて血がにじんでいる。唇も切れ、皮膚は乾いて黒ずんで……アンデス山脈もロッキー山脈も見下ろしてきてしまったんだから当然かな、太平洋も。疲れた。

だけど飛行機が高度を下げ、日本の黒い土が見えた時、畑の畝、作物の緑、夕方になってきて家々の灯がつきはじめている。日本ってこんなにも私だったんだ。日本が涙でぼやけた。

赤い土を見慣れてここまで飛んできて、日本の土は黒い。この土から黒い瞳の黒い髪の日本人が生まれでたんだ、とよくわかる。

国際迷子になることもなく、スペイン語や英語で、日本まで辿り着いた。

真夏から飛び立って三十何時間、真冬の、もう少しでお正月を迎えようとしている日本で、「ワー、日本人がいっぱいいる」というのが一番初め目の感じだった。自分がまず日本人であることを、忘れてしまったような目になっていることにびっくり。

「きれいな大根、白菜も、牛蒡、蓮根、買いたい。抱いてしまいたい」。車の窓から見る日本の町に叫びをあげてしまう。なんと日本の野菜に飢えていたこと。

暮の町は、ゴチャゴチャと道まであふれている物をよけながら、同じ民族の中で安心しきった人たちが安心して……。

アルゼンチンなど、もっと緊張を感じる。インディオは隅の方へ押し遣られたけれど、ヨーロッパ、アメリカとにかく異民族、外国人の集合で成りたつ国だもの。

あちらからも車が来る。どうやって擦れ違うんだろう。道をゆく人はどこに居れば良いのかしら。サーカスの曲芸を見ているよう。

四角に線を引いて、広い歩道に並木が植えられ、というのが道だとしてきた生活が四年間あっただけなのに、日本の道にどぎまぎする。

国力も、経済力もずっと上の日本が、開発途上国といって哀れみの目を向ける南米の地から私はやってきたというのに。世界の誰が見たって、外見の生活程度はアルゼンチンの方が上。

楽に仕事をしている人たちの方が世界に通用する生活をして、真面目に勤勉な日本人の生活の方が厳しく見えるのは、いったいどういうことなんでしょう。私の国の人たちがいじらしく思えて。

以前充分に広いと思っていた同じスペースも、何だか狭く思えるし、すべての位置が低く、畳に座る生活の位置、というに気付く。

「食べたい、おいしかったなー」と夢だった食物が、現実に目の前に並ぶ。自分が、どんなに喜ぶかと飛びつくように食べてみて、「おや！」思いの内で美化しすぎてしまったのか、思い続けてきた味とはちょっと違う。

味を忘れてしまったのだろうか。時の移り変わりは、日本の味をちょっぴりもの足りなくしたのだろうか。食い違いの連続。

たった四年間で、こんなに私はおかしくなってしまった。日本に帰ってこられたことが、嬉しくて喜々としているというのに。

長い長い旅から解放されて、畳の上の蒲団にのびのびと、蒲団から足を出して畳にさわってみたりして。

強烈に肌を刺しくる光に慣れて今日は東京の冬の淡き日

十四

作りかけの、ぶっ潰れてしまうかもしれない寸前の、でも始めてしまった工場を作り上げるべく、さあ、資材の調達です。

大きさがないほど小さいとはいうものの、私は、アルゼンチン工場の代表なのだから、日本から一番遠い国よりの時差ボケもなんのその。

私、この仕事にすごく真面目に取り組んでいるけれど、外観はそんな風に見えないらしく「何かの間違いでは？」といった、私にとっては初対面の契約会社の相手を前に、後から割り込んでこの

工場作りに参加したので、以前のいきさつは知らないから、上司がいる訳ではないから、私が直面している気に入らないことを言いまくってしまった。日本語を話すことに飢えていた、という事情もあったから。

相手方は、「女が何か言っとる」というほどの反応で、私が何をしに来たのか理解すら出来ない様子。

命を込めて書き送った注文書は、担当の机の上に埋もれ、資材発注にもまわされていない。あのアルゼンチンでの格闘を、ここではお茶を飲むのより、新聞を読むのより後回しにして、その日は面倒と思い、次の日には忘れてしまい……。

この事実を、はっきり見てしまうともう世間知らずの怖いものなしは、会社の一番偉い人に面会を頼み、設けて下さった大した席で、大した御馳走をいただきながら、私が、こうしている間にも、アルゼンチンでは資材を待っている、アルゼンチンまでは遠いのだから急がなくては！　純粋に、ただ資材がとどこおりなく送られて来ることだけを願っているアルゼンチン工場の実情を話した。

偉い人は、彼の会社の仕事がモタモタしていることは露知らなくて、「それはいかん、自分は資材は満ち足りていると思った、だのにアルゼンチン工場は発展が遅いと思っていた矢先だ」。冗談じゃない、総身に知恵がまわりかねている。

私たちの叫びは、常に担当の机の上から動くことはなかった。難しいことを言ったのではない。アルゼンチンの働きでのお金を払って資材を送って下さい、と言っているだけなのに、そして、そ

の資材とは日本の契約先の工場には山と積まれている物なのに。
家庭では、妻子に「仕事、仕事」と言うのでしょうに、私の尊敬してやまない男の仕事ということの内容が、こんなにもおそまつな場合もあったことにショックが大きい。
過ぎ去ったことは、自らへの経験として蓄え、今は資材をアルゼンチンへ向けて送り出すことが先。
梱包に立ち合い、船会社に連絡をとり、航空便に指図をし、航空郵便でも一部発送し、輸出書類を持って東へ西へと走りまわり、あんまりあわてて外務省の階段をあと七つ残してころがり落ちた。生涯の傷が臑に残った。
資材を積んだ飛行機は飛び立った。ちゃんと羽田まで見届けた。そして船便も用意出来た。
女一人、馬鹿にされたか、相手にもされなかったが、そんなことあとから考えることにして、この世の経験豊かな男性を相手に仕事をしたつもりになって……こんな私、消えてしまいたい。
だけど、アルゼンチン工場が一人歩きを始めるまでは消えてもしまえない。表にいて、恥を忍んで、でしゃばりを続けてゆかなければならないなんて……ゆったり、おっとりの本来の私から遠くなる。もとどおりの私に帰れる日、はやくおいで。

久し振りの人を待つ間の短かかりひと花残る山茶花の下に

十五

学生と無職しか経験したことのない私が、技術を必要とする仕事をしてしまっているのだから、常に弱みを持っている。そこから脱出したくて、いよいよ工場実習開始。

初めてみる日本海の暗いねずみ色の海。もう、かれこれ何時間汽車に乗っていたことかしら。よく教えられた田舎の駅に立つと、雪の上を渡ってきた、頬をキュッと引き締める良い風だった。

迎えの車は、雪どけでクシャクシャになった道をゆく。家々の屋根の上に、かつて見たどんな雪よりも厚い雪が乗っかって、この厚みも、春が近づいてもう最後の雪だという。白の最盛期とは、どんな厚みがあったことでしょう。

黒光りする旧く大きな家に着く。ここが、私のアルゼンチン工場と同じ小物を作っている工場を経営している人の家ということだった。三つ指ついて迎えられ、ここに住んで、これから二週間の実習の日を過ごすのだと教えられた。

さっき見てきた海よりの、蟹や鯛や鮃の大御馳走。この家の主人の他に工場関係らしい人が二三人同席して、田舎の人はシャイなのかなかなか打ち解けてくれないながら、食物はおいしい。それを引き立てる雪国のお酒。

次の日より、この家の裏庭にある工場で実習をするのだと、トツトツの話しの中から探りだした。

食事の間に、蒲団は暖かくひかれ、まだ夜は早かったけれど明日へのエネルギー確保と早々にも

ぐり込んでしまった。

すぐ眠ってしまったらしい、他人の家の他人の蒲団で眠れるほど図太くなってしまった自分がちょっぴり淋しい。場所が変われば、決して眠られなかった私はどこかへ行ってしまった。

ドサーッと音、何事か、窓から顔を出し、雪が屋根から落ちたと知る。

それはさておき、私にと決められた部屋の窓から裏庭の工場が良く見えた。中年のおばさんたちがどんどん入ってゆく。

「しまった！　寝すぎたかしら」時計は六時半。昨日、工場開始は八時半と聞いたのに。

急いで食堂へ行ってみる。私への朝食は、すっかり整っていた。真に受けて、八時まで寝てなくて良かった。

早々に朝食を済ませて工場へ行くと、作業は完全に始まっていた。

沢山の行程、沢山の人の手と神経をわずらわせて出来上がる品物だ。「隣りの人に負けたら恥ずかしいから」と誰の指図でもなく各自の意志で、八時間の労働時間を十時間にもしてしまうような善良な人たちに満ちた工場。

勤勉さには文句はないけれど、本当はこれではいけない、基本的人権の範囲内で働く意欲と経営側の能率を発揮出来るよう、作業がうまく流れるよう、手順、方法……それを考え、見つけ出して指導するのが私の仕事。工場とは「こうありたい」という理想を追ってゆこう。素人の私がすることだもの。

まずは、すべての行程を自らの手で人並以上に熟さなければ治まらない性格をしている。
初めての作業場、机も椅子も、長時間の同じ姿勢、肩がこる、身体がこる。
他人の考えだした方法を見るのは大変ためになる。「何て利口なんだろう」と思うこともあるし、「私の方が合理的」ということもないことはない。
百人の作業員の工場で、飛び入りの私は百の神経が重く、ほとほと疲れる。
工場の窓よりの景色は一面の雪。あの雪の下は、春になったらチューリップの花々の色になるのですって。
小さな雪の村で、精いっぱい心を込めた実習をし、次の地、もっと北国の同種工場へとまた汽車に乗る。
もっともっと寒く、ドアの取手に手が貼りついてしまうような寒さの地についた。
次々と人々の親切に逢い、時間をかけて作業に入り込み、職場の人たちとも親しくなれて。つつがなく一週間の実習を終え、そして、工場巡りはまだ続き、思い残すことのないほど見て、習って、日本を、日本人を知り、もう自信を持ってアルゼンチン工場に対することが出来る。
何も知らないまま、情熱だけでやってきてしまった私の方法は少しもおかしくなかったことに気がついたし、大変なハンディを持っているわりには「みぐるしくない」との実感があった。

切々と心に重きことありて真白き雪に足跡続く

十六

アルゼンチンより日本に帰り来て、日本の北国を工場実習と駆け巡り、二カ月も過ぎていってしまった頃、やっとやっと私のふるさと、日本の真中で、ほのかに春が香りはじめ、どこまで心をゆるしても失望のない所、父母の家に辿り着いた。

小さかった時から、咲くのが待ち遠しかった古木の八重の紅梅は、まわりの空気をも淡いピンクにしてしまったかのように。ブエノスアイレスから、何度もこの花の消息を尋ねたのだった。「みごとですよ」と母からの便りに、「ホッ」とした日。

もう永久に帰れないかもしれない、と心に小さく持ってのアルゼンチン行だったけれど、四回目の、この花の時に帰ってこられた。

私のアルゼンチン行以来、誰も手をつけないままになっていたお雛様を、物置から運び出し、八重の紅梅の良く見える座敷に飾る。時も、行動も、この世からかけ離れてしまったように。御殿を組み立て、小さな時に付けた傷跡など見つけたりして。雪洞に灯をともし、こんな所に忘れ果てていた私がいた。

物の味というのをはじめて意識したのはお雛様の御膳で、家の前の海からのあさりのぬたやお澄し。

そして、二十何年間も重ねたお雛様での思い出に浸る。祖母との、母との……。
抱っこしたり、自分の着物を着せたりしたから、汚れてはいるけれど私の日本人形。何物にも替えがたい、こころの品々があることを忘れてはいけない。こんな昔があったことを。
二カ月前までのブエノスアイレスでの生活では、思っただけでも贅沢な雰囲気の日本の中に居て、失望の多かったアルゼンチンへ帰るのが怖い。帰る日が近づいてしまっているのがつらい。
昔のように、またそれに加えて、憧れていることをみんな自分自身の力でもって自分の物にするために、地球のまったく反対にまで出かけていって、念には念を入れたゼロにして、そこからの出発。きっと、辿り着けると思う。私の憧れに。

芽ぶきいまだ柳の枝のゆれゆれて帰る日来たり帰りてゆかむ

III 地球つれづれ

一

思い立ってアルゼンチンに移り住み、十二回目の冬のさなかとなりました。

向こう岸の見えない、常に黄土色豊かに流れてゆくラプラタ河からの、湿度に満ち満ちたブェノスアイレス。

霧、靄、その湿度が雨を呼ぶのか、雨また雨の六月、七月を過ごしています。

京都のように碁盤割の町並、どの道にも両側に、子供たちが三輪車で遊んだり、買物がてらの人たちが立話をしていても十分ゆとりのある歩道がついていて、自動車を恐れることはありません。

それぞれの道に、それぞれの並木が植えられて、駆足で通る時も、子供の手をひいている時も、涙がちの日も、車で排気ガスをふきだして通る時も、その時々の木々と共に四季をゆくのです。

我が家の前のプラタナスの並木の、小さな若葉を見つめていた日はどこへやら、すっかり枝だけとなり、冬の陽は枝々を通り、人々は日向側の歩道を選んで歩きます。

今年は例年より少し寒く、早朝の温度が、四、七、十度といったところ。ブェノスアイレスの町が零下になることはまずありません。

ハカランダ、ティパ等まだ緑濃い葉を繁らせている木々は多く、しっかり見つめないと、今が冬なのか、何の季節なのか、忘れて過ごしてしまいそうな、人間を苦しめることのない、穏やかな地です。

地震も台風もなく、大地にめぐまれて育った人間の楽天地と自信、それにヨーロッパ文化から来ている道徳、これがアルゼンチン人なのです。

この度のフットボールの世界選手権大会での南米久しぶり、アルゼンチン初めての勝利で、国中の人がもれなく何十センチも飛び上がった感じです。勝利の瞬間に教会の鐘が鳴り渡ったのを皮切りに、車の警笛、鍋をたたく音、ラテン系のリズミカルな身体に、勝利のエネルギーを内に秘められなくて、老いも若きもは当然のこと、今にも子供が生まれてしまいそうな人も、歩かない赤ん坊はベビーカーに入れて、国家総動員法が発令されたごとく、人々は家の外へ、目抜通りへと繰り出して、恥も外聞も衒いもなく、みんな動物的本能に従って勝利を叫び、歩き、踊り、泣く……。

私もアルゼンチン生まれの娘と共に、車で動くことをあきらめ、熱気満ちた行列に参加し、アルゼンチン国旗にくるまって泣きながら歩くおばあさんを見て泣いた。牛肉をたんまり食べたがんじような身体から〝声よかれろ〟とばかりに「アルヘンティナ、アルヘンティナ」を叫んでいる若者たちを見てまた泣いた。

私の涙は、直接フットボールの喜びではなくて、一つの出来事にこれほど集中できる人たちを見ての感激なのだけれど、他国のフットボールのごときことに混って、涙を流している自分が信じられなかった。

七歳の娘も、涙がこぼれないように上を向いてがまんしたという。

底ぬけに単純に、国中が国の色の空色と白になりきって、国の名「アルヘンティナ」を叫んでい

る。

この世にこんなに身も心も素直になりきれる人たちがうらやましかった。

この六月の日は、アルゼンチン国は、私に素直という言葉を残して過ぎていったのです。

髪の色金茶白赤色混る中黒き光りて吾が子は跳ねる

二

八月。アルゼンチンは時まさに冬。冬休みの最中です。ブェノスアイレスの町も、冬になった日から数えて二カ月も過ぎる頃。ハカランダもティパも葉の色が弱り、葉を落とし、春の芽吹きに備えての冬枯れの状態になりつつあります。(ハカランダは周囲を紫の霞かと思わせる程枝々いっぱいに花をつけて、その花の薄紫が、なかば散った頃、葉が出てくるのです。ティパは背の高い木で、若葉の中に山吹色の花が咲き、ハカランダほどハデではありませんが、ブェノスアイレスの町に多いので、この木をぬきにしてはこの町は語れません)

せめて学校の休暇は、子供たちに本当の空気を吸わせたくて、冬物の衣類をいっぱい詰め込んだスーツケースと我が家の四人が使うスキー用品の大変な荷物のお化けとなって、ブェノスアイレスの街中のパレルセ公園にある国内線用の飛行場からアルゼンチン航空に乗り、距離にして千四百キ

ロメートル程のアンデス山脈の麓のエスケルというスキーの町へやってきました。さすがここエスケルは、まちがうことのない真冬です。冬の色をした景色、ところどころに、雪があります。平らに続くカンポの向こうから山が始まり、その風景は、まったく日本風ではありません。草木の少ない、岩、石ばかりゴロゴロめだつ手前の山。もう一つ後の山あたりから雪がはじまり、奥深く重なるアンデスの山々はまったくの雪。

ほっぺが赤いエスケルの子供たちが異人の顔をしているのがなんだかおかしい。日本人によく似たインディオの子供も多く、透きとおった眼で、同じ年齢ほどの我が子をじっと見入る。

町の生活では、子供の手を離したことはないのに、田舎なので子供が土の上を遠くの方まで走ってゆく。雪どけのグシャグシャをよけないで泥をけとばして走る。「水たまりはよけて歩くものよ」などと教えなければならない子供に育っていることに驚き反省する。

エスケルの町から西部劇のような石ころの山をくねくねと車で三十分ほどで雪山に入る。私は、長い板っぺらの持ちにくさ、スキー靴の重さ、寒風に曝らされて乗る不安定なリフトに、こんなことなんの因果でしなければならないのかと、思いは愚痴っぽくなる。七歳と五歳の眼の行く先は、岩下で止まっている足跡にとまり、うさぎの家を発見したり。雪の表面が風で紋になっているのが、海の砂と同じみたいだったり。大きなべっとりとした雪、細かなコロコロころがる雪、雪だるまの玉がころがって、どんどん大きくなること。そしてその雪の上をつっ走るスピードを味わえるまでに上達したスキー。

子供たちよ、アノラックにパリパリと吹きつけるアンデスの吹雪、寒さ、聳え立つ雪山の上を流れゆく雲、その上にある青い空、この日本から正反対の国の大自然よくよく身体に感じておきなさい。これから先、どんなことに出逢うかもしれない子供たちが、私の目のとどく範囲で今のうちに、出来るだけ多くの経験をして欲しい。そして、いざという時には、なんなりと立ち向かってゆかれる強い身体と心と気高さを持たせなくてはと思うのです。そして、現実にもどり、お皿が四回もかわるホテルの立派な夕食の肉の味が、ブェノスアイレスのおっとりした味と硬さのちがうこと。石ころばかりの寒い地方で、生物が生きるきびしさをしのんだのでした。

アンデスの麓に来たりて足元の雪が舞うのみにみとれておりぬ

三

「こんにちわ」という言葉すら知らずに住み始めたスペイン語の国アルゼンチンで、意味も知らないままに「プリマベーラ」という単語を聞いた時、なんと美しく上品で、豊かに響いたことでしょう。

住む所も定まらず、冷たく灰色っぽく感じられた町並、寒くて雨がよく降って、こめかみに力が入ってふるえながら、声もなく涙を流していた着いた当時の冬が明けて、プリマベーラ、即ち春と

なった日の、木々の大地のエルネギーがわっと押しよせてきたこと。未知に立ち向かった自分のことをしみじみと思い返す時でもあり、今にきっと、と勇気づけてくれたのも、プリマベーラの青い空でした。

アルゼンチンに着いて十二回目の春の日、九月二十一日。目を覚ますと、シャッターの隙間から、朝日が部屋の中へ入ってきています。大急ぎで、家中のシャッターを開けると、ああ、やっぱり、世界中の人に、これが本当の春というものですよ、と見せてあげたいような素晴らしい天気。町の真中に住んでも、プラタナスの若葉を通しての青すぎるほどの高く澄みきった空。まろやかに空気を暖め始めている太陽。ビワのブドウのパルタの……見渡すかぎりの木々のやわらかい新葉。こんなよい天気をどうして過ごそうかしら、とうろうろしてしまいます。

町のウインドウも日本の花と同じような三色すみれ、金盞花、カーネーションと花だらけ。朝の買物の主婦たちは、ジャガイモやパンと共に、それぞれの好みの花束を加え、春の日の食卓を花で飾るのでしょう。

恋人たちは、揃いの花を胸に着け、肩を組み、キスをしながら、薄着になった感覚を謳歌しながら町を行きます。

私も、何が何でもこの春に参加しなくてはと、まず花屋さんのドアを開けてびっくり。生のバンドネオンが聞こえる。私の入った気配に音がやみ、主人が現れる。「今の確かバンドネオンの本当の音でしょう？」と聞く私を、「好きだったら来なさい」と、小さなすすけた、マテ茶の道具など散ら

ばっている台所に招き、たたいて確かめてから坐りたいような、古ぼけた木の椅子に座らせて、すぐ本物のバンドネオンが、名曲「ウノ」「センティミエント・ガウチョ」、三曲、四曲、額に汗をにじませながら、アニバル・トロイト楽団の楽師の一人が、見知らぬ、お得意さんでもない、ぽっと入り込んできた私のために、一メートルも離れていない所でタンゴを弾く。

こんなことがあってよいものかとポーッとなってしまった私に、みごとなピンクのカーネーションの束を抱えさせて、「アルゼンチンで生まれ、日本で育っているタンゴの中に生きるタンゲーロの心です。思い立ったらいつでも聞きに来て下さい」と送り出された。すごい春をもらってしまった。アルゼンチンの中にぐっと住み込んだ手ごたえだ。

言葉も両親も友だちも、その上お金すらなかった私たちが、町の人たちと話す言葉を獲得し、住むべき家があり、全部の力をつくして作りあげた工場を基とした信用も得て、アルゼンチンの学校へ通い、日本語が得意な二人の子供がいて、まだまだすべての面で気苦労は絶えず、理想にはほど遠い生活ではあるけれど、自分の力で作りあげた、今日の自分の春がうれしい。

同じ想い十二度重ねて白々とカラーの花は今年も咲きぬ

四

去年ハカランダが散った時から、淡紫の花を咲かすその樹皮、樹葉のそよぎ、寒くなって落とす様、つぼみはまだかと仰ぎみた冬枯れの時、寂しいにつけ忙しいにつけ、ハカランダを思うことなしには日は過ぎてゆきませんでした。春の日は、みごとに春を取りつくろってくれた天候も、その後定まらない日が続き、例年より二十日間もおくれた感じで咲き始めはしたものの、色は淡く、町中をハカランダで染めるという、ワッと押し寄せてくる力が弱々しい今年です。淋しげです。

ティパの木は、大きな木いっぱいに若葉を繁らせて、木の下を通ると樹液がハラハラと髪や目に降ってきて、アルゼンチンの人は、木が泣いていると言います。花を咲かせる少し前の時に、どうしてこの木は涙を流すのでしょうか。

アルゼンチンの国花セイボは、水辺が好きな木です。濃い緑の葉に真赤な花の只今まっ盛り。初めてこの花を見た時は、ちょっとしつこい色だと思いましたけれど、見慣れ、近寄ってみると花弁の厚い、まめ科の立派な花です。パレルモ公園の池のまわりがセイボの園。セイボの落花がただよう池にボートを浮かべ、花盛りの下へ寄るのが大好きです。これもまた、毎年の楽しみとなって、子供たちもボートを漕ぎながら「今年一番立派に咲いたのはセイボだね」などと花の批評をしています。

アルゼンチンの花々は、私の、子供たちの身体にすっかり入り込んでしまいました。

去年のハカランダが咲く少し前に、ハカランダでの思い出を残して、大使館勤めの友人が、ニカラグワへ赴任してゆきましたが、ニカラグワという国を見せていただき、親しく私に入り込んできた国が内戦を始め、友人を心配する気持から、前後の理由は知らないままに、戦いを憎みました。友人は、上からの命令とはいえ、戦いの中に取り残されてしまって、命も定かでない六人の日本人を助けるために、私たちも通った同じニカラグワの道を、今度は命を賭けて戦争に分け入ったのです。恐かったことでしょう。その彼を待つ小さな子供のいる家族の気持ち。みんなみんな私自身の気持ちとなって考えることができます。

幸せなことに彼の日本人救出作戦は成功して外務大臣賞という輝かしい賞となりました。そして戦いが終わったのでしたら万々歳です。けれど、まだ戦いは続き、異民族とはいえ、私が子供を育てると同じ思いでもって育ってきた人間が殺されてゆくのです。

戦う国は、ニカラグワばかりではありません。アルゼンチンも領土問題で、チリとモヤモヤしています。世界中に戦いのニュースが満ち満ちて、私の二人の子供は、なんの力にも及ばないことはわかっていますけれど、世界が戦うことを忘れるような仕事をしてほしいと思い続けています。どうしたらよいのか具体的な案はありませんけれど、まずは日本人であり、かつ世界人に育てようとしているのです。

夏休みが近づいた、ちょっとそぞろな気持で、ハカランダ、ティパ、セイボ等を自分の経験を通してながめながら、その花のまっ只中に過ごしつつ、あと二週間したら、アルゼンチン生まれの子

供たちを日本人にするために、しばらく冬の日本へ帰ってゆくのです。

友のゆくニカラグワという国知りたくて地理の本地球儀の埃を払う

五

ブェノスアイレスの冬は東京の寒さよりずっとしのぎ易いとはいうものの、やっと冬を終えて輝かしい太陽の日々がやってくることを感じつつも、パラグワイ人の女中さんには、パラグワイに住む彼女の家族の人たちにまでいっぱいのおみやげを持たせて二カ月間の暇を出し、もう一人の通いの掃除専門さんには、留守中のベランダのデリケートなオンブー、コーヒーの木、椿等に、くれぐれも夕方の水を忘れぬよう、わが子と同じ年数だけベランダに住み長らえている二匹の亀にもレタスの葉を日々怠らぬよう、よくよく言い置いて、それとは別に、自分自身には、留守中大切な白玉椿が枯れてしまおうが、とにかく何事が起こってもすべてあきらめることと心に思い、快くリズムに乗っているたった今までの生活を止め、別れに涙を流してしまう友人を振りきって、アルゼンチンの学校へ通う子供の三カ月間の夏休みを日本で過ごすため、日本へ向けての旅の人となりました。

見渡す限りの草原の中にあるアルゼンチンの国際空港エセイサより二時間十五分の飛行機の旅で、開拓が進み、濃緑の野生の部分を大きな爪で引っかいたように、赤土の色があざやかなブラジルの

サンパウロに着きます。

月の大半の日々をこの地で働いている、子供たちの父親の住む国、寝起きする家、食事の様を子供たちに見せたくて、日本への気持ちは押えつつ、彼のサンパウロの交遊の中へ、四日間どっぷりと入り込みました。

「おとうさんの家」と子供たちが呼ぶわが家は床と電話機のみピカピカに輝いて、がらんどうで気の毒なような気もしますけれど、人間一人になって物事などを考えることが絶対に必要だとお互いに思っている私たちですから、これはこれでよいのです。

「おとうさんの家、以外と立派だね」という子供たちの感想が何よりありがたい。

サンパウロはさすが南国、一年分の夏を、この四日間で過ごさなければならないのですから、息づまるような暑さの中でも、ヘビの国の毒ヘビやサソリを、ブータンターの研究所へ見に行ったり、パパイヤの木がある丘の道を車で走り、郊外の立派なプールのある別荘に招かれて、泳ぎ、ワインを飲み、アルゼンチン式とよく似た焼肉を食べ、しゃべる。ポルトガル語は、よくわからないのだけれど、アルゼンチンに着いて言葉をなくし、雰囲気だけの手さぐりで過ごした時期を経過した私には、スペイン語とよく似た単語が混るポルトガル語には、おどおどしません。食後の一休みをするユーカリの木漏れ日も焼ける暑さ。この暑さも午後四時を回る頃より不思議にはだ寒いような温度となります。まさかと思えるこの地に、大した心地よさがありました。何といってもブラジルでの一番の感激は、青物市場へ行った時のことです。パパイヤ、マンゴ、バナナ、パイナップル、名

も知らぬ南国の果物の数々。質と量の豊かなこと、そして、日本で買う果物一個分の値段で一箱も買えるほど安いこと。とりわけの感激はパパイヤです。アマゾン地帯に産する小型のパパイヤに、ブラジル、パラグワイ、ペルー等に産する丸い小さなレモンをかけて、朝も昼も食べまくった味。人間の本当の生きざまの近くをさまよった気持ちになりました。

今、東京の防腐剤、高価な食料品、その上、寒さの中にいて、ブラジルでの野生的な日が、いかにも健康的に思い出されること。そして、アルゼンチンのヨーロッパ的なエレガントな生活もなつかしい。

木の薫りのする日本のお風呂が大好きというアルゼンチン生まれの子供たちは、行く道に、お寺が神社が道祖神があれば、お賽銭をあげて詣るということに情熱をそそいで、日本の外に国があるということを忘れているかのようです。

アマゾンの樹海の一枝削られてわがスープ飲む匙となりたり

六

アルゼンチンの独立記念日。七月九日より二週間、小学生の冬休みが始まりました。何処で冬休みを過ごすかということが暫くの間、人々の話題でした。先入観を与えず、冬休みにしたい事、行

きたい所を我が子に尋ねたところ、体操もバレーも絶対に休みたくないという子供たちの意見が勝ち、船でラブラタ河を溯って、パラグワイまで行くという私のアルゼンチンに着いて以来の憧れの旅も、親しくしている友人のコルトバの別荘で、馬に乗ったりして過ごそうという招きも、アンデス山脈の麓へスキーに行くという毎年の行動も、全部あきらめました。

それに、もう一つ大事なことは、日常のアルゼンチンの学校へ通っている生活では、宿題、習い事に運動を加えたら、もう大急ぎといいながらの食事と入浴の時間しか残りません。日本語は大切だと言いつつも毎日は時間切れで過ぎて行ってしまいます。冬休みには漢字が多くなっている日本の子供たちと同じレベルまで日本語をもってゆかなくてはなりません。好む好まないに関係なく、日本の血を持って外国に生まれてしまった私の子供に、外国で育つことを総じての面でプラスにしてやりたいとの思いは切実です。特に、アルゼンチン国籍を持っていても、アルゼンチン人と同じ生活をしていても、日本の顔を見れば人々は日本人と見ます。その顔のごとく、日本人としても通用するように育たなくてはなりませんから、一人何役も兼ねることになり、定められた時間の内で、定めた目的に向かってまっしぐらです。それでも冬休みは年齢に応じた冬休みらしいことを少しは盛り込んでやりたい。お月様にも、昔話にも欠かせない餅搗きを見せたい、との願いが叶って、郊外に住む日本の人が餅搗きをしましょうと誘って下さいました。日本から送ったり、ブラジルから買って来たりとお餅が大好きな子供たちも、どのようにして、それが出来上がるのかは知りません。日本で育った私ですら、目が醒めると湯気がいっぱいの台所から、ペッタンの音が聞こえてきて……

という程度で餅搗きの記憶は終わりです。まさかアルゼンチンでそんなこと実現出来るとも思っていなかったのに搗きたてのお餅が食べられるとなると、日本から持ってきたきな粉に砂糖を混ぜ、胡桃をつぶし、きざみねぎに醤油、あんこも作り、奇特な日本人が作って売りに来る納豆も加え、用意が出来ました。気にしていた天気が道中だんだん晴れてゆくのがなんとも心楽しく、初めてゆく目的の家を探し当てました。

パワグワイに住んでいた日本人が作ったという臼は、まわりまわってアルゼンチンのブェノスアイレス郊外の芝庭に置かれ、それもどこやらからの借り物だということでしたけれど、「わー大きな金槌」と子供たちが叫ぶ杵もかなり使い減っています。外国へ移り住んだ日本の人がこの臼と杵から日本を偲んだことが思われます。

庭の隅の方で丸太を燃しつつの蒸籠から湯気が上って、「初めまして」のあいさつもそこそこに、六十歳くらいのおばあちゃんと呼ばれている婦人の手返しの腰に力が入って、私の前の世代の日本の女のかっこう良さを見ました。そして我が家同様、アルゼンチンの学校へ通い、モニカという名前がつく日本の顔をした女の子と我が子は仲良しになり、アルゼンチンの遊びはスペイン語で、日本の遊びは日本語で遊びました。

餅がねばって子供の力では杵が持ち上がらないことを経験し、搗き上った餅を丸める時、ほのかに暖かく、まろやかなやさしさを両手で知りました。アルゼンチンの日向での餅搗きは、滑稽なような淋しさも漂わせ、何日間も大人同士の日本語を話さない生活をしている私に、久しぶりの日本

調でした。

日の丸と生まれしアルゼンチンの旗振りて二つの国に育ちゆく吾が子

七

冬枯れの木々の中に、ハカランダに良く似たラバチョの梢がうっすらとピンク色になってくると、冬を忘れがちのブェノスアイレスでも、春が間近になった喜びが、微笑となってしまいます。

ひと冬着続けたオーバーやセーターが、むやみと重く、あきあきしてくる九月初旬、濃いピンクに満開となったラバチョの下で、ひと花ふた花その落花を拾う頃、木瓜、小手毬、藤等、日本の生活でも常に身近にあった花々が咲き、またたく間に、木々の芽が幼ない葉となり、大きさと色を増してゆきます。若葉を透かせて見える晴天の空、曇りがちの日。もはや暦の上での「春の日」を待つ必要はありません。

オンブーのまだ葉の出ない時期に自転車を覚えた娘は、若緑に繁るオンブーの並木をあぶなげなく走って、名を知るも知らぬもさまざまな種をポケットいっぱい拾って、「大冒険をしてきた」と春の近い木々の中に身体いっぱい参加しています。

ハカランダやセイボやティパは、まだ葉のないまま、たわわに種をつけての熟成の期です。パボ・

ボラーチョはビヤダルの姿に棘をつけて、楕円形の実がブラブラとして、まったく道化している珍しい木です。その実が爆ぜて綿毛に包まれた種が風に乗り、パレルモの芝に広がっています。「パボ・ボラーチョの綿を集めた枕を作ったら、雲に寝るみたでしようね」などと話しながら、日本へ行く日のことを思い浮かべつつ、日本の地へ、この奇妙な木を育ててみたいと種集めを楽しみました。その軽やかな綿毛にまじり、サッカーの国のサッカー熱が熱し切って、学校のノート、計算機からの紙、テレックス用紙もトイレットペーパーも皆千切られ、紙吹雪となってアルゼンチンをおおった日がありました。喜びの表現なのですが、私には、誰が掃除をするのだろうということの方が気になって落ち着きません。

日本で開催されたユースサッカーの世界選手権に、アルゼンチンチームも参加しての出来事です。十二時間時差のある日本時間とアルゼンチン時間の都合で、アルゼンチンでは、早朝の四時とか七時とかの、とんでもない試合時間にもかかわらず、人々は、テレビの前にかじりつき、日本から送られてくる映像に全神経で入り込んで、学校も職場も、その正常な活動は麻痺してしまいました。我が家のお手伝いさんも、丁度子供たちの学校行きの支度をする時間ですから、テレビの前に座って居られないのが不服でした。「なんたることだ」と嘆き言う人の声など、消えゆく以外はなく、日本の人々がアルゼンチンチームに旗を振る。日本の顔が日本の文字がアルゼンチンのほとんどの人たちが見ているテレビに写し出される。選手たちやアルゼンチンのジャーナリストが日本での見聞を語る。道を歩けば知らない人々がアルゼンチンの友人たちが「日本のおかげでアルゼンチンが勝

てた」と声をかけてくる。サッカーのこと故、この出来事はアルゼンチンの人々の記憶に長く永く残ることは確かです。

日本の血を持った私の子供たちが、「日本へ行っても、ヨーロッパへ勉強に行っても、帰る所はアルゼンチン」と言い切っている国と、私の帰ってゆく所と心のささえになっている日本とが、他愛ないこととはいえ、地球の上で深く関係したことが、改めて、外国に住み、子供が育ってゆく現実の私たちの行き方を見つめる機会となりました。

日本より伝わりきたる映像に紙吹雪舞い乱るアルゼンチンの街

八

激しく大粒な雪が降る音に目覚めた夜中、「春になったのだから」とベランダに出しておいた鉢。ここから先が春になった証しですとばかりに、古い葉と春の葉の色と差をつけて急激に伸び始めたコーヒーもその他の草木など大丈夫かしらと思う。天から降る激しい物を避ける何物もない、ただ平たい牧場の牛たちもさぞ困っていることでしょう。雹に当り、目がつぶれた牛のこと、跛になった犬のことなどよく聞きます。シャッターを通して部屋がパッと明るくなる稲妻に、アルゼンチン住い十三年間に集まってきて壁いっぱいなっている動物の面が浮びます。アルゼンチン北部サルタ

地方に住むチャネー族が、パボ・ボラーチョのフカフカと軽い木を刳り貫いて作る収穫の祝いに使う面です。下手糞に出来ているこの面に魅せられてから、それも収集家というでもなく、折につけ、出逢うにつけ、その時々の私の思いを面にとどめて増えていったのが、アルゼンチンの人も「これはめずらしい、日本から持ってきたのですか」などと言うようにたまりました。子供たちが「お母さんの博物館」という私の居間は、確実に世界のどうでもよい品々を集め続けています。

私のガラクタは、誰か偉い人が価値を決めて高価になった物ではなく、私だけが勝手に決めただけの物です。木目が残る木の化石を買った時は、財布の中のジャラジャラしているので充分まにあいました。今年になって、もう一つと思った時には百倍の値がついていて、あっけにとられるばかりです。高価な物はどうせ買えませんから、いつか大金持になった時にとあきらめて通ってしまうものがとても多いのです。

パラグワイに近い地域、フォルモサのマタコ族が、パロ・サントという香りのある固い木で作る、その地に多い鰐や蜥蜴の動物たちを見つけた時も、うれしさのあまりダンボール箱いっぱい買いました。今ではやめておこうという値になってしまいましたれど、訥々と出来ていて、作っている周囲の生活、風景などが思われてくるような小動物に夢中です。

南部パタゴニア地方を旅した時、昔住んだ大きな足をしたパタゴン族が、釣りや狩りの為に石を削って作った鏃を見つけ、「これは売物ではない」というおじさんに「欲しいな欲しいな」の一点張りでわけてもらい、その削り口より、寒い石ころばかりのだだっ広い地方での彼等の生活が思われ、

大切にしています。
コルドバのミナ・クラベロとはアルゼンチンの丁度真中くらいの地域。低温で焼いた土の動物。埴輪以前の単純さで、それでいて野羊、リャマ、牛等それぞれの特長が把らえられていて愛らしいこと。同じ土でも、野羊の糞で焼くと真黒い焼物、牛の糞で焼くと黄茶色に出来上がるのだそうです。尻尾がない野羊を持っています。これは七歳の女の子の作で「尻尾をつけるのを忘れてしまったの」という彼女の言葉が今でも耳に残って、私の居間におさまっています。
ニカラグワの鼻が丸いマテの面、私が見つけてから二週間の後には、その面のあった位置は爆撃され、面を作った人、ニカラグワの人たちがどうなってしまったかということを、思い続けます。
インド洋のセイシェル諸島にだけあるお尻の形をした双子椰子の実。「変な物が好きだね」とおっしゃりながら近藤典生博士が下さいました。まだまだ限りがありませんが、子供たちが独立したら、大きな空を見ながら紙も鉛筆も関係ないこれらの野生に近い物の中へ入っていって暮らしたい、などを思いながら、私自身が作る、描く、まだあまりレベルの高くない品々も増え続けているのです。

その昔狩猟に使いしという石鏃並べ置くなり私の枕もと

九

「あと何日学校へ行くと夏休み」と子供たちの指折りが始まっています。夏休みといっても、日本のように学年の真中でやってくるのではなくて、学年末にやってきます。ですから来年三月十日から始まる秋の新学年に進級出来るかどうかのテストがあったり、一年の成果を発表する体育の日、音楽の日、手工芸の日といろいろあって、普段御無沙汰の学校への招待状がしばしばもたらされます。休みになったら一目散に日本へ行こうとしている私たちの生活にあわただしさが増します。

学校の外に習っているバレーも発表会があり、その衣裳のこと。体操もエキシビジョンがある、練習。ですから学校のテストがあるという紙切れを持たされてきても、そのための勉強をする、という暇もありません。常の日に必ずある宿題も、「いやならやっていかなくてもよい」と言い渡してありますが、年間を通じて、やっていかなかったことはないようです。親が学校に興味を示さないと、子供の方がしがみついて勉強をしているような感じです。

私には不自由な、スペイン語の歴史、国語、地理等、小学校程度といえども自信を持って教えることは出来ない故の開きなおりとも言えますが、私の方が幼い子供に教わることばかりです。

セイボが咲いた、ティパが咲きそう、ハカランダは今年の雨と涼しさで、とてもかわいそう。あわただしく通り過ぎる時に見上げます。ハカランダの木の下に駐車していたのでしょうか、雨に濡れたハカランダの落花を屋根に乗せて走っている車によく出逢います。

私は、子供だけにかかりきっているほど、穏やかな性格ではないので、子供の日程の中へ最大限に割り込んで、今差し当って売らなければ、教えなければ、ということがないを幸いに、実力をつけておこうと、人体デッサン、彫刻、墨絵、陶器と、まだ社会的に通用するのには劣る次元ではありますが、頭や手を使うことに満足しつつ、続けていれば、いつの間にか、なにやら出来てくるもので、それぞれのアトリエの一年間の締め括りのグループ展に参加して、何が何でも十一月のうちに一九七九年度を終わらせてしまおうというお国がらに従っているところです。

一九七九年度の私の平面の作品にも、立体の作品にも、すべて姿を現わすモデルのアマリアは一流のモデルで、私ごとき素人の手の届かないはずの人なのですが、一応美術の辺をさまよいたい者として、どうしても自分の弱点に勝ちたく、強引に頼み込んだのが二年前の出逢いです。それ以来私の眼中には彼女しかなく、彼女を、難しい技法や難しい材料を使わない、紙と鉛筆、もしくは墨でもって、光と影で表現することに夢中です。

アマリアは長年、アルゼンチンでは有名なアーチストのアトリエばかりで仕事をしていますので、目が肥えていて、私の苦手を何度も何度も描かせるようポーズをし、アドバイスをしてくれます。私が上達するのを全身で手伝ってくれるという感じです。

モデル職から離れても、昼食をともにしたり、子供たちと散歩に出かけたり、ゲームをしたりと、子供たちの友だちでもあります。私の世間話の相手であり、一緒に展覧会に出かけ、一流の彫刻家たちとも、彼女を通じて知り合いになりました。彼女は、「よいアーチストのモデルになる。仕事を

愛しているから」といつも言っています。既成の芸術家、未完成の学生たちの母なる存在だと思います。また来年も私は彼女と共に歩くつもりです。そして、気持ちよさがにじみ出てくるような作品に行きつくために。

肉を食うナイフで削つた木のペンにて線を描きたり裸婦が描けたり

十

何も出来なかったような、じっくり成果が上がったような、やはり帰ってきて良かった、などとの思いが交差しだすのは、柳の葉が緑に残っていた秋の名残の日本に着いて、まだ三カ月間の夏休みを始めたばかりのような気がしていたのに、やたらに沈丁花が目につきだし、桜の枝先が気になる春になってきてしまった日でありました。

外国のベールを通して日本を見る目を持ってしまったアルゼンチン生まれの二人の娘と私の日本での悦び、戸惑い。

子供たちが一番つらいのは牛肉の味です。すき焼きならそういう食物と思うらしく牛肉も食べられるものの、ビフテキ、ハンバーグなどアルゼンチンと同じ料理方法となると牛肉の元の味が違うので食欲はありません。それでなおかつ「骨付の肉が食べたい」そのためにはすぐにでも飛行機に

乗ってアルゼンチンへと思い逸るのです。生れ育った味がいかに良いものかということを知りました。

私は日本の食物に渇望した舌でもっていきおいよく口に入れた品々に「昔はもっとおいしかった」といまひとつ有頂天になれないでいます。片思いで、あまりにも美化しすぎてしまっている故でしょうか、日本の味のレベルが下がってしまったのか。おしなべて私には甘すぎて塩辛すぎます。合成着色料、防腐剤、合成甘味料等々、読んだだけでもう子供に毒を食べさせる気持ちになってしまい味どころではありません。

外地に住んで、なんとか日本の味を作り出そうと、無い所から工夫して作り出す悦びを味わってしまったら、有り余って暮らすことの無神経さがふやけて感じられ、いつでも誰にでも出来ると思うとやる気をなくし、ひたすら手を抜いて仮住いの感を大きくして生活してしまいます。アルゼンチンへ帰ったら、あれも作ろう、これも作ろうと保存のきく日本食の材料を船荷物にしていくつも送り出しています。

世界の市場を埋める日本の小綺麗な文房具玩具の本場で、それ等を目前にして「この人形、由野が買ってあげないとかわいそう」と涙をこぼしながら、ありったけのお年玉で買いまくりたい次女。アルゼンチンに牧場を買いたい私の夢をかなえてくれようと、欲しい物も思いとどまり、交際を円滑にする学校やクラブの友達へのおみやげは、スーパーマーケットで何円か安く買い、ひたすら貯金にはげむ長女。

私たちの東京の毎日は、九カ月間のブランクを取りもどすべく元日に霜柱の跡が残っていた多摩墓地へお参りに行った日を除き、スケート場通いです。夏から冬への温度差にも負けず、きびしいレッスンにもやる気で、去年まで、私がスケート靴をはいて子供の後を追うようにしていたのが嘘のように、すべりたくてもすべれなかった思いが子供たちを大きくしたのでしょう。私は隠居の身となり暖房室で本を読みながら、区切りごとに子供たちの練習を見つめ、たわいない遊びといえばそれまでですが、決めたことにありったけの力でぶつかってゆける健康がうれしい。

私は、だいたいの意味はわかるというスペイン語から入ってきている情報のみに暮らして、その淋しさに驚くとともに、もう日本語から知識を得る以外はないという思いを強く持ちました。本を読めばあらゆる分野の知りたいことがどんどん私に入り込んでくる、そのおもしろさにとりつかれています。今年は、子供たちに割り込んで、本を読めるゆとりを得ましたけれど、もうすぐ日本語の本が買えない国へ帰ってゆく。先にアルゼンチンへ帰って行った子供たちの父親は「何か変わったことはないか？」と時々電話をかけてきています。

洗足の池に緑の映る日を思い描きつつ立ち帰りゆく

一一

日本の三、四倍、世界の最たる物価高国と成り上った？　アルゼンチンで、我が子が「毎日お肉でもいいよ」と気をきかせて言うほどに牛肉だけは日本の十分の一くらいという安さです。この国の人々から牛肉を取り上げたら、その恐しさを十分知った上でのなりゆきなのでしょう。移りやすい国の動きに、いつまで今の状態が続くのか。記録に残るほどのことでもなくすぐ通り過ぎていってしまう事なのか。日本、北米近辺を見てきたばかりの目には、無用に高価で、品質の悪いアルゼンチン製品にはなじめず、そんな中で、より実質、効果的な物を選んで生活する他はありません。

アルゼンチンの人たちからよく質問される我が家の食習慣は、朝食は、起きるのが辛い子供たちは、紅茶は飲みかけだったり、ご飯に味噌汁かけ、クロワッサンの子もいる、と五分か十分間の出来事で、寄せ集め、残り物、気分次第というところです。夜食は、酢の物、煮ころがし、漬け物、納豆、汁物等を基本とした歴史に置いてゆかれたような日本風です。

午前中で学校を終える子供二人と、食事のあとすぐ始まる子供たちのギターと英語のアルゼンチン人の家庭教師と、私との四人の昼食は、パラグワイ人のお手伝いさんがいた八年来の習慣通りアルゼンチン風です。ミラネッサとは牛カツで、味覚の幅の狭い外人の子供が遊びに来ても、これさえ出しておけば間違いないという食物。付け合せはポテトフライもしくはマッシュポテト。もちろん一番手間のかからないものの、焼き方が難しい一人前五百グラム級のビフテキもしばしばです。

我が家では凝ったことはせず塩味だけ、それに焼き上りに醤油を一、二滴。ほんの外側だけ火が通って、中は生でないといけません。鰹の叩きと同じです。中まで焼けてしまうと子供たちからも苦情がでます。そのままが一番おいしくて、時には生姜醤油、セロリ、玉葱、マッシュルーム等で作るソースで気分を変えることもあります。超大型ハンバーグをじゃがいもなどと取り合わせてオーブンで焼くとパン・デ・カルネ――とは肉のパンの意味です。

姿のままの鳥には青リンゴを付け合わせにしてやはりオーブンで。エンパーナーダは、姿、大きさが餃子の王様みたいなもので、小麦粉を練った皮の中味は普通、ひき肉、ゆで卵、ネギ、オリーブ等ですが、工夫次第で何を入れてもよく、これまた並べてオーブンで焼きます。気軽にお客様を迎える時は「エンパナーダですけれど」などといってお招きします。まだまだいろいろありますが、だいたい大きく用意して、オーブンに押し込むというのがこちらの主なる料理法です。

これら主食の他に、私は毎日牛の骨付き肉だったり、鳥の丸ごとだったりに、ネギ、セロリ、ニンニク等を入れてのスープ作りの大鍋のあく掬いが仕事です。それに生の人参をおろしたのと、形もさまざま、泥もついているけれど太陽のトマトのサラダは感嘆詞つきでおいしい。日本滞在中に同じ様にして作った時は、人参もトマトも味が違うといって全然食べてもらえませんでした。

八十キロを超す体重の二人のお手伝いさんにかわり、子供たちから「おかあさんは掃除もお皿洗いもマルガリータより上手なんだね」と褒められながら。

日本とアルゼンチンとを棲み分けて仰々しきことは嫌いになりぬ

一二

世界を動き廻り、一年の内四分の一程度しか家族と一緒に過ごせない子供たちの父親。私たち女子供三人のみの極小単位の日本語通用の範囲。一歩家の外へ出ればスペイン語。来客もスペイン語の人たち。学校、英語、体操等、皆スペイン語で習います。私は子供向きに出来ていない性格らしく赤ちゃん言葉は使えず、子供たちは生まれた時から対等唯一の私の話相手でした。こんな生活の中で九歳になったばかりの長女玉由の此の頃の言葉の端々。

宗教が重んじられ、キリスト教が中心のアルゼンチンで、学校の友だちがそろって洗礼を受ける時、日本人である玉由の家系を説明した後、アルゼンチンで生まれ、ここの友だち、習慣で育っている彼女自身に宗教を選ばせました。ひょっとしたら親子で宗教が違ってしまうかもしれない重大な時、「生まれた時から玉由についていて下さる神様を変えるなんて、そんなこと出来ないよ」と結論を出してくれました。小さな女の子が、花嫁衣裳と同じに憧れる洗礼の白いドレスに負けることなく。住んで直面しないと気付かない大きな段階を、上手に一つ登ることが出来ました。

十三年スペイン語の中に暮らし、今だに理解出来ないことがいっぱいある私に、「お母さんも玉由

も同じ日本人の顔をしているのに、お母さんはどうしてスペイン語が下手なの」

アイススケートをさせたい為に、カナダへ引越そうと考えている私に「スペイン語が上手に話せないのに、その上また上手に話せない違う言葉の国へ行くつもりなの？」よく理解出来ないのを善い事にして、自分の興味のあること以外は馬耳東風で暮らす癖がつきすぎたかもしれない。

どうしてもスペイン語が楽になってゆく子供たちに、日本語に興味を持たせようと私の方もあの手この手です。日本から送ったシートン動物記、ファーブル昆虫記にはのりだしてきました。私の子供たちは根拠のない誇大な妄想を好みません。「シートンさんの本はとても気に入ったよ、一つも嘘のことを言ってないと思う」ダーウィンさんの話をした後、「人間が昔のことを忘れてしまわないように今でも猿が昔の人間を代表していてくれるんだ」「人間の頭というのは毎日毎日利口になるんだね。今日学校で習ったことは、きのうは知らなかったことだもの」「他人は自分の思いどおりにはしてくれないから、人をたよりにするのはやめよう、人間ってみんな違うんだね」

私に運んでくる見出しの大きな新聞に憂いて「アルゼンチン人はアルゼンチンに住んで、日本人は日本に住んでいていいけれど、地球は一つの国と思えば戦争なんてしなくてもいいのに」日本から一番遠い国に住んで、子供を育てていて戦争への恐怖を常に持っている私の影響を受けているのでしょう。歩き始めた頃の玉由に、戦争で水が飲めない人がいる事を話した時、彼女の小さな水筒と玩具のバケツに水を満たし、「水をあげにゆく」といいました。その時も今も、苦しみ死んでゆく人たちに一滴の水をあげられる実力も私にはありません。

「お母さんが怒って玉由を蹴飛ばす時、玉由だって頭にきて叩きたくなるけど、これが玉由の大切なお母さんだと思うと、思いとどまるんだよ」という玉由に甘え、「お母さんは日本で生まれたから日本が良いのだけれど、玉由はアルゼンチンで生まれたのだからここが好き、だから何処へもいかない」にとまどい、平穏無事だった今までの私の家系に確実に新しい人間が育ってきています。

日本へは行くアルゼンチンへは帰るよと言いつつ寝たり私の幼子

一三

アルゼンチンの北部砂糖黍の産地トウクマンにおいて、一八一六年七月九日に独立を宣言した記念日がやってくると、ブェノスアイレスではもっとも寒い時期。学校は冬休みに入ります。日本と同様に四季がある国なのに、どうも冬が嫌な民族の様で、ドルに換算したらアルゼンチン国内で生活する同じ費用で旅行して買物が出来ると、マイアミへ、ブラジルへと暖を求めての話題が行き交います。

学校より一枚の紙切れを降りかざして「絶対に行く」と勢いよく帰ってきた日より幼い頭を満たしてしまった、メンドサ、サン・ファンへの十日間のキャンピングへ。学友とはいえ外人に混って、それもブェノスアイレスから千キロも離れた地方へ、汽車に乗って十六時間、南米大陸で一番高い

山アコンカグワの麓までも行ってしまった玉由。彼女の期待と喜びに圧されて、冬装束のスキーまでするという大荷物。その上未経験のキャンピングへ九歳の十分に日本人的な娘を一人出すということへの不安を忘れて送り出した後、メンドサで風速二百キロの突風があって電気が切れたとか、今年は特別寒いとかのニュースを聞くにつけ、あの大荷物を一人で引きずり運んでいるのだろうか。子供の世界の厳しさ、彼らと同じ民族の顔ではない我が子が仲間はずれになってはいまいか。生まれた時から子守に付添われ、名門セリーナ一家の庇護の下に、行列をするなどということは知らずに育ってきてしまった娘が、指定された琺瑯のお皿で、分けられたアルゼンチン料理を食べているのだろうか。

自分が一人で食べるだけだからと、ゆかりのおむすびを二個だけリュックに入れて旅立って行った後、仕事で出かけた日本より帰ってきた父親は「生きて帰ってきさえすればいい。身体にも心にも過程が厳しければ厳しいだけ強くなれるのだから。かわいそうだけれど我慢して見守ってやるのが親の役目だ。特に外国で生きてゆく人間になるのだから厳しい経験が必要だ」と離れ住むのに慣れている弁。「この家に、しばらくけんかがなくなるね」という次女は、何をしたらよいのか見当もつかないらしく、やたらうろうろするばかり。子供たちを自分の見える範囲に置いて言うことをきかせておくことが、どんなに楽なことか。

「お母さんが通れば道理が引っこむ」と玉由がいろはガルタをもじって私を表現。その母親なし、味噌汁なしの日々を過ごし、雪焼けして帰ってくる日が待ち遠しい。

外地に住み、目先に追われ、親戚も歴史もなければ、行動範囲が狭くなるもので、今回汽車でメンドサへ行く玉由を我が家から遠くないレティロ駅へ送りに行って、私は十三年間住むこの国の汽車に乗ったことがないことに気付きました。学校で私が知らないことを習ってくるのと同様に、私が知らないことを一人で経験してゆく我が子。

当時まだあまり有名になっていなかった植村直巳さんが、食事の支度をする私に代って生後まもない玉由をあやして下さった時より八年強の月日がたって、世界にその名前が輝くに至った彼が「玉由ちゃんに逢えるかな」と玉由の三日後の同じ汽車で積雪のアコンカグワをめざして行かれました。

忍耐と勇気と謙虚の月日を重ねた植村さんに逢い、より良い月日が我が子の上に重なってゆくよう導いてゆくことが、何にも増しての贈物になることを思うのでした。

鳩のみを追いたる視野の育ちゆき玉由は見るアコンカグワを

一四

誕生日を、思うほど若くもなく年寄りでもなく、忘れて通り過ぎたいのに、どんな書類も決まって書かなければならない日付け。

鬼百合は咲きのぼり、台風の気配、私の誕生日は、長い間、そんなちょっぴりもの悲しげな夏の

終わりにやって来ましたが、地球を半周しての引越しでアルゼンチン住いを始めてより、オンブーは勝手気ままにニョロリと出した枝先に小さな芽を残すのみの枯木スタイル。ハカランダは固く平たい実がゆれて、やたら大きく目立ちます。セイボの白っぽい枝先。全部の草木がなんとなく注意を呼ばない、エネルギーを内に秘めての冬。窓を鳴らしてゆく風は、南極からやって来るというずいぶん掛け離れた感覚の中に、私の日付けがやってくるようになりました。

朝から友人、知人から、「誕生日おめでとう」と電話が掛ってきます。ちゃんと貴女の日を覚えていますよと表現する社交上の大切な手段です。私も決して友人の誕生日を忘れてはいけないと思いを新たにするのです。

この日をそっと静かに通り過ぎたい当人に反して、子供たちは、私を喜ばせたくて浮きうき。皆に誕生日の印のチョコレートボンボンを配るのだと、五百グラム入りの箱を持って、いつものようにクラブに着きました。

でっぷり大きな、更衣室係のおばさんが、真赤な口紅の口をベチョッと私の頬に付けて「おめでとう」と覚えていてくれました。踵の高い天鵞絨のスリッパを贈ってくれました。スケートに冷えた私たちに、熱い紅茶とやさしい言葉。未だ四歳にならなかった由野を引きずるようにして、スケートをさせだした頃からの付き合いです。体操に疲れた由野がひと休みする膝の持ち主。玉由が上手にすべると誰よりも大声で喜んでくれる人。彼女の仕事の範囲を超えて世話になり続けているのです。

クラブの中には友だちがいっぱいいますが、特に私は、門番のおじさん、ロッカー番のおばさんたち、掃除のおじさんたち等、クラブを支える一番底辺の人たちと仲良しです。子供たちと喧嘩をしたり、クシャクシャしている時、クラブのおじさんたちに、大きな声であいさつをすると、もう大丈夫。

常のクラブでの時間を過ごして、「学校の勉強も見てあげられない落ち零れお母さんだけど、気を配って楽しい日にしてくれてありがとう」と子供たちへ私。「お母さん、人間は心だよ、大丈夫、良いお母さんだよ」と子供たちに励まされつつの帰途。

父親の留守の真暗いはずの我が家にたどり着くと驚き。セリーナ姉妹が家を間違えたのかのごとく、明るく、御馳走を持ち込んで、一ぱい機嫌で私たちを待ち受けていました。内証で計画をして、疲れ、寒く、暗く淋しい帰宅時をパッと華やかにしてくれたのです。

まず目に入るラクエル手製の背の高いケーキ。今夜は何を食べて寝ようかととまどいだった私たちの口に、沢山の鳥の足を長く煮て作ったゼラチンのおいしいこと。体操着の上に素早く、パーティドレスを着てはしゃぐ子供たち。ドイツ製というキャビア、フランスが元のエサディビアにカビチーズを乗せて、ウィスキーと共に。じわりじわり、身体も心も暖かくなってきて、朝早くからケーキを焼いたり、買物に走っただろう彼女たちの一日に思いは至る。

アルゼンチンのお友だち、私の子供たち、ありがとう、ありがとう。

今日よりも寂しさ深き日は無しと過ぎし日のこと思い出づる日

一五

家事、そんなことの中にもきっと喜びがあるにちがいない、と初めて本格的に取り組んでみた六カ月間。私にとって、白け諦めの中にだけ存在するこれらの雑事を、黙々と続けて来て、また続けゆく女人のことに思いが至ります。アルゼンチンにまで来て、何故こんな事をしていなければならないのかと、自分の存在感まで消えてゆき、どんな事にも朗らかに向かってゆかれない、輝かしい喜びが飛び込んでこない心の持ち主と化す。

アルゼンチンへ着いた当時、無我夢中で突き進んでいった、あのひたむきな心はもう戻って来ない。何となく暮らしてゆかれる今を幸せな時期と言わねばならないのだろうけれど、こんな幸せなんて私の好みじゃない。切羽詰った我武者羅感に恍惚とした味を知るともう家事だけしていればよいなどという、生活の中に閉じ込めてはおかれない人間になってしまう。ところが現実は、人並に昼食用の二キロほどの骨付牛肉が焼けてくる匂いを漂わせ、子供たちが帰って来るまでが私の時間。何をしようかと焦りつつ、行く雲を見ているうちに終わってしまったり。あまりに短い。

今現在の私は、私流の子供の教育、彼女等の生活のリズムを乱さない為に、最低必要限度しかお

客様をしませんけれど、日本からのお客様は、何曜日の何時にでもアルゼンチンを短時間に見る為にやってみえます。生涯にほんのひと時しかこの国を見られないかもしれない人たちに、視界も味覚も私たちの出来る限りのことをします。アルゼンチンに着くなり、お茶漬、漬物と泣かんばかりの人。パンと肉が大好きで少しも困りませんと痩我慢の人。旅をしてでの自分の経験やら日程、注文などを織り混ぜて計画を立てます。日本人がアルゼンチンにていかに暮らすかというのは、我が家で人参、アンディビア、チーズ類、すき焼の残りの玉子とじ、昼の残りの肉の薄切りに芥子醤油と手当り次第の気軽な物でのコペティン（食前酒）の時を過ごし、子供たちも学校で習っていることなど話しに出てきます。

引き続き、私の習ったことのない日本料理擬の物でも、望まれれば作りますけれど、折角こんな遠い所までいらしたのだから、アルゼンチン風レストランへ、肉の量の大きさに吃驚しにゆくべきです。食事の後はタンゴのショーが、夜中の十二時過ぎに始まりますから、是非見なければの使命感に燃えるか、体力負けであきらめるか、拍手する時だけ目を覚し、あとはいねむりなんてことをしに行くことになるか。私たちの工場のあるチビリッコイまでお連れすることもあります。

目的は道中。アルゼンチンが世界の国に対し胸を張って、自国の言いなりを通してゆく裏付けとなる真っ平な豊沃な土地がどこまでも続く。六千万頭いるという牛のほんの一部分が草を食むのが見渡せる、太陽の下のアルゼンチン。こういうおもてなしをすることが多かった十月が過ぎようとしています。

子供たちが「先生も生徒も、夏休みの前触れで、なんだかやる気がないみたいよ」などと報告する。太陽の日射しに教えられて、私たちの日本へ移動の時期が近づいてきています。ポトポトと脂を落しながら、ゆっくり煙のしみた焼肉のことを思うと、他の国へ行くという動作に躊躇感が伴います。旅に出た日から、アルゼンチンへ帰り着く日まで、この肉のことを思い続ける羽目となるのですから。それから、私たちがカロチンの味と呼ぶ柿と同じ味が混る人参とも離れ難いのです。

日本より一番遠き国に住みてもつとも贅沢は日本の真似

一六

ひと花拾い上げれば、その造形は限りなく愛しく、このところ自分の存在感を失いがちな心もまぎれゆく淡い紫の花。ハカランダの時期、ハカランダの咲く道をひた走る車に乗って、ブェノスアイレスの町から百十一キロの距離、サン・アントニオ・デ・アレツコ村へ向けて。

一九二七年に国家文学賞を受けた、アルゼンチスガウチョの文学代表作品「ドン・セグンド・ソンブラ」の作者、今は亡きリカルド・グィラルデスの孫の結婚式に出席するために。

リカルド・グィラルデスは大牧場主の家に生まれ、パリに、世界に遊学し、そして生地アルゼンチンの大草原を書き、今日彼が執筆した彼の牧場で、アルゼンチンさながらに執り行なわれるとい

うセレモニーは、そうやたらに出逢えるものではありません。年に何回かは爆発する私の我儘でもって、出席出来る数少ない幸運を手に入れました。

サン・アントニオ・デ・アレッコ村での、ローマ法王からのメッセージが読みあげられた教会での式が済むと、晩春とはいえ飽和状態に暑い玉蜀黍と穂が出始めた麦が見ゆる限りの畑の中の道を、砂煙をあげる車で五分ほど。黒の衣裳に、太いベルトぎっしりに銀貨をはめ込んだ正装で馬に乗った二、三十人のガウチョたちに迎えられると、ガウチョの勇者ドン・セグンドの世界にやってきた興奮度は最高。

牧場の歴史、由緒がしのばれる、木ではないとは言うけれど大きな大きなオンブーの花盛り、みごとに咲いた泰山木、やさしい木漏れ日を作る梅檀、太い丈高いユーカリの放つ香、思わずみとれるカタルパの花。

そんな木々の木陰に、野の花で飾られたテーブルが用意されて、宝石や金キラとは違う、人間本来の豊かさ、暖ったかさがにじみ出ているパーティの場所。テーブルの置かれた木々の向こうは、草を食む馬の牧場が地平線まで続く。

御馳走は、こんなに沢山の食物が地球上にあったのかしらと思えるほどのアサードです。絨毯と見ゆる量の鳥が焼ける、特別なレストランで特別に食べられることもあるアサード・コン・クエロとは、牛の毛がついたままの肉を、ゆっくりの炭火で丸一日かけて焼く、皮ごと焼いたじゃがいもがおいしいのと同様です。焼きふくまれたおいしさはアルゼンチン料理の圧巻。野生的、原始的、

狩猟人間が始まった時のまま。

アルゼンチンの草原にて、この肉を食べているうれしさにわくわくしている頃、地平線に始まった黒い雲が、雨風に乗って、たちまち頭上を覆い、稲妻と共に、空気の場所がなくなるほどの土砂降り。まだ食べ残したどころでなく、あいさつも何も捨て置き、車に逃げ込み、来る時砂煙をあげた道が、ニュルニュル、ドロンコに化す前に、舗装の道まで行き着かないと、雨が止んでも道が乾くまで足止めとなるカンポの土。

ドン・セグンドが牛の群を移動してゆく長い道程、何度もこの土砂降りに出逢った五十年前と同じように夕立はくり返し、車の中でずぶ濡れにふるえながら、これがアルゼンチンだとそれさえもうれしかった私。

日本語に訳された「ドン・セグンド・ソンブラ」は何度か読み返したけれど、これを機会に、この本が書かれたままのスペイン語で読んでみたい！　逃げて来たのがもったいなかったように晴れてきた空を見ながらの帰途でした。

地の色を淡紫に変えているハカランダの並木を通りてゆきぬ

一七

「今日、学校でルーブル美術館のお話があったんだよ、本物のモナ・リザを見た所」とさっそく今回の旅の成果を報告する玉由。

「クラスで、ルーブルやプラド美術館へ行った話をしたら『玉由のお父さんはお金持ちね』って皆に言われたから『そんなことないよ、皆と同じだよ』と言ってきた」

さすがに九歳にもなれば、有余っての行動ではないことを知っている。皆と同じというほどにも達しない、歴史のない我が家の経済状態だと思うけれど、外地に住んで、何時、どんなことがあるかもしれないとの潜在の気持ちを持っていると、出来る時に子供たちの身体に入れておきたい。

アルゼンチンでの九カ月間、無駄なことは一切省略して暮らし、まとまって三カ月間もある夏休みには、離れて暮らす日が多い父親も仕事、日数をやりくりして参加の一家四人で、子供たちの蓄えとなるべく国々を見せながら、日本へ帰る。

日本での日々は、体操、スケートを毎日。日本の子供たちが学校へ行っている時間をフルに活用しての、オリンピック級コーチによる個人指導。私の子供ごときには過ぎた贅沢と思うけれど、せっかく日本まで連れて行った日々を、有効に生かしたい。

私といえば、日本へ帰ったからといっても昔の友人に逢うわけでもなく、旨い物を食べ歩くでもなく、三百六十五日異った服装をしたという過去は無かったごとく、まったくの親バカ、教育ママ

の見本みたいな情けないことをしているのだけれど。

誉めたり、叱ったり、新しいことが出来るようになった喜び、日本の子供たちに追い越されている焦り、一日運動をしてのしんどさ等、共に味うべく、付きっきりでレッンスを見守っている。幼い頭に一言、言葉を添えてやりたい。今、目を放して無駄な時を過ごさせたら勿体無いと思うから。

今期の目に見えた成果といえば、玉由も由野も宙返りが出来るようになったこと。アルゼンチンの体操しか知らなかった目に、同年輩なのに、高度な技を持ち合わせる子供が沢山いて、絶間ない練習をしていること、この子等と限りなく親しくなれたこと。

日本を知って、日本以外の国々でも、同様の努力がなされていることも悟れました。

スケートでは、一年間に二カ月しかすべれなかったにもかかわらず、玉由は、日本スケート連盟の四級フリーに受かり、由野は一級。すべれなかった九カ月間のハンディに押され、気弱に涙になってしまう玉由を励ましつつ、きっと追いつける、と自信を持たせたところまで漕ぎ着けて、時間切れになってしまいましたけれど。

十五年前、アルゼンチンに住み始めた時には、訳は分らないまでも、それをしなければならないと思ったから、太陽も月も地上に草木があることも忘れ果てて、続く限りの力を尽してコンデンサを作った勢いは、私の子供の父親となるべき人へのものだったし、今は私の頭で考えられることは全部して、子供たちを追いたてている。

私自身に帰ってみると、趣味、嗜み程度という次元が一番嫌いなのだけれど、本物になりきれな

い織、絵、あれこれ手を出した物が惨めに色褪せかけて私を取り巻いている。
あと五年間は、子供を口実に過ごせるけれど、それから後、手送れになってしまった悔しさを噛み締めながら、逃げ隠れ出来ない自分自身に取り組む時が来るのだろう。

一匹の犬の走りてゆくことも麗しきかなセーヌ湖畔は

一八

日本の言葉、文化、風物からあまりにも遠く、物理的距離も日本からもうこれ以上遠くはなり得ない、私が日々住むアルゼンチン。
アルゼンチンにも二万五千人ほどはいるといわれている日系の人たちの中へ混って時を過ごせる暇も、心のゆとりもなく、オリエンタル系は我が子二人のみというアルゼンチンの学校へ通う子供たちを中心として、食事も、来客もアルゼンチンが多くなってゆく。
斜に読んでも意味はわかる日本語と違って、人生途中から割り込んだスペイン語の新聞、雑誌は一字一字正確に拾ってゆくのだから、あまり長い物は嫌になってしまう。面と向かい合って話すのではないラジオもテレビも聞こうと努力をしなければならない。だから興味のあること以外は、大体そんなことだろうという次元で毎日が過ぎてゆく。地球上のこの情報時代に、他から影響を受け

ることなく、一人ポツンと独り善がりの日本語で物を考え、歌を作っている私の生き方。

頼みにしている日本語も、筍の二節ばかり皮を脱いだ頃の日本を発った、十五年前の時点で終止符を打っている。子供たちに日本語に興味を持たせるのには、まず自分が退化、老化している訳にはゆかないと気が付いた時、学校で習った五七五七七のみを頼りに、日本語の本が買い得ない状況に乗じて、短歌入門という本は読まなかったけれど、ゆく風も何処から来るのか、激しい横なぐりの雨、輝く芽生えの木々はもちろん、毎日毎日空を大きくしてゆくような冬枯れへと一目散の街路樹も、私のアルゼンチンでの小さな行動範囲で目に映るもの、肌で感じられるもの、ふとかけぬけてゆく思いが、アルゼンチン生まれの日本の文字となってゆく。

さりげない文字の中に、歌にしたいと思いたった万感をふくめ、いくら歌にするべきすごいことに出逢っても、仰々しく、しつこいのはいやだ。

地球を半周する引越し荷物の中に、『土屋文明歌集』が入っていたのに気が付かないで過ごした時間があまりに長かった。今、私のハンドバックの必需品として持ち歩く本。飛行機の中、出先での待ち時間、淋しくなるとすぐに広げる。律義に始めから順を追ってというものではなく、開いた所を。ある時は一首に釘付けとなり、次々を読み進む日も。歌を読む基本も考証も持ち合わせていない私の理解力ではあるけれど、その都度「あっ」と驚く言葉に出逢います。私が一番たまらないのは土屋先生の茶目っ気に出逢った時。大きく広い日本語を自在に使いこなされて、その上でのゆとり。

地球の単位で遠く一人ぼっちでいることもまわりにいるアルゼンチンの人々も風景も、みんな忘れて、私も日本語の中に参加していることを思います。受け容れる自身の経験度により、さりげない一つの文字のゆくへにも思いは至ります。

今現在、誰に見せたい、読ませたいという差し迫った対象もなく、激しく見つめ、激しく歌うというほどでもなく、淡々と何の取り柄もなく過ぎている私の一日一日が、こんな風に暮れていったという日記的なものではあるけれど、物心ついたアルゼンチン生まれの私の二人の子供たちが「アルゼンチン生まれの私の日本文字」を読んでくれる日のことを願いながらの私の歌です。

スペイン語の会話さまざまの人らの中私は一人日本語思考

一九

「お父さんって甘えんぼ、すぐ自分のお母さんに逢いたくなって、日本へ行くことを考えだすんだもの」と子供たちに評されながら、いつもの朝と同じに「じゃあ！」と、ブラジル、北米、日本、地球上の何処へでも、着替えを持つではなし、何が入っているのか私は知らない書類カバン一つで出かけてゆく我が家の家長。私は、送りにも迎えにも飛行場へ行くということはしない。男の大人なのだから女子供の廻りでうろうろせず、雄々しく考え大きく行動して欲しい。家族は決して足を

引っぱらないのだから、思い残すことがないところまで働いて欲しい。時々は父親の特権を行使しに帰ってはきても、ただでさえ戦火の中を逃げ廻った世代の日本の男性は、アルゼンチン生まれの子供のリズム、好む食物、学校とその友たちのこと、すべてにずれてしまって一人ちぐはぐなことを言って、まあもの悲しいような訳ですから、またまた仕事をする以外ないのです。父親の存在とはそういうものでいいと私は思う。

淋しい、悲しいとの発想がなくても、勝手に涙が零れてきて、涙ってどのくらいあるんだろうなんて自分をみつめていたアルゼンチンに着いた頃、いつまでも親の臑を齧っていられるような気持ちでいた私への経験は、日本から一番遠く、知人もお金も言葉すら分らない国で、人生で初めて、生きる為に働かなければならなくなったこと。

「アンデスの山々へ登りに行った帰り、アルゼンチンで食べたビフテキはうまかったから一緒に行こう」と私を誘った山男と、共に考え、共に働き、私も一人前に働くということに、しっかりと参加している思いを持って五年間、やっと子供の父母となっても何とかカッコがつく時点で子供が生まれ、世の仕来たりに従って、父親はそのまま外へ出て、今まで二人でしていたことを一人で受け持っての仕事、生まれたての赤ちゃんというものを初めて見た母なる私は、その生まれたてを育てることと、ここで完全に分業を宣言し、種目は異なるけれど、私たちの競争を開始して十年がたちました。

父親の方の仕事がどれくらいにいっているかは、私には評価出来ませんけれど、子供を育ててゆ

くのに不自由はない程度の経済状態が続いています。
私の子育てがどう進んでいるか、子供が生まれるに当って、ただ大きくなってしまったという育て方だけはやめようと思いました。
遠くは日蓮上人、近くは貫名海屋という日本の偉人の血を引くという私の二人の子供がその名に安心してしまわないで、祖先を追い越してゆくような人になって欲しい。
どんな面からみても、一度も偉くなったことがない私が考え実行することなどたかが知れていて、指導性に欠け、その相手の子供も祖先の血が有効に利いているとは思えない私の子供。共に才能が無いことを知りつつ、無ければ、努力でもって人並にさせねばなりません。今の時点では、出来る出来ないに関りなく、自分の力の限りやってみるということを教えようとしていますが、小さな子供が、しんどいことを進んでやろうという気持ちなどある訳はありません。私のやり方は間違っているかもしれませんが、思い立ったことは実行してみます。
身体を自由に使いこなす体操、エレガントさのバレー、動いて血の巡りを良くすれば、自然頭の回転も良くなるはずだし、大きくなってから手送れの悔しさを味わわないよう音感ではギター、語学は、スペイン語、日本語、英語、と物心つかないうちに人間の基礎を作っておいてやれば、必要な時、自分で自分なりの生き方を見つけることでしょうから。

朝夕に眺むる池に足を洗いし日蓮上人の二十八代目のわが子

二〇

桜の花びらが積って、若葉の木々の木洩れ日に色を増し、吹く風のままに、無限とも流れ続けるやさしい花弁を追いかけ、飛び跳ね「これが花吹雪って言うのね！」と蕾が見え始めた頃教えた言葉の真只中にいる私の子供たち。目に映るすべての風景の中に桜が咲いているという初めての日本の春。

冬の間だけ日本に居るというこの何年来の日本滞在で、日本とは、すなわち冬という観念が出来上がってしまっていたアルゼンチン生まれの子供たちが驚きの声を発する「葉牡丹ってあんなに伸び上って、花まで咲くんだね、一年中キャベツ型で、同じ所に同じ色をしているもんだとばかり思っていたのに」

そこに木があることにも気付かなかったほどの冬枯れだった街路樹も、ある日、点々と緑が見え始め、近寄って見ればそれはもう小さな公孫樹の形だったり、プラタナスも白樺もたちまちのうちにその葉を通る風が見える。

物を見る目も心も、今より十六年若かった時点で、アルゼンチンへ渡って以来、二人の子供の四つの目も加えて六つの目で見る春。土の上で、草木の中で遊び育った昔のことが一気に帰ってきて、子供たちに私の日本人振りを発揮する。

今まで、ハカランダが咲き、水辺にセイボを咲かせ、アルゼンチンのアンデス山脈よりのリオネグロ県への旅の名残り、リンゴがなっている木、豊かなオレンジの国のオレンジ畑、馬に乗ったガウチョ……そんな画題であった由野の絵に、雪雲が雪を降らせ、沈丁花が咲き、桜吹雪も加わって、彼女の生活の変化が印されてゆく。

アルゼンチンの目で物を見、スペイン語で考え、算数もスペイン語で解く二人の子供と暮らしながら、時に春の風物もうつろと過ぎ去ってゆく、私のやりきれなさ。涙が零れそうになって、あわてて遠くを見てしまう。アルゼンチンとイギリスの紛争。戦いの気配も感じないで、子供たちの留学と日本に留まることを決め、今東京で思うこと。たった一人も知人がなかったアルゼンチンで、少しずつ私の心と広がっていった友たち、もう家族だと思う人までいる。アルゼンチンが困れば、さっさと逃げてくるのだろうか、アルゼンチンで死んでもいいと思うだろうか、国と国の問題に、個人ではどうしようもない所にたっての個人の生きざまを思う。

「玉由は、戦争だから逃げてきたんじゃない！　でも友だちはそう思うかもしれない」と心を傷め、私がスペイン語の新聞を拾い読んでいたように、日本に来て毎日勉強した成果でもって、日本語の新聞のアルゼンチンの大きな記事を読もうとする子供たち。「今まで『アルゼンチンから来た』と言っても、皆地球上の何処だかわからなくて、説明するのに疲れて、テープに吹き込みたいと思ったくらいなのに、これで世界中の人がアルゼンチンってどこにあるかわかるよ。だけど戦争で有名になるなんて残念だなあ」と子供たちの会話。

自分の身体にどんな小さな傷でも恐いのに痛いのに、どうして平気で人を傷つけることができるのか。自分が死にたくはないのに、どうして他人を殺すことが出来るのか。〝神様、戦争をやめさせて下さい〟

言葉でも態度でも、何もなし得ない、十六年間アルゼンチンに住んで、これからも住みたいと思う私たちに今出来ること、日本の血でもってアルゼンチンに生まれ、アルゼンチンを代表出来るようなスポーツウーマンなることに向かって、地味なトレーニングを今日も重ねる。

傾きし光の中を降るごとし淡き花弁を追いかけ追いかけ

二

「あれ何の鳴き声？」アルゼンチンから日本へ帰り着いて一番初めに明けた朝、パジャマのまま飛び出してきた由野。目覚めてゆく耳に、九年間生きてきて初めて聞いた鳴き声。蟬を知らなかった私の子供たち。それを知った私は、もっとびっくりしたのだけれど。思えばこの何年来、アルゼンチンの夏休みは常に日本の冬で過ごしてきたのだから。

アルゼンチンで夏を過ごしていた頃は、三カ月間の内半分は海、あとは山。

風向きによってはラプラタ河の黄土色が混る海、大西洋のひと所、別荘が幾つか建っているひな

びた海辺で、その幾つかのうちの一つの別荘を借りて、水平線が地球の丸みをおびる景色の中で砂にころがり、太陽に焼け、時々は背鰭の群がゆき、直接大西洋の波がくだける渚には、ひと掘りすれば、大きく育ったアルメッハ（アサリ類）は、こんなに大きな海なのに、何段階にも重なるほどぎっしり詰まっていて、和風、洋風、何風にしてもおいしく、その場でレモンをかけて食べてしまうことも。南十字星が頭上にくるころ桟橋に出て網をペチャペチャと出し入れするとべへレイが掬える。美味この上もない。

隣の別荘のアルゼンチン一家は、貝も魚も決して取ろうとはせず、海にきても、ひたすら牛肉を食べていました。

あと半分の夏はアンデス山脈に連なってゆく山々の麓コルドバの一つの山を敷地とするその山の頂上に建つお城のようなセリーナの親譲りの別荘で。

五年前、九十二歳で亡くなったセリーナの母上マーママの、地位も名誉も資力もアルゼンチンの最高位の優雅に甘えて過した日々。

生まれた時から馬に乗ってきた大牧場主のセリーナの後を、やっと馬に乗っている程度の私が追う。湖を、柳の枝先を分けてゆく小川のほとり。庭先でパンを焼く煙、男たちが輪まわっての牛の膝関節の骨を投げ上げての博打……アルゼンチンの民謡フォルクローレの世界をちょっぴり拝見。

雪が降っているように、空いっぱいの蝶が終日とぎれることなく流れ続けていたこと、その莫大な蝶、いったいどこで生まれるのでしょう。遠く向かう山から南十字星が上ってくる夕刻ツクツク

という玉虫のような虫が、蛍より数倍大きい光を放って飛び始める。
「私が、ヨーロッパへ行った時は、自分の牧場の牛を牧童ごと船に積んで、毎日牛乳を絞らせて、飲みながら行ったのですよ」
アルゼンチンを訪問したロシアの王子様がマーママに恋をして、「もうちょっとでロシアへ行くところだった」という九十歳のマーママが微笑みながら、東洋からピョコンとやってきた私に話して下さった数々。コルドバ産の山羊のチーズがウィスキーに合って、「そうとなれば、ロシア革命も変わっていたかもしれない」なんて私の想像を増長させる。
あまりにも沢山の星、地平線から聞こえてくるような犬の遠吠え、人々の住む灯りは、遠く下方に見え、庭師、コック、雑用係、子守と大勢の人にかしづかれて、自分は何一つ手を下すことなく、快適だと思えることだけを探し出していればよい。子供たちの一番初めの記憶に残った、御伽話のような夏を何回か重ねて、気が付いた。子供たちが何の努力もしないうちから、こんなに立派に過ごしちゃいけない。そして我が家に夏がなくなった。
久しぶりの夏、初めての日本の夏、「東京でも木があるのに」「一週間くらい生きているんだね」コンクリートの塊、我が九階の住いの壁に、午後きまって油蟬が一匹やって来て鳴いた。そして、いつか来なくなった。

暮れてゆく空にアルゼンチンの星を探す私の幼子日本に来て

二二

まだ明けきらない冬の朝。木々の根元を靄が隠し、夢か現か、眠気眼に、動かない静かなパレルモ。一周二キロほどの池のまわり、咲く花、落果も落葉も、各々の存在を主張する匂いに満ちた中、「椰子の木の所がいいな！」「松並木の始まる所からにしよう」と子供たちの父親の日課、ジョギングの出発点選びも以前のように。我が家に時差ボケという言葉はなくて、ほんのちょっとのアルゼンチン訪問でも、せっせと通うパレルモから一日が始まってゆく。何処に住むのか、何を職業とする人なのか、名前すら知らないのだけれど、もう何年来の顔見知りである早朝のパレルモを走る人たちに会釈をし合うと、アルゼンチンに来たことが、アルゼンチンに私の歴史があることが、じわーっとうれしくなってくる。

「もう少し速く走れないものなの？」と我が家の三人が、私をものすごいびりにして走り去ってしまう頃、高い高い木々の梢に朝日がやってきて、どうしたらよいのかわからないような美の中を、汗びっしょりの私がゆく。

こんなに親しいパレルモ公園のある国、アルゼンチンへ父親を残して、「こうするより他に仕方なかったんだよ」と玉由がボソッと言う。父親ぬきの日本での生活が続き「もうハカランダの頃だよ」「常の年だったら、日本行きでソワソワし始める頃」「ハカランダの様子を伝えてくれるかしら」と

期待されて、仕事方々父親が日本へやってきた。

「体操で忙しいから、お父さんには付き合えないかもしれないからね」と国際電話で話していた由野はその言葉のとおり、なかなか目覚めて父親に逢う時がない。

学校前の早朝トレーニングの玉由。学校からついでに体操教室の由野。次の日の為に早く寝る。玉由が寝てから家に帰ってくる由野が一日の最後の宿題を終えて寝てしまう。そして暫くして「もう寝ちゃったのか！」と帰ってくる父親。

十日間の日本滞在中一度も家族と夕食をしなかった人。

仕事が終わる時間に、帰宅所要時間を十（プラス）すると家に帰り着くと決まっているアルゼンチンの普通の人々の生活を見て育ってきた玉由が、「お父さんの日本最後の夜は家族揃って過そうよ」と心を砕くのだけれど、「なるべく早く帰るから」と出たきり。「お父さん、まだ帰らないね」と子供たちの何度も何度も同じ言葉の末、あきらめて寝てしまう。私も明日早いんだから、こんなに起きていてはかなわないと思い到る時刻にも帰らない。

私たちのアルゼンチンの会社の、私がまだ工場の人たちと接していた頃は、「仕事時間内に能率をあげて、〝残業をすればよい〟という計画をたててはいけない」と言いきかせてきた。キラキラ光る高価な物が欲しい訳でも、銀行にしまっておくお金が欲しい訳でもない。たった四人家族が定めた目的に向かって力を尽すという単純な生活を欲するだけなのに私の身近である人のこの残業？　ぶり。

日本の男性と結婚したチリー人の友エリは「日本では男の人だけで外で食事をする！」との発見に天変地異。「休みも休まない」「話をする暇もない！」チリーやアルゼンチンだったら、たちどころに離婚理由となる日本の仕事という言葉。「日本人と結婚したけれど、私はチリー人よ」とスペイン語は途方にくれて。

「お父さんがきっとよろこぶよ」と、普段の女子供の生活では買わない食物で満たされた冷蔵庫の中味を減らすことなく、我が家の空気に混乱と男の匂いを残して、「もうペルーの辺まで着いたかな」しばらくは「お父さん好み」の食物を否応なく食べつつ、彼を偲ぶのであります。

良き風の通りゆくのを喜びてアルゼンチンを思うしばらく

二三

「まだ冬、セイボの枝先が歩道に落ちて、その色、カーブの工合が毎年のようで」俯き加減に枝々を踏んで通り過ぎて「あっ！」と驚いた。私は新橋の駅の辺りにいるのに、「どうしてアルゼンチンを歩いている気持ちになっていたのだろう」「どうしてセイボの枝先が落ちていたのだろう」急いで引き返してみると、「アルゼンチンにいる」と錯覚した木が二本冬枯れている。仮住いの身の上で、図鑑も持たず「そうに違いない」とは思っても、春になって葉が出てみないと確かなことは解らな

い。パレルモ公園では、いつもセイボの辺りをうろうろ。落花を拾い、スケッチして種の季節には莢ごとも、弾けたのも宝と拾い集め、冬にはバサッと落ちる枝先を踏んでのジョギング。私と子供の生活に入り込んでいた木だもの、見紛うはずはないのだけれど、日本にもその木が生えているのかしらとの疑問があって。水辺が好きな木なのに、まるで場違いな所に生えているその木の様子を見るだけのために、何度も山の手線に乗って新橋まで行きましたっけ。

やっと葉が出てきました。固い蕾にも出逢えました。やっぱりそうです。セイボです。

人生の、一番いろいろな出来事に直面して吸収し大人となってゆくはずの時期を、十六年間も日本を留守にして、一人野生のごとく、その上あまりにも限りあった日本語の中で過ごしてしまった私は、そのタイムマシンに乗っていた間の、日本に対する空白に唖然とするのです。

そこで今、とにかく外へ出ることを自分に義務づけて、郷土資料事典なる本と地図に教えられて、何処へ行くのにも便利な品川駅より、私の目に心に映る物が少しでも多かれと、歌となりゆく言葉集めに出てゆくのです。

幾人もの既成概念を持った人の目を経て映しだされるテレビ、新聞から抜け出すと私自身の視野が広がっているのが新鮮でした。

世界中より集められた木々は皆名札を付けて、植物図鑑の中を歩いているような東京大学理学部附属小石川植物園に行った時、気が付くとメタセコイアの林の中に立っていました。世に稀な木の、それも林があるなんて、歩いていたから大変なものに出逢えました。その木々を見上げた時、自分

が何百万年も遡ってしまったような厳かな気持ちになりました。

我にかえって少しゆくと、アルゼンチンで〝カタルパ〟と教わった立派な木の花が満開、まわりの空気を華やかにして〝ハナキササゲ〟と名札にありました。アルゼンチンの私のベランダで育てていたのは〝はなまき〟です。日本名は何というのかしらとモンモンとした長い年月、高輪の家からちょっと抜け出した午前中の内にスラスラ解決してゆくのです。

「一本あれば幾人もの人が飢を知らないという木、お腹が空けばその実を一つ頂いて常夏常緑の木の下で、海や雲を眺めて老後を過したい」と怠け者の私が憧れてやまない〝パンの木〟を見たく一般公開していない温室のガラス越しに中を窺いつつ歩いている行手を邪魔した木がありました。セイボです。『アメリカデイコ、南アメリカ原産、マメ科』と名札がついて。やっとやっとアルゼンチンの国花の日本名を知り当てました。パンの木は見つけられませんでしたけど。今は、枝先まで咲き登ってきているセイボの真っ盛り。雨が降れば濡れるその色を、風が吹けば揺れる重量感を。しばしば通って拾った赤を、家中の水の入る器を総動員して浮かべて遊ぶ。

新しき枝先に蕾まだ幼しアメリカデイゴはセイボなのです

二四

神戸のポートピアで開かれていた全日本ジュニアフィギュアスケート選手権大会に参加している長女を追って、一人新幹線に乗っていた時、近くに坐る人たちが、甲子園での春の選抜高校野球を話題にしているのが聞こえていました。神戸という所へは初めてゆくのだし、生まれてこのかた高校野球というものに興味を持ったこともなかったのだけれど、有名な球場が、私の行こうとしている所の近くに有ることを知り、「一時間ばかりのぞいてみようか」という気持ちになりました。

新神戸駅を、キョロキョロ見回して、そこの空気を吸う人となり、タクシーにて「甲子園の外野側へ行って！」何校という目標はなくとも、私の子供たちと同じように足腰を鍛え、一日をも休みとしない訓練の必要なスポーツに携わる若者たちを感じたい。

外野の一番深く、ほとんど旗がはためく辺りに坐って浜風を受けながら、あまりにも視界が大きかったこと、「まず本物を見ないことには始まらない」とここで私が変わった。今までの「やめておこう」というのが「行ってみよう」となり、「私が留守にしていた間に日本にはいったい何が起こっていたのだろうか」という、その空白を埋めてゆくおもしろさにとりつかれてしまったのです。

同じスポーツとはいえ、あんな大きな球場を満たしてしまうほどの人々を集めて騒ぎの中でとりおこなわれるものもあれば、参加している選手の親？　ばかりが見守る静のフィギュアスケートのような試合もあるし。それからの日々は、スピードスケート、陸上競技、体操、サッカー、テニス、

プロ野球をも、夜の試合も昼も室の内外を問わず、目につくものには、のこのこと出かけて行って、人間の動き、設備や観客を見、時には興奮して大声で応援してしまう。

スポーツのみならず、世界中から呼び寄せられて、東京で繰り広げられる数々諸々の催し物。見慣れたようなフランスの名画。布を織ったり染めたりの学生時代だったから親しみの持てるインドの布展。その国の僧たちによって、お経が唱えられるなかで、同じアジアの人間という思いを強くしながら見たチベットの曼陀羅。以前こんなのでご飯を食べたような気がする韓国の古美術。新安海底から引き揚げられ、世界に先がけての公開といわれる陶磁器類。楽師も祈禱師も本物であり、煮しめたような青銅の楽器が唸り、椰子油の炎が東京の夜の風にゆらめき、水牛の皮の透かし彫りの影が、果てしなく続いてゆく。良い心と悪い心を演じるバリ島の影絵芝居。アマゾン深くより多分人間など喰わなかっただろう大ナマズが人喰いナマズと名札を付けられて、夏休みの親子連れの行列の喰いつかんばかりの視線にさらされて精気がない大アマゾン展。生きた魚も、冷凍のシーラカンスも、石と化した生物もの化石展。日本には住まないキーウィ鳥、世界一大きな翼を広げたあほう鳥と鳥の世界展。自分でそれぞれの国へ出かけて行ったって、やたらに見られる物ではないのだからと、汗を流しながら見て歩いた。ハカランダ、パパイヤ、コーヒーもこの国の自然では育ち実ることはないでしょうに、鉢植となって植木屋に並び。世界の料理がまちがった発音で呼ばれて、日本以外の何国風でもない日本の人々がそれを食う。

あまりにも忙しく、こんがらがってしまって、疲れ果てて、これが日本に住むということですね。

それで私、利巧になれたかな！

霞草の花にあたりのおぼおぼし眺めていたりただそれだけのこと

二五

スケッチブックを抱え、木炭や食パンの入った袋を肩にかけ、もちろん動き易いジーンズ姿でオカッパ頭も学生時代のまま。通過していった二十年間という年月が突然取り払われて、今また私が上野をほっつき歩く。

どこかへ出かけて行って、誰かに催促されなくても、自分一人で出来るはずの大人の年齢になっているのに、意志薄弱のまま、時は過ぎ、焦りだけは大きく蓄積されてゆく……の現状に耐えかねて、東京都美術館二階の、〝関係者以外は立入禁止〟である冷暖房完備のアトリエに入って行ける好運をものにしました。

「売り物ではないのだけれど！」と戸惑う肉屋さんにわけてもらった経木。そのさわやかな素材に魅せられて、裂き、結び、結び目をアクセントと織った大きな壁掛が入選して、東京都美術館の新装になる前の、天井高い立派な建物の壁を飾ったことがありました。大人の世界へ足を踏み込んだような、希望というものに向かっているような、大きな上野の空を見上げた思い出です。

そして急に、その時点まで生きてきた生き方を忘れてしまったように、どこに存在するのか、何が始まるか、物事を筋道だって考えられるほど人生に長けてはいなかったまま、アルゼンチンに住む人となっていました。

日本へ帰って工場実習までして、コンデンサ作りがやっと上手になり、工場長、副社長までに成り上った立場から、また方向転換。

今度はゼロからゼロ歳の子育てに取り組み……。子育ての延長として日本に帰り住むこととなり…。豊か過ぎるすべてに、やる気をなくし、「お手伝い兼子守りみたいなことも、廃業してしまいたい」とさかんに思ってしまう日々に、週一度ではあるけれど、〝上野へ出かけてゆく〟というアクセントが出来ました。

着衣だったり裸であったり、モデルさんがポーズしてくれてのアトリエでのひと休み、昼休み、それにずる休みを、さっと外にとび出して。

アルゼンチンへの引越しに持って行ったのだけれど、目的の織物のためにと櫛をいくつも誂えた十三家にも、またの出逢いが出来ました。

大きな蓮の葉を裏にしてゆく風、面白い造形の冬、移りゆく季節のその都度歩み、たたずむ不忍池。

初めて西郷さんの銅像の前に立った、今の由野より小さかった私が、彼を見上げながら〝思ったこと〟は今でも忘れてはいません。

何百年もかけて日本の人はうなぎが好きなのですね、そんな店。和菓子なら絶対という自信の店もある池畔。

「家の中にお参り出来る所を作って」という由野の要望に答えぬまま、ゆき当る神様にお参りするのが私の方針と、お参り出来る所があちこちに。

下町博物館というのが出来ました。私が育った頃の生活用具、玩具がもう歴史となっているのです。過ぎていった時間にすがりつきたいような切ない感じです。

学校で〝今一番行きたい所〟というテーマの日、「上野動物園のパンダを見に！」と答えて「クラスの友たちからバカにされた」という、時間のない玉由には〝ナイショ〟なのだけれど、私は毎週パンダに逢っています。アトリエの隣りが動物園で、パンダ舎を通り抜け、誰も群がらない、ひと隅の淡暗い檻の中に一匹の動物、ナマケモノ。いつ行っても、何分間見ていようとも、一つの塊となって眠るのかびくともしない。

宇宙的に考えれば、ボケーッとしていたっていいような、身近的には、何かをと、あがいていなければいけないような。ナマケモノを見ながら私はごちゃごちゃ。

常に描くモデルの肌の光りおり楽しき心を今日持ちおらむ

二六

私の九階の窓から見下ろしている景色、毎日、乗る降りると利用している品川駅。常の日には近寄ることもないホームが幾つもあり、その中の一つ、東海道線で茅ケ崎まで行こうと試みた朝。

動き出す電車で探す席も、いつの間にか日向側を選びたい季節となっています。

葛の勢った葉の間に間に、赤紫っぽい花が見える度にうれしい。そして思いはその根っ子、こんなに葛が栄えていれば、私の好きな葛菓子はいっぱい……。

そんな名前が付けられたこともいとおしいけれど、驚きの心も混じえて見るのは貧乏葛の愛らしい花。

烏瓜もあやしいばかりの花の頃、青い縞の瓜坊時代、赤く色付くその造形、くるくるの蔓の枯れてゆく姿も間もなく。

ひと夏勢い、潔く消えてゆく蔓草たちが大好き。薄がまだ初々しい。曼珠沙華の赤一途。コスモス。柿の実り色。

東京から少し離れると、夏から秋への確認が忙しい車窓に、本など読んでいてはもったいない。

「いいなあ、たまには外に出なくては！」

外務省勤めの友人一家が、アルゼンチンからニカラグワを経て、六年半振りに日本住いになったのを切っ掛けに、滞在した年数、動機はまちまちでも、同じ時期アルゼンチンで巡り会った主婦の

立場の三人が、「逢ってみるか」ということになり、三人の中では一番始めに日本住いになった茅ケ崎の友の家へ集合と相成りました。

「わあ！変わらない」「アルゼンチンに住んでた間中、年を取るの忘れてたものね」

「太っちゃった」「肉やワイン、デザートの甘い物、たんまり鱈腹食べ続けても太らなかったのに、日本に来て粗食になったら太ること太ること」

「夫婦単位の、出かけたり、招いたりだったから、服装のこと、会話、料理といつも新鮮だった。日本の生活になったら、お手伝いさんの部分だけで生きてなくてはならないんだもの、間抜けた感じといおうか、とにかくつまらない」

「アルゼンチンの一日は時間がいっぱいあって、いろんなこと出来たね」「朝飯前のゴルフに始まり、夕食後からも〝ちょっと飲もう〟とすぐ集まってしまって、あのこと、このこと……。会話の中から突然〝ハイメ・トーレのチャランゴ聞きに行こう〟なんて夜中の町に繰り出しちゃったり」

「ショーが終われば、明けてくるブェノスアイレスの町、石畳道……」「安全で、夜中でも女一人で歩けた町だものね」

「日本の食品が手に入ると皆で一緒に喜んだものだ」「日本の物が無い所で、工夫して作った〝日本擬〟のおいしかったこと」「それにひきかえ〝何処そこの何〟じゃなくてはなんて子供まで言っている日本」「あんなに憧れ、ありがたかった食物が、巷にあふれているの見ると、あの頃の自分たちがいじらしくなっちゃって」「日本に対する〝感激〟を味わったの幸せだったね」

アルゼンチンで、ニカラグヮで生まれた子供たちが、日本のそれぞれの場所で、日本で通用する日本の子供になろうと懸命に努力している様子。私の子供たちのように、日本人でありながら、あえて日本の学校に通用しない教育をされている可哀想かもしれない身の上のことも交え。笑顔のままトーンが上った会話は続く。共通の大切な思い出を持つ友等。

私の窓の景色から連なってゆく思いが、また一つ重なって日本住い。

絶え間なきごとく電車の走りをり時々大きく一つ聞えて

二七

高輪の空高く九階に住んでいた時は、建物が交通の激しい第一京浜国道に面していましたので、数珠繋ぎの自動車がたてる集合音〝ゴー〟が四六時中。晴天の日も〝豪雨か〟〝風か〟とばかりに……。その上、品川駅に発着する諸電車がレールをゆさぶり、扉開閉の空気音、駅のアナウンス、建物の真下を、快速力の新幹線がゆく、とまあこの世の地獄のような騒々しさで、折角の二重窓も何のその。

住み始めの頃は、とても寝られたものではありませんでしたけれど、東京とはこんな所とあきらめ、慣れもするもので、いつの間にか、終電後フッと静かになったりすると、淋しくさえなったも

のでした。

訪ねて来られた方たちは「こんなに高く、こんなに喧しく、なおかつコンクリートで固め尽した所によく住んでいられるものだ」とびっくりされていたようでした。

今度の建物も東京の真中、交通量の多い明治通りに沿ってはいますが、建物と道路との間に、少しゆとりの広さが取ってあり、私の窓が、幸い道とは反対の新宿御苑側であることも加わって、町の真中とも思えない静かさに浸りながら木々の見える日を穏やかに重ねていましたのに。

ある日からピアノと、歌うというのでしょうか、凄まじいソプラノが聞こえるようになりました。始めの頃は、「よく練習するなあ」と関心したり、「上手だから、かなりの専門家らしい」なんてやさしい気持ちでおりましたけれど、子供たちが学校へ出かけてゆき、ほっとして〝さあ！〟と思う時刻に決まって、訓練を重ねたのでしょう、強い指で弾くピアノの音と、当人以外にはありがたみのないお腹から押し出したような大声が一日中、わけのわからない人の、わけのわからない音に、私は頭も心もかきまわされ、短歌や文章を書くどころではなくなってしまいました。

「こんな音をたてますけれど」と、一言挨拶があれば、単純な私のこと故、なるべく外出したりとか、何とか気持ちをやりくりしますのに、挨拶はありません。

まず子供たちが憤慨しました。「いくら偉い音楽家だとしても、こんなに他人に迷惑をかける音をだすなんて許せないよね」「引越してきたばかりで、また引越すわけにもいかないし」「今時、防音装置とか、いろいろ発達しているのに、一日中大きな音を出す専門家が、そういう設備をしないな

んて非常識というか考えられないよ……」

絵を描く友たちも、我が家でのデッサン会の三、四時間、見知らぬ人の大声を聞かされ続け、ほとほとやりきれなく、「絵っていいね、音をたてなくて静かに描けるから」

今の日本は〝ピアノ殺人〟とか〝隣近所〟〝モラル〟……とか、いろいろ書かれているのに、見も知らぬ人々が集まり、重なり合って住む都会の真中の建物の中で、「自分は特別である」とばかりの住み方をしている人と巡り合わせたのは、運が悪かったとしか言えないのかしら。

都の騒音苦情課に相談しようかとか、私の空間を守ろうと、うろうろ歩き廻る。そのうち思いあまって管理人に相談し、私の真下の部屋が、音楽大学の先生で、生徒が習いに来ているということを知り、かえって滅入ってしまう。教えるという立場の人が、自分の作り出している音がまわりに住む人たちにどういう影響を与えているか、ということも理解出来ないなんて。教育者、音楽家などとおこがましい〝思いあがり〟と、自分自身をもみつめる機会となっています。でもこればかりは慣れるわけにはいきません。

我物と言う土なくて住みをれば移りゆくこと安々決めぬ

二八

時差ということに支配されている地球時間の中の、私の生活の時間は無視され〝丁度寝付いた夜中であれ、もう目覚し！　と錯覚する早朝であれ〟電話のベルは鳴る。受話器を取り〝ピッピー〟の音がまず聞こえると外国からで「どこの国かな？」もちろん私には、家業の事務所があるブラジル、アルゼンチン、アメリカなどの国からですけれど。仕事上の一つの中継点としての立場であったり、アルゼンチン、ブラジルの友だち及びその親戚、友人が訪日のこととか……。一目逢ったこともない人と話をすることも多い。それもポルトガル語だったり英語であったりするともう疲れる。最近では、スペイン語の時ですら、言葉が出てこなくてオタオタしてしまう。同一民族が同一の言葉で暮らせるということは、身体がゆるんだままみたいに気楽なことだとつくづく思う。

文を作る、新聞を斜めに読む……その上手下手は抜きにして、こんな芸当が出来るのは、私には日本語だけ。大人でありながら〝大体の次元〟で暮らした長い日々がどっと重い。最近とみに言葉のわからない生活をするのはもう〝厭〟との気持ちがあるけれど、現実は……。

オタオタ話した相手が東京へいらっしゃる。一億何千万もいる日本人のその中の唯私を目指して来られるとなれば、何としても役に立たねばなりません。

巨大で髭モジャの外人が現れたり、アタッシュケースがよく似合う人だったり。「ドミニカってどの辺にあったっけ？」と目がデカイ美女の相手をさせていただくことも。もう四年前の由野が、体

操の最年少の部のアルゼンチンチャンピオンになった時、体育館の隅っこで由野を見守ってた私を見ていたから「貴女のことは知ってますよ」なんて人の出現があり、「ごめんなさい。こちら気付かなくて」……などなど。あの電話の声が、この顔と繋がる対面が出来ると、今度は〝食〟へと進行します。

生まれ育った土地の物しか受け付けないという優雅な人もまだこの世に存在し、ブラジル事務所のルイスは、高見山を若くしたみたいな巨漢にもかかわらず、赤ちゃんの時から食べ続けているフェジョン豆を一袋と、味付け用の調味料を持って来て、〝それだけ〟で日本滞在の一週間あまりを過ごそうというのです。目分量なんかでなく、ルイスの処方どおりに私が煮たフェジョンを、毎食事毎食べに我が家へ現われる訳で、可愛いくもあり、可哀相でもあり。「日本の味を、ちょっとでもためしてごらん」との私の誘いにニコニコするだけで全然だめ。ルイスの豆が我が家の匂いとなってしまう中で、子供たちは「あんな大きな身体が豆だけで出来ているんだね、豆ってすごい！」「一生豆だけ食べて生きたくない」などなど。

ルイスの豆とまでは言わなくても、自国に近い食物を探そうと努力する人。このタイプの人が一番つらい思いをします。調理方法はほぼ同じかに見え、口にするとその味は日本風にアレンジされているので落胆は極度。

日本に来たから日本の物を、という積極的な人には、テンプラ、寿し、焼鳥などカウンターで職人の仕事振りを見ながら、何らかの会話らしきをというのが好評ですが、中をとりもつ私にしてみ

ると食事というより、ショーの司会みたいなもので……。

セリーナの従妹のアリーシアは「なぜ、日本へ子供を連れて帰ってしまったのか理解出来なかったけど、今度日本へ来て、見て、よくわかった。これからの子供は日本を知るべき、ゆりの国おめでとう。ゆり正解！」畳に坐ってすき焼の席にて。「本当かなあ！」

豆（フェジョン）を煮る処方はポルトガル語にてルイスは唯に豆（フェジョン）を食みつつ

二九

「図案というより、筆の勢いでドレスに絵を描きたい」というのは、私がずっと持ち続けている夢。アルゼンチンで染色家として、仕事が出来るチャンスが度々ありました。その時々、何とか取り繕って、やってやれないことはないと思いました。けれど臆病なのでしょうか、律義といえばかっこが良い、日本人が外国でみっともないことをしてはいけないという、日本が被さっていた故でしょうか。もっと上手になってから…。自分の腕に本当の力が欲しい…。と社会に対する仕事ということからはずれたまま。

日本へ帰って来る折々、墨絵を習うことにしました。学生時代の先生から、若き一匹狼生井巖氏墨絵画家を紹介されました。そしてそのまま彼の二人目の生徒となる。出来上った組織の機嫌を取

ったり、その評価に甘んじないで、自分自身の納得ゆくものをひたすら描く。売名、売絵にほんの少しもエネルギーを使わない人の描く線、色、人柄……魅せられました。

「三カ月の日本滞在中に、絵が描けるようにして下さい」と言った私の幼さが自覚出来たし、だんだん基礎へと戻ってゆく……あれから何年が過ぎていったのかしら、いっこうに私の染色家としての旗はあがりません。

ブェノスアイレスの私の家の壁のスペースの大部分は彼の絵が占めています。日本へ帰った度に運びました。したがって、子供たちは彼の絵の中で育ってゆきました。ブェノスアイレスの友人たちとは彼の絵に囲まれて、会話し、食事、お酒の時を過ごしました。遠く見る近く見る、朝も夜も、正気の時、ほろよいの時、常に彼の絵の中。どんな時も、失望をもたらさない絵。勇気づけられる絵。うっとり出来ます。ハッと発見があります。

日本での仮住い、白壁ばかりの住いも、たちまち彼の絵で埋りました。要するに、彼の個展の会場の中に住んでいるようなもので……。

彼と出逢えたのは、私の人生の好運、けれど、私が絵を描きたいと思うのは、彼の絵のような絵が到達点であって、私がいくら努めてもとても……。そんな私好みの絵を描く人が一番親しい友人となると、絵は彼にまかせる方が賢明。私が絵を描こうなんておこがましいと思ってしまうのです。

「スケッチに行こうか」「・・展やっているね」「サンシュユ咲きだしたかな」「もう蕗のとう出てるよ」「遊ぼ」……たちまち出かける相談はまとまり、その時々の彼の興味、視線、会話から得ること

が大なのです。

「何気ない」と思っていた物が、彼のスケッチブックに移ると、「あっ！」と驚く華やかさを持ちます。だいたいにおいて「本物の方がいい」と思っていましたけれど、彼の絵に関しては本物を超え、私に見える範囲を通り越したものが表現されます。

岩礁を描きたいという彼について房総半島へ行きました。三浦半島の先っぽにも。コチンコチンに身体が冷えてしまってもなお、岩に対している人と一緒にいられるうれしさ。その間、私は〝言葉〟をスケッチしたり、海牛をつついて何とか動かしてみようと試みる。磯巾着を見つける。岩のりを摘み取って食べてしまう。

『富士山を描くにはまだはやい』って言われるけど、はやいもなにも、描きたい物を描けばいい」と彼の言葉のまま、富士山の麓でウロウロした一日。東京からは見えない諸々。黒い気泡の入った富士山の欠片を拾いあげた時、「今、日本に居るんだ」。〝日本へ行く〟ことがすべてだった日々のことを思った。良き友と、いろいろな場面に出逢いつつ。

昆布の根を持ちて海牛を突きたりいじめというを思い思いて

三〇

蓬の香るお餅をいただきました。あんの入ってない蓬の葉っぱとお米の甘みだけ、きな粉を付ける地味なお餅。「子供たちが好くかなどうかな？」と一人思いました。ところが、「いい匂いだね」「おいしい、歯ごたえがいいよ」「由野は幾つ食べたの」「じゃあ、あとは全部玉由のだよ」と奪いあい。飽食の時代、こういう単純なものが良かったなんて。

もちろん我が家は、日本に十八年間近く不在で、その日本の飽食へと調子に乗った時代を知らないうえに、外国で、日本の食物を大切に大切に、憧れ暮らしたのは子供たちにも充分沁み渡っており、「もったいないから」「あとでいただくから仕舞っておいて」「今度から残らないようにもっと少し作ろう」と食物へのいたわり大きく暮らして、飽食とは無関係なのですが。

たまたま由野の体操が休みの日がありました。「何かして遊ばなくては―そうだ、あんなに好きだった蓬餅を由野と一緒に作ってみよう」と思いたちました。まず蓬を摘みに行かねば、「この東京、いったいどこに草が生えているかしら」草摘みの名手、生井先生に電話でお聞きしたところ、一緒に行って下さることとなり、百人力。台所からビニール袋を沢山、気楽に歩ける服と靴。学校から帰ってくる由野を待ち受ける。「え！　草摘み、連れてってくれるのすごい！　ワーイ！」

午後三時をまわってからの出来事だから、ほんの近くでね、ということだったのに驚いた。急行電車に乗ること四〇分。こんなに沢山電車に乗らないと草も摘めないなんて。

「この辺は昔は、ただ田んぼだったんだよ」と言われる辺りは、新しい家々が建ち並び、いったい、草を摘むという目的地はあるのかしらと気がもめるほど。町中を、自動車に遠慮しつつ、それでも家々の庭に、ライラック、桃、レンギョウ、雪柳と春の花々に出逢いながら入間川の土手に到着。

由野と私は、まず間違った草を摘んでしまわないように、食べられる草をよくよく先生から教わりました。さすが遠々と来た場所、あまり沢山の蓬だから、大きな気持ちになってほんの芽先だけを「大名取りだね」とはしゃぎつつ。育つ土の加減か叢ごとに何とはなしに個性があるのもおもしろく、裏葉の白く柔らかい毛が光る。指先を蓬色に染めながら。土筆が生えているコーナーも。ちょっとほほけて時期はずれのもかまわず取り込む。野蒜もあります。上手に丸い玉まで取れなくて、苦労することしばし。仏の座。大犬ふぐりが背高くなって。これ何て名前。レンゲの咲き始め。カラスのえんどう。へびいちご。こぼれ種かしら、あさつき……。

太陽が沈んでゆく頃、たかが草とてずっしりと重い。包から抜け出してくる草の香りがたまらない。

先生もサンタさんみたいにふくらんだ袋をかついで……さようなら。

帰り道、マーケットで上新粉を買い、「さあ、やるぞ！」

「蓬、何分くらいゆでるのかな？　あまりゆでて色が悪くなるといけないから、もうよし」どだい自己流。ゆで上がりを冷水にさらし、しぼる。きざむ。上新粉は袋に書いてある処方どおりに湯を加へ、練る。蒸す。我が家には擂り鉢も擂粉木も無いけれど、パン作り用のニーダーを利用して、

上新粉と蓬が混る。「こんな色だったね！　こんな粘りだったね！」「出来たんだ」「お世話になってる人たちに配りたいなあ」とほかほかの出来たてを丸めつつ由野。土手の蓬が、由野の心と力になった。

はるばると来たりて入間川の堤防の土筆摘みおり少しほけしを

三一

子供たちが大きくなってゆく。弁当作りとか練習で夜おそく帰宅するのだからとか……一生懸命子育てに参加していたってもうほとんど限界に近い。

そして、我が身を一人の人間として振り返ると、つらつら心細い。自分自身の体力、気力、能力についていえば、学校を出た頃より、私なりに幾多の経験を経て、ものが良くなっているはずなのに…とは関係なく世の年齢制限で、外で働くという望みは消さなければならない。絵を描く、文字で遊ぶ……所詮、暇つぶし。域を脱し得ないことがわかってしまって、はかない。はかない。

いったい、これからどうやって生きればいいのかなあ！　それは深刻な問題です。私の年代の友人たちの共通した焦りです。このことについて、グダグダ話すのがいやさかげんに、友人と逢うのを避けるほどです。

深い焦りを持ったまま先日、ブェノスアイレスへ行きました。一人、アルゼンチン事務所の私の場所、私の机から、プラタナスが枯れ色の葉を落すのを見ていました。一人前のつもりになって働いていた頃のことが甦えってきていました。ドアがノックされ、山高く書類が運ばれ、一年近い留守の間にたまった私のサインが要る書類だと知らされました。「ガーン」と響く。私には、私も参加して作った会社の副社長という仕事があったのに。長い間、何と傲慢にこのことを無視してきてしまったことか。自分の会社の仕事をするということを忘れ果てていたなんて。

日本に住んだ間中〝無力〟と自分を責め続け、この部分では本当に辛かった。

いまからでも役に立つことが出来るなら…現役の社会人になれるなら…なんとしてでも…「お母さんが仕事をすることは、とてもいいことだと思うよ」アルゼンチンから日本の子供たちへ私の身の上相談の電話を掛けた時、玉由が元気良く励ましてくれました。

「何か会社に良いアドバイスをしてあげられるかもしれないから」と、台湾の電気関係事情を見に行くことを思いたちました。思いたつとすぐ飛行機に乗ってしまう。

台北。何も通じ合う言葉を持たないタクシーの運転手と私、ホテルの名前だけを告げると車は走り出した。以前に一回来たことがあるだけの台湾、あいにくのすごい雨、視界もおぼろとなると、どの辺に自分が居るのかさっぱり。だんだん暗くなってゆく時刻、すさまじい速さの車の中で、このまま地球上から消えてしまうのかと思うほど心細かった。「仕事なんだから」グイッと背筋をのばして。

無事に目的のホテルに着き、それから後はかなり日本語を話せる人との打ち合わせで〝助かった〟。

アルゼンチンで私が始めた時のような工場を見せてもらい、「世界中、人間のすることはそんなにへだたりがない」の思いを大きくする。工場内に入ると能率が良いか悪いか、すぐわかります。

私の子育ての間に、電気の技術が進んだといっても、根本を見つめれば「何が何だかわからない」ということはない。徐々に甦えってくるものを、新しく積み重ねてゆくものと…「一人前に仕事をしてゆかれないこともない」という手ごたえはありました。

電気関係のみならず、台湾で生産されているものを、出来る限り見て回りました。

社会に通用する仕事をしながら年を取ってゆくことが出来るでしょうか。そうしたいと思います。

お互に理解出来ざる会話には車を停めて漢字を書きぬ

三二

アルゼンチンの人々と交って暮らしていた頃、「日本は好きだけれど中国は嫌い」と、私への社交辞令でしょうか、よく言われました。その都度、「やっぱり私たち東洋人に差別の気持ちがあるんだ」と淋しかったこと。

私の感覚が劣るのかもしれませんが、東洋人の私が、外見からは中国、韓国、日本……の人の区別はつきません。そんなに難しいことなのに。言葉だって、一般的アルゼンチン人にすれば「唯難解」。文化、習慣も西洋側からみれば、方言程度の差くらいではないでしょうか。

とにかく、アルゼンチンへ行って、自分が日本を知らないことを知り、それと同時に、「アジアの国々」「とりわけ中国」を見てみなくては、という思いを持ちました。

日本に住めば「すぐ行かれる」と思いつつ、切羽詰ってしまった感じで中国行き決行です。

中国ったって、あまりに大きい。どの辺でもよいのだけれど、一番おのぼり的発想で、「万里の長城」に焦点を定めました。時間と目的が合った友と二人で、北京へ向け四日間の旅。

地図を広げ、飛行機の窓の人となる。梅雨の日々、飛びたってずっと厚い雲。「このまま何も見えないのかしら」と思う頃、雲が切れ、黄色い河。「飛んできた時間からして黄河ね、きっと」憧憬が現実と見える。「あ！　また雲」「今まで見えたところ全部耕してある」「それにしても大きなペッタンコ」

大地に私たちの乗る飛行機の影が近づくと、玉蜀黍畑、その大きな葉を乱して北京空港に着陸。「あ！　中国の匂い」中国料理の香辛料が空気にまで溶け込んで。「よかった」と思ってしまうような笑顔の中国のガイド氏に迎えられる。ほとんどのことが知らないまま来てしまった中国で、思いもかけず、運転手付き冷房ありの乗用車の主人となって、四日間が過ごせることを知らされました。うれしいような中国に来てまでも……みたいな。

案内してくれるガイドと運転手が元紅衛兵だったことを、さっそく聞きだし、訳知らず「恐しい」と思った文化大革命直接の二人が今、同行という縁。

快適な道を快適に走り出し、ポプラ並木、馬車、自転車……みんなゆったりゆったり、見る限りは平たい農場。自分さえ車に乗ってしまえば「天国への道かしら」とも思ってしまうような身勝手さ。

町に入り、満員のバスに並行する。夥しい自転車、荷かごに西瓜など入れて。歩道上での物売り。高級車の自分たちがうしろめいたような気がして後席で小さく硬くなりました。

中国各地からのおのぼりさんたちも旗にせかされての団体、日本からも、英語の人もポルトガル語も聞こえ、休日でもないのに人、人、人。何しろ十億の民です。ガイド氏が、「五億にまで減らなければどうしようもない」と言いました。〝一人っ子政策〟が始まって七年とか、〝一人っ子〟の年齢の行列もあります。その人々に混って、超立派な名所旧跡。ガイド氏の誘導に素直に従い、観光客が見るべき所は皆見ました。驚き入りました。圧迫された多くの人々が思われました。時々は合歓の花咲く木陰で休み、ひたすら歩き、槐の街路樹がどこまでもどこまでも。脹った脛が痛みました。白もピンクも蓮の花時。

「僕たちが壊した」という復元まもないお寺も。もう永久に消えてしまった寺院も数多とか。砕け、ころがる石像群にも出逢いました。「もったいない」直接、破壊に参加したガイド氏の〝つぶやき〟も聞きました。

つらなれる万里の石垣割りて咲く花はやさしきナデシコに似て

三三

「中国が如何に歴史であるかってことはよ〜くわかった。だけど、今の普通の人の生活、走る車の窓から見えることだけではなく地球上でも特殊な国の庶民が、どんな所で、どんな買物をし、生活必需品は……とか。せっかく中国に来られたんだから、知りたい」

ガイドをしていただけるコースには入っていないから、と渋るガイド氏を口説き落し、町中の普通の市場を見せてもらいました。

中国料理で馴染みの干し物は、さもありなんと見受けましたが、野菜の種類が少なくその上貧相なこと。飛行機の窓から見下ろした中国は、えらく豊かに耕してあると見えたのに。日本で最近流行っているツヤツヤ葉っぱの中国野菜なんてどこにも見当りません。どこか隠れた所にあるのでしょうか。

我が家では「楊貴妃が好きだったんだって」と液を滴らせて、シーズン中には毎日いただく荔枝ですが、本場では小さく萎び、カビも生えているようなのを「楊貴妃は好んだ」とガイド氏が指し示し、説明してくれました。

前夜の料理で、エビが歯にグシャッとして「新しくない」と思ったのでしたが、案の定、魚市場はみじめでした。シャコ、イカ、針魚、太刀魚が種類で、状態といえば冷凍後のグシャグシャ、身が切れ、つぶれ……「こんなの買う人がいるのかしら」「お腹こわす」

肉類も、色が変わったような品。

中国の人に並んでピータンを買ってみました。書いてあるとおりのお金を払ったのに、おつりがいっぱいきたので「どうして？　どうしてなの？」ガイド氏は、中国の人と外国の人とは、お金の価値が違うお札であることをチロリと教えてくれました。ここ市場は、外国人用の気構えがなかったのです。

天安門広場辺りでも、どこもかしこも人々は自転車ですから「あんな風に中国国産の自転車に乗りたい」「中国の人たちに混って走ってみたい」と駄々をこね、やっぱり思いを貫きました。

北京の町を自転車の視覚からも眺められた。中国の人たちが見るのと同じ景色。

普通の人が普通に働いて二カ月分の月給に相当するという自転車は、やけに坐位置が高く「中国の人ってこんなに足長いのかな……」

買物をし、自転車に積み、そして「帰ってゆく家を見たい」私たちの言い出したら利かない我儘振りに観念したガイド氏が、「僕の家に来てもいいよ」「行く！　でも誰かに叱られるってこともあるの？」「あなたたち、中国人に見えるから、大丈夫」

公式の観光を終えた夕刻、本当にスリリング。「僕は良い生活をしている」というエリートである

彼の家は、赤レンガで出来た同型の建物が幾棟も並ぶ新しい地域の中にありました。階段は電燈はなく、手さぐりで五階。六畳程の部屋が二つ。真中に小さな台所。不思議なことに、あの中国料理を連想する台所用品はほとんどなく、料理をするという気配なし。「全部外食？」「家でも食べるよ」「お風呂は？」「入りますよ」答えてもらっても要を得ません。とにかく物がない。壁には墨絵がいっぱい掛っていましたけれど。

階上に住む三代医家という彼の友人のお医者さんが訪ねて来て、漢字を書いたり、読んだりで中国の、他の国々の医療の話などしました。そしてちょっと疲れちゃった友人に、針や弱電、マッサージとで全身をほぐしてあげるのでした。頑丈な私は、中国何千年もの医学の世話になることはありませんでしたけれど、顔や生活を思い浮かべられる友人が出来ました。

散りいそぐ花見るごとく今日のわれは車走らせて北京を見たり

三四

冬の日本で、引越し荷造りをしたから、一番奥深く入り込んでしまった夏の品々。あまり寒くないとはいえ、一応冬服のカリフォルニアで生活をし始めて、まだ出る幕のない夏の洋服を取り出す。

「ペチャンコになってしまって、アイロンをかけなくちゃ」「ブェノスアイレスの二月は、一番暑い最中」「パーティー用も要るし」「サンパウロの夜は涼しくなるからちょっと羽織る物も」……一週間の予定で、サンパウロとブェノスアイレスの事務所に、滞っている書類にサインをしに行かなければなりません。もうギリギリの日日まで延ばしてしまったから。

車に乗せて運ばないことには学校すらままならない子供たちの生活に追われ、にっちもさっちも行かないロサンゼルスでの毎日。この生活を「ひと休み」という訳にはいかないし、「ちょっと誰かに頼みたい」とそう都合の良いようにはいくわけがない。

そこで考え出したことは「子供たちの父親が南米から子守りに来て、私と交代する」という方法。「ずいぶん高くつく運転手兼子守りだよ」と彼が飛行機から降りてくるのを、ロサンゼルス国際空港で出迎えた私はといえば。「雨が降ったらダメ」「夜になったらダメ」と幾つもの車の運転に関しての〝ダメ〟をかかえる身であるけれど、ちょっと住んだ車社会の長い長いコンクリート道、メチャ速く走らなければいけないフリーウェイを幾つも乗りかえ、間違えないようにと幾十分を無事走りきり「私でもこんなすごいこと出来た」と感動と興奮の頂点にいたのでした。

久しく一緒に住む、ということをしていない父と娘たちが、共に暮らす良い機会。私とて粘土細工みたいに、もう作りきれなくなってしまった子供たちと少し離れて、一人の行動をしてみたい。言い残すこと、買い置きも一切やめ。この際、私風ではない生活をしてみることが良いでしょう。アメリカでは、主婦が社会的に働くということは当然みたいで、子供を育てながら働いている様子

をテレビ等で知り「偉いなー」子育てしか出来なかった自分をかえりみる。その専業子育てすら、父親の側からすると非常に気に入らない部分が多いみたいで……。不惑どころか。

ロサンゼルスから日本と反対の方向に向けて飛行機で十五、六時間。サンパウロでは、ブラジル事務所担当のルイスと、車がギッシリと町が車で埋まって進退極まる中、それでもジワリジワリと予定の事をこなしてゆき、渋滞を利用し、現在のこと、将来のこと……沢山話が出来ました。車をあきらめて歩いた街角、ノボタンが散る、その紫に父母を思う。子供たちのこと、友人……みんな本当に遠くにいる。

ブェノスアイレス、私の会社の諸々の報告を受け、サインをし、希望を語り、新しく仕事をしてくれるようになった青年と逢い……頼もしい若者たちのアルゼンチン事務所。

ラプラタ河の湿度で蒸し暑いブェノスアイレスの、その大もとのラプラタ河の赤土色の水面を見ながら、セリーナと二人だけで食事をする機会がありました。セリーナがいて、私たちのアルゼンチン。

日本より一番遠い国へ、たった一人でやってきて、南十字星を見ていた夜ふけもありました。やっぱり思うは父母のこと……。

わが身体（からだ）にタンゴのリズム残りいてタンゴに歩む石畳道

三五

「一人の部屋では恐いから」と私の寝室内にある衣装部屋？　の一つに、由野が彼女の持ち物をすっかり持ち込んで〝巣〟としてしまうほど、そしてまだまだ物置も私の衣装のスペースも充分にある、日本の住い方と比べると何かと、ゆとりがあるこちらの生活様式。夜など「一つ家の中よ！」と私に叱られながらも由野など恐がって階下の台所まで一人では行かれない。物音がした気がすれば、バタバタ家中を見巡ると、泥棒の後遺症もある。やたら物騒だという話が聞こえてくるロサンゼルス、エイズの本場とか言われるけれど、あまり縁の無いようなバイキンより人間の方がよほどか恐い。やっぱり犬でも飼おうかな、と思ってしまっている時、「日本の女子大生を一人ホームステイさせて欲しい」という話があり、〝賑やかになって丁度いいかな〟〝スケートをしたいというから、それには我が家ほど条件の良い家はないのだから、役に立てれば〟〝一部屋空いていることだし〟あれこれ見渡しても、さほど難しいことでもないような気がしてしまったから……。

アルゼンチン時代のマルガリータ以来、他人が我が家で寝起きすることと相成りました。ホームステイ主としての気構え、無知、であったことはたしか、物事の順序をおこたってしまったみたいで……。

「本当に来るのかな、来ないのかな」とまず守られなかった日に、我が家に入ってくるなり用意した部屋のドアはバタンとしまり、彼女自身の勝手な時間割りが実行され、名字がわかったのが四日

後、日本にいるその母という人から電話があったのは、住み始めて一週間ほど後、「みなし児かと思ったら親がいたんだねえ」。夜遅く帰って来ない日、玉由と思い当りそうな所を探し巡った。誘拐も多いと聞くから。私が外出先から帰ったら、見知らぬ男の人が我が家にいた。友人とかいうけれど、やたら電話すら教えないようにしている女子供三人の守りの場所へ！　私の次元ではないことばかりが起こる。

それにつけても、私は二度も、充分小さかった、教育未遂の玉由を一人でアメリカの家庭にホームステイさせた。「玉由も、こんなことをしていたのかしら」と思う。冷汗。当の本人は「お母さん、他人を家におくということがどんなことかよくわかるよ」とすましたものだけれど。

他人様が何カ月も私の子供をおいて下さったんだから、私も間接のご恩返しのつもりで何とかやりぬかねば、と決意してみたり。

急成長の日本で育った人と、二十年間日本を離れている私が育てた子供との決定的違いの数々。

セキュリティ会社の見回りの人に「勝手に他人を家の中へ入れないで下さい。何事かあれば登録してない人は不審な人物として警察へ連行します。今から新しく登録することは容易ではありません」などと脅され、暗号を使うセキュリティ装置も使えなくなった。かえって物騒。家の中が華やぐどころか、音をしのばせたり、話したいことも話せなかったり……。

注意して、少しは我が家流になってもらおうか。いやいや、まったくの他人、それも二十歳近い大人、何も私流に変形することはない、また出来るわけもない……。そうかと言ってこのまま我慢

し続けるほど私の神経は太くはない、間違いは訂正しなければ。
こうして理想のホームステイ姿とはほど遠い次元で御仕舞となるのでした。私と子供たちに〝経験〟を残して。

不自由をするが好きねと我が子等に言われているよ英語モタモタ

三六

アルゼンチンに住んでいた時は、本当に日本がありませんでした。情報も食料品に関しても、友人も。せっかく外国に住んでいるのだからその国に入り込みたいという構えでした。そして、時折チラリと日本に触れることが何よりの楽しみで、そういうのが外国で暮らすということだと思っていました。

現在のロサンゼルスは、深く深く日本が入り込んでいることを毎日知らされ、パームツリーやいわゆる日本の温室植物が隣々の庭に無造作に生えているのが、ここはカルフォルニアと教えてくれてはいますけれど。これほど日本に不自由をしないのは、なにかつまらない気さえするほどです。

毎朝、日本から送られてくる日本のニュースを見ながら一日を始めます。日本の家庭に配られるのと同じ新聞が、日本と同じ日付けで届きます。この新聞を頼むに当り考えました。日本から一歩

も遅れずに暮そうか、日本に帰った時「おや、まあ！」と驚きましょうかと。長い外国住いでも所詮私は、日本語からしか知識を得ることが出来ないことを悟らされています。その上今度は、英語に傾いてゆく子供たちに対し、良きに悪しきに〝生きている日本語〟の持ち主として断固としていなければなりません。などなど思い合わせ、四年間暮らした日本での時を思い浮かべつつ、ロサンゼルスから見る日本。

何処からともなく皆決められ、指図され、巻き込まれ、それに遅れれば落ち零れ、肩身が狭く。花が咲くことにすら挙国一致的ムードがあり、それはそれで乗っていれば楽かもしれないけれど、もっとリラックスして、ありのままの人間っぽさ、せっかく生まれた個性を発揮して……そんな風でもいいと思う。

こと私に関しては、日本で常にイラついていましたが、こちらに来て、身のほどというかあきらめの位置にすーっと入り込める大きさがあります。カリフォルニアボケというのかもしれません。

統計を取ったりしたのではありませんが、一応の生活必需品は持っており、その都度の買物程度を経験しているにすぎませんが、アメリカに来たからアメリカ製をと思う心に、ＭＡＤＥ・ＩＮ・ＵＳＡがみつかりません。このことが今大騒ぎの貿易不均衡なのですね。物を製造しないで虚空のお金が支配する経済。

驚かされるような国々からの品物が並び、昔、アメリカ製と憧れた質はなく「買うのはやめよう」との思いに至ります。

東京の山手線の内側の住んでいてこちらに来たから、現在の家も大きく、便利だ、と思ったのですけれど、子供たちが友たちの家に遊びに行って「すごい立派な家だった!!」と目を丸くして帰ってきます。どうして貿易赤字の国民がゆったりと立派に暮らし、貿易黒字の国民が尋常ではないまでに働き働き、世界の水準の家にも住まず、それでいてお金持ちだと苛められ、日本は対外表現が下手なんですね。

由野が「学校で、アメリカは常に正しく、昔の戦争から今も全部日本が悪いって教えているんだよ」と不安がります。「人が悪く思える時は、まず自分を反省しなければいけないの」などと私はトンチンカンなことを言うばかり。

日本と比べ、こちらの生活は、特別のことを言わない限り食料品は安く、プライバシーが守られながら生活出来る住いも安く、子供の教育が重点で暮らし、私の家計は日本の時の半分、もしくは三分の一で間に合います。南米での収入を、ドルに換えての私の生活が、各々の国に暮らしてみての感想です。

高々のパームツリーに風見ゆるこの木の下に住んでおります

三七

長く付き合ってきて、そのうえ充分に欲目で見てしまっている親の私でも気付いてやれないような小さなことを、大きく華やかに認め、誉めあげてくれるアメリカ式の教育方法に、由野が変わりました。

玉由も「友たち同士誉めることがない時は、ボタンだって誉めちゃうんだ」といいます。「その方が付き合いが楽しいよ」

由野は、日本の四年間、何の課目についても宿題を一切やりませんでした。自分で「宿題はやらない」と決めてしまい、私は「そう」と言ったばかり。どのように導いてよいかわからなかったから見て見ぬ振りをしてしまった、と言えば言えました。学校のことにまで割り込んでつべこべ言うのがめんどうだった、とも言えます。

学校へは、行って、友たちを得、基本的に理解しなければならないことを理解してくれればそれでいい。成績がどうの、クラスで何番とかいうことには露ほどに興味がありませんでした。日本で学校に通っている間中。由野はこの私の範囲内で、何事もなく過ぎました。

アメリカでの生活が始まって、気付くと由野がいつも机の前にいました。「まだ勉強するの！　先に寝ちゃうよ」ということばかり続き、ある母親と話をした時「子供が勉強をしている間は起きている」と聞き、「おや、私はいけなかったかしら」と思ったのでしたが、子供が勉強するぐらいでハ

レモノみたいに思うことない。私は私の現在の持ち場をやりぬく為に一日の運転の神経を休めなくちゃ。

日本からアメリカへ渡った子供は、しばらく英語に不自由をするというのが普通のようですが、由野はインターナショナルスクールで英語で授業を受けていたのだから今までと何も変わらないわけで、それを説明したのですが、先生の方が、日本から来た日本人の子供ということが先に頭にあり「着くなり英語に困らず、どのテストもクラス一、どうしてこんなに頭が良いのでしょう」と思ってしまわれたのがそもそものようでした。由野に言わせると「もう日本の時習ったことだから」という楽屋の事情がありましたが。

玉由がスケートの目的地を定め、それに由野を巻き込んだような状態でしたから、子供たちの父親からは「由野のことを考えないで」と非難を受けました。私は誰が何と言おうが、アメリカで学び、友を得ることは子供たちの人生の良い経験になるはず、と思い込んでいるから、「でも全部私の責任」と白髪が増えてしまうほどの思いを平静に装って暮らした半年間。

いろいろな人種の学校友たちを家のプールに連れてきて大騒ぎしている由野。

「二カ国語まではわかる子が沢山いるけど、三カ国わかるのは由野だけみたい、皆、絶対由野の悪口を言えないんだ」

「『由野みたいな成績だったら、車を買ってあげる』って言われている子がいるんだよ。アメリカだねえ」

夏休み前最後の日、「こんなもの貰った」と由野「何だろうね」と私。学年で一番という賞状と気付くまでに時間がかかるのでした。

「すごいんだね、いくら事情があっても、大きな学校の一番になれたなんて、自信を持っていいよ」「お父さんが喜ぶよ」「父の日の贈り物だね」

玉由は、スケートとスケートに関連したレッスンの間を縫って先生が家に来て下さり、勉強をしています。勉強自体の能率は非常に良いようですが、大勢の中での団体感を知るべく、九月の新学期からは学校に通います。しっかりアルゼンチンと日本を持った元気いっぱいのアメリカっ子になって欲しい。

日本とアルゼンチンにブラジルも混りて私のアメリカ生活

三八

「一週間くらい会社の用事で日本へ行かなくちゃいけないんだけれど。お父さんは南米が忙しくて来られないって。どうしたら良いと思う？　解決策なかったら、貴女たち、私が帰って来るまで家でつくねんとしてなくちゃならないのよ。それぞれ自分がどうしたら良いか考えて報告して」困惑の私は策つきて、子供たちに押し付けてしまいました。

ロサンゼルス郊外の生活で、車に乗せて連れ回ってくれる人がなかったらそれこそお手あげ。餓死まで待ちかまえています。

由野は「体操出来ない生活なんて考えられない」とすぐ体操友だちに相談し、丁度スケジュールが同じ仲良しがホームステイさせて下さるというニュースを、その日のうちに持ってきました。「ワーありがたいのね。エイミーの家なら安心、甘えてしまおう」

我が家はスケートリンク用の家なのだから、ここで一人で居ても何とか玉由の生活は成り立つのだけれど、そんな訳にもいかない。

「オーストリアからスケート留学している子が一人で住んでて、ホームシックでよく泣いているから、彼女に家へ来てもらえば楽しく過ごせるかもね。出かけることがある時は、スケート友だちに頼んで連れていってもらうから……」たちまちオーストリアの彼女のOKをもらい、さすがアメリカ大好きの子供たちらしく、いとも容易く解決出来たばかりではなく、何だか楽しくなりそうな予感すら。

子供たちも私も準備が出来、新しい試みに期待と不安と……でも決行という時「マイアミまで来ているから、やっぱり子守りをするよ」と父親からのTEL。こうなってみると、今までの緊張がドッと解けるような。子供たちの経験も、アメリカじゃちょっと心配の種が多過ぎていたところ。マリワナ類麻薬の日常性。泥棒、もっと凶悪も。エイズ菌。告訴……弱い所には、すぐ入り込もうとする悪がウヨウヨしているような国だから。

ロサンゼルスに引越ししてから始めて、九カ月振りの日本。「何かおみやげを」と思ってはみたけれど、世界中から一番良い品々を集めている日本へ、今さら持って行かれる物なんて何もない。「おみやげ廃止」こう決めるとおみやげ探しの時間節約、身軽、良いことづくめ。

「夏のお盆の頃の日本にだけは帰りたくない」というのが常々の私の言いぐさだったのに、こともあろうに「夏のお盆」に日本へ仕事で行くという絶望的なスケジュールも、真冬のアルゼンチンの事務所担当ダニエルを交えての急を要することなのだから。アルゼンチンからの彼、ロサンゼルスからの私、成田空港で出逢うという図。

日本から離れた国に暮らしていても、父がいて、母がいて、帰る所があるという安心。田舎に籠る父母に「何か良いこと聞かせてあげたい」と思うことが、生活の励みになり、父母が悲しむかもしれないことは避けようとし、日本の父母が私の焦点であることに気付いた時、私の子供たちに対しても自分が親であるということ、「とにかく生きて、子供たちの焦点になっていてあげなければいけない」と悟るのです。人間としての世の人々の気持ちにも参加出来るようになってゆけるのです。

暑くたって、お盆の移動の人混みだって、脛が痛むほど仕事にかけまわったって、ほんのちょっぴりの滞在でも、日本の空気、日本の草々、友人、日本に来られたってことは「嬉しい」。

揺れ揺れる竹叢の色松の色日本の色のその中にいま

三九

走行距離0メートルの車を受け取りに行った日のことが思われます。道がよくわからなかったし、スピードも恐い、「もう仕様がない」と開き直って神風特攻隊といえば失礼に当るかしら、自分としては、なかば神憑り的な気持ちでした。

そんな大それた気持ちの日から十カ月間、毎日毎日アメリカを走った距離が二万マイル強、すなわち三万三千キロほどにもなっていることにはたと気付きました。

三万三千キロといえば日本列島が十一個分。小さな日本列島と言えども、十一個も重ねれば地球を一周出来る距離に近づく。「えらいこっちゃ」よもや私が、そんなすごいことをしているなんて。「車を運転することはない」と決めて人生半ば、自分の我儘を押し通すためにやむなく始めたことが、そんな数字になってゆくなどと。

今までに、日本とアルゼンチンの往復を二十数回かな、もう数えてもいないけれど、ということは、地球を二十何回も廻っていることになるのだけれど、人に頼らず、自分の運転で、ただただ地図を頼りにゼロからの挑戦で、地球一回りに近づく。何も出来ない、ささやかな人間と自分を謙遜ばかりしていなくても、ひょっとしたら、もっとすごいことしようと望んでもいいんではないか、なんてこのところちょっと考えが狂っている。

アメリカを車で走ると決めた時、まわりが中古車をすすめた。「どうせ始めは、あちこち打ち付け

るから、まずお古で慣れて」というのですが、この物指しは気に入らなかった。母が「人のお古なんぞ使うものではない」と言って私を育てたから、というのが私の言い分で……。今も新車の時のまま。かすり傷一つない。何しろ私のアメリカは、我が車のフロントガラス、バック、サイドミラーを通して見知ってゆくのだから、よく見えるようにいつでもピッカピカ。始めてのLAエアポート行。すごいスピードで走らなければいけないから、横文字地名を読んでいたんでは対処がおくれる、躊躇なし、ああ神経！　運を天に！

嵐の夜、由野を迎えに行かなければならなかった日の決意。

玉由のスケートの試合が幾つも山を越えた向こうにあった時、早朝、昼間、夜中と時間を選ばず、何往復もしました。そして結果が「彼女本来の出来ではなかった」ということで「命がけで連れてったのに、ろくなことしなかった」と大喧嘩。見知らぬ遠くまで連れて行かなければ！　というプレッシャーは大きかったのです。でもこれが一つのステップとなって、あそこに比べれば近いもんだ！　何でもない！　と運転のレベルを一段上げました。

ビバリーヒルズにチリ人の友人がいて、そこを訪ねるのに、コールドウォーターキャニオンという道を行きます。キャニオンとは峡谷山中の道、イロハ坂みたいなのを初めて行った時は、私の後ろにすごい車の行列が出来てしまって…焦り、冷汗。一車線しかなく、どんなカーブか、どっちの方向へどの程度の坂か……この道は二度といや、と思ったけれど、なんのその、今では決して他人に迷惑をかけないスピードでこのキャニオンを通り抜けます。

フリーウェイを走ってゆくとコンニャクも納豆も、日本の物が何でも買えるのですが、命掛けでコンニャクを買いに行くか、行かないか。今に至ってもコンニャクをあきらめることは多いのです。本当に出かける必要があるか！　それほどでもないか！　この決断は日に何回となく。そして出動と決めると、道程をすっかりイメージして、慎重に、地球を単位に。

0メーターより始めて今日は三万キロアメリカ国を走り走りて

四〇

どこも悪い所が無いばかりか、増々乗り慣れてペットを可愛がる的な気持ちにさえなってきていた私のアメリカ一番初めの車が、もう一年過ぎた。別れ時です。

車に対しての私の基本的な考えは、87年型ならば87年の間乗り、88年型に88年を託す、という一年消却です。命掛けで使用するものには、命を掛けるほどの細心の注意を払いたい。フリーウェイの真中でエンコしてしまうのなんて真っ平。夜道での故障も困る。とにかくすべてのトラブルに係わりたくない、というか、トラブルを抱えてまでもアメリカで住める実力がない、という方が正直かな……。

車を新しくしなければ、と思いたってからも、日々に追われ、なかなかでしたが、この世に衝撃

時、エアーバックがパッと開いて人体を保護する車が出来たと聞き知って、今回は、どうしてもこのエアーバック付きの車にしたい。〝車で速く走るのはいやだ〟という気持ちを、部品でもって少しでも軽く出来たらという願いがあって。

エアーバックとエアコンだけ……という私の単純計算にあてはまる車はなく、運転席で、前を向いたままあれこれボタンを押すと、ありとあらゆることが出来てしまう、という完全装備の車の持ち主となってしまった。真赤な新車を喜ぶどころか、非常に腹がたってきた。〝こんなボタン装置、いらんお世話だ〟といきりたっても、ボタン以外の言うことをきかない車。今の世の人は、こういう車を便利でもっともっとボタンだけで済ませたい、と思うのだろうか。玉由が、彼女は電池、ボタンというおもちゃの時に育ったにもかかわらず十二、三歳の頃、コンピューターを見て〝こういうものが発達する前に死にたい〟と言ったことを思う。可愛想な玉由、何とか諸々のボタンの押しかたを覚え、私より長生きしてもらわねば。生まれてきたことを後悔させないようにと育ててきたつもりだけれど、私の手に負えない世の中になってしまったみたい。その点、由野の方は、時代最先端のボタンを直感的に押す。人間生まれながらに、向き不向きというものがあるんですね。

ドアの鍵を開けようとしてトランクが開いてしまい、四方から音が押し寄せてくるステレオを消そうとすればクーラーが入る……頼んだつもりはないのにセキュリティシステムが大騒ぎする……。運転席でしばらく考え込まないと何をどうしてよいのか……みたいな。

このくらいのことには、私だってすぐ慣らされることでしょうけれど、浮かない気持ち。「学校の

友だちみていると、この国の人が心を込めて安全な物を作ろうとする、ということは信じられない」という由野の意見で、このボタンだらけの車は日本車です。

アメリカでは、セールスマンが一番車を乗り回す、というのが相場だそうだけれど、同じ期間内にその〝セールスマンの倍の距離を走った〟と言われた引き取られていった前の車。私が、この世で一番嫌だ、と思っている車の運転を、沢山走るアメリカ人の倍ほどまでもこなして子供たちの便利を計ってきた、なんてことを知るはめとなった。のほほんと、その日が暮れている〝もう一押し〟という私の期待なんてどこ吹く風の子供たち。私のストレスなんてまったくどこにも報われてない。私本来の、我儘、天の邪鬼、怠け者……こんなのが出る暇もないほどの子供との日々はなんだったんだ。

子供たちのトレーニングが終わるのを待つ夜更け、グッと倒した運転席で、ボタンで開けた車の天窓から、アメリカの星を月を見ながら思いは思いを呼ぶ。

ほうれん草日々に食みつつ一年をポパイの国にわれは過しぬ

四一

ロサンゼルスで毎朝の目覚めにスイッチを入れる日本人向けのテレビ番組で、ずっと天皇陛下の

ご闘病が伝えられています。心が傷み人間という存在をひしひしと思う此の頃。そして母も病んでしまって。

親とは、常に元気で、子供たちの心の焦点として古里にあるもの。いつでも親の子供でありたい。〝日本に父母が居る〟という安心があって、はじめて平気で外国に住んでいられる、とその大切さを今改めて思うのです。

二十数年も前のことになってしまったけれど、東京に向け、そして外国に、と父母のもとを離れてからずっと私の〝安心〟は、揺れた時もありましたが安泰でした。日本人の平均寿命という甘え、今まで何でも平均以上にやってきた人だもの、年齢だって当然平均をこともなく越していってくれるものと信じきっていました。両親と一秒でも長く、同じ地球の人間として心からのテレパシーを送り合いたい。母の病気に、平穏だった親への甘えが掻き乱され、親が子へ、子が親へ……と人類始まって以来の人間という絆に連なった思いです。

明治生まれの律義さ、自らに持ち合せている善のすべてを尽し、精いっぱい生きてきて、さあやっと良いこと、楽なこと、幸せという言葉のままに居ればよい時になって、病に苦しむなんて、ロサンゼルスの片隅で、「母上いかにいますか」と涙が零れてしまう。時には零れるものを子供たちにも見つかってしまったり。

我が家は、どちらを向いても、映画、テレビ関係の撮影所という環境の中、玉由の学校の友たちの中にも、先輩にも、テレビ、映画に出ている人たちが多く、そんな雰囲気の中、金、土曜日には、

パーティーやら何やら、とにかく派手に遊んでいたのが「おばあちゃまのこと思うとそんな気持ちになれなくて…」と玉由は夜遊びを自粛してしまった。

由野は、今まで、ベッドも着た物もひっくり返したまま学校へあわただしく出かけていたのが私との喧嘩のもとだったのに、このところきちんと片付いていて……どこか緊張しているのでしょう。

「同じ地球にいた時があったのに、お母さんのお母さんに逢わせてくれなかった」と子供たちから非難されている私ですが「お母さん、日本へ行きなさいよ、お母さんのお母さんのところへ」

遠くに居て、苦しい息づかいを見ないでいる方が、私には楽かもしれない、だけど今、ありのままの母と共に過ごしたい。

「本当におばあちゃまは、何一つ身体に悪いことはしなかったのか」と玉由の質問ですが、父母の家に来てみれば、木々草々の生み出す空気のもと、四季の小鳥、花々が……、天国に一番近い所はここ。私が子供を育てている公害、雑音雑言ストレスの場とはえらく違う。

身体に良く、口に合う物だけをちょうど良い量だけ食べ……それでも病む。運命というのでしょうか。でもその母を診るのは母の望んだように彼女の夫の子の孫の医に携わる者たち。

私も日頃の音信不通の兄たちに逢え、頼もしいお医者さん振りに、もっと兄弟姉妹の存在を思いながら暮らすのも悪くない……なんて思い至った。

母が掻き乱さなかったら、兄弟姉妹のこと甥や姪たちのことが遠くのまま月日が過ぎていったでしょうに。親とは悲しい、身を持って〝人間というもの〟を子供に教えてゆくのですね。

飛行機は九百キロのスピードにて我が母の国日本へ向かう

四二

「アメリカの生活に飽きちゃったね」
「アメリカにもいろいろある、ということはわかるけれど、ここでは人間も生活も気候もワンパターンで」
「〝そんなことしたって仕方がない〟とか〝危うきに近寄らず〟といったことしか残ってないもの」
「子供たちの英語も、この国の人と同じになったことだし」
「もっと心の通い合う人間らしい生活をしたい」
「レストランへ行っても、とにかくアメリカの人によって手を加えられた食物の〝不味い〟という言葉が通用するお料理事情に呆れ果てて、この国の料理ということを無視してしまっていたけれど、アメリカ伝統の料理というものに挑戦してみないことには」
「それなりに、良いところだってあるはずだよね」
「早いもの、アメリカ生活三度目のサンクスギビングディ」
「我が家のアメリカでの出発点として測るサンクスギビングディに積極的に参加するべき」

「アメリカの家庭みたいに我が家でもターキーを焼いてみようよ」
さっそく〝Holidacook〟というテーブルデコレーションも美事な写真入りの本を買った。さて、この本のように…というわけで。
まずはスーパーマーケットへ。さすが此の頃巨大なターキーをゴロゴロ売っていて、あの凄い大きさはアメリカの人が買う物だと思ってきた今までだけれど、いよいよ私が〝どれにしようか〟と選ぶのです。〝若々しく、艶があり、大きな物〟ということで22ポンドすなわち11キロほどのを抱き上げる。どう考えても我が家にこんな巨大なものは不用だけれど、この際そんなこと言わないでアメリカに参加してみるのだから。
まわりの人々も皆、巨大なターキーと、独立していった家族が集まる日の為の大山の買物。皆の買物の内容がほぼ同じものというのが面白い。
今度は、スタッフィング用、すなわち、ターキーのお腹に詰める物を。これは各家庭の持ち味なのだそうだが、我が家は本のとおり。スタッフィング用というパン粉、調味料等がブレンドされた箱を取り込む、その他、エビ、カキ、ソーセージ、干ぶどう、リンゴ、玉葱、セロリ……これ等を箱の中の内容物と混ぜ、ターキーの内臓から取ったスープでととのえ、オリーブオイル、シェリー等で味付け。これをターキーのお腹に詰め込むというのがメイン作業で、あとは22ポンドが弱火で焼ける七時間の間に、これまた巨大なスポイトで汁を時々かけてあげればよい。七時間あまり台所でウロウロする間に、付け合わせのマッシュポテト、そこにかけるグレービーソース、とはホワイ

トソース状だけれど、牛乳のかわりにターキーの内臓から取ったスープでのばし、生クリーム、塩、コショーでととのえる。ターキー用ソースはクランベリー。クランベリーというベリーは我が家の近くのマーケットでは気配がなく、皆出来上がって瓶詰めになったのを買っているようで、私もそうした。

デザートのパンプキンパイも、この辺で一番美味とされている店から購入。レシピだけは読んだから、何が入って、どのように作るか、ということは理解済みで。

代々伝わった味、というわけにはいかないが、始めての野次馬挑戦で、我が家のテーブルは立派な巨大なターキーが、姿よろしくこんがりと。

南瓜とは言わず今宵はパンプキンパイ感謝の日には感謝をしつつ

四三

ちょっと前、ここマドリッドに旅した時は持ち合わせているスペインというイメージのまま、ほのぼのと過ごせたのに、今回、ガラリと変わってしまったのに戸惑う。

子供たちの背丈が伸び、目の位置がわかった故か、日本やアメリカでの生活経験の故か……。

とにかく、日本の人が、日本円の価値に驕り、他国の事情を考えず大挙して外国旅行をするに至

って、原地の観光に携わる人々が変わってしまった。私たちも、日本人の姿だから、何とか日本人からお金を騙し取ろうとする人々に否応なく接してしまい、(言葉にも、習慣にも困らない私たちには、あまりにはっきりその様子が見え) 非常に気分を害されるのです。

そのことを踏まえ、スペインの売り物である闘牛についても、いくら食べてしまうほどの動物であるとはいえ、怒り、苦しみ、死んでゆくのを見せ物にするなんて、伝統だ技術だと言ってみても私には駄目。もう一つの売り物フラメンコも、床を蹴っ飛ばし、不平不満を喚き散らすこんな下品なものもいや。その上食事の習慣も、質素な物を控え目に、その物の味で、という此の頃の我が家流とはえらい違いで！　してみると可成り相性の悪い国ということになる。何を今さら、逆時代的な所へ、これからの子供たちを連れて引越すのなんて……駄目だ、と感じてしまった。

どの国の、どんな所に住めるかな、住んでみたら子供たちの将来の役に立つかな、というのが今回の旅の目的だった。

「イギリスに行ってみようよ」

スペインの旅行社でロンドン行切符を子供たちと私三人分を買った。スペインの飛行機に乗り、ロンドンに着いて気付くと、スペイン人が集められた観光バスに乗せられており、スペイン語でロンドンを案内され、スペイン人の目となってロンドンを見るということになってしまっていたのです。

イギリスからアメリカが出来……と世界の国々、世界の歴史への思いが駆け巡るのがロンドン。

私事にしても、子供たちの父親の祖父（勅任官御用牧場の場長）が、昭和天皇の皇太子だった時の皇太子白馬を、はるばる船に乗って、ここロンドンにまで探しにいらした……というロマンに思い当る。「ひょっとしたらここにも……」と王室の馬を司どる立派な馬場に来て思う。

その頃、日本とは反対側の国アルゼンチンから、セリーナの母となる前のセリーナ・ペラルタラモスさん（アルゼンチンの大富豪）が、自分の牧場の牛を船に積んで、搾りたての牛乳を飲みつつパリ留学への船旅をし、もちろんロンドンにも立ち寄り、ヨーロッパ社交界の華となるべく……。

あんなこと、こんなこと話しながら、今やっとロンドンへやってきた私たちは、スペインの目とは離れ、自らの足で噛み締めるごとく歩いた歩いた。エネルギーの残る限り。

子供たちの感想は、「今まで見た国の中で一番素敵」「きれいな英語」「多くの人種が混ざっているから楽」「今度アメリカへ帰ったらイギリスで勉強すべき仕度をするよ」。驚いた。まったく予期していなかったロンドンにのめったのですから。

「仕事の場がスペインでも、ヨーロッパはどこへ行くのも近いから、好きな所へ行けばいいわ」といいつつ、狭い所の陸続きなのにこうも正確に言葉が違い、人種、習慣、使用している通貨がちがい……ヨーロッパ人て、決して物事をウヤムヤにしてしまわない頑固者なんだ、と思うに到った。戦いの歴史の縄張りの後遺症かな。

たおやかに続ける丘よスペインの歴史と落ちている石ころ石ころ

四四

日本で、アルゼンチンで、生きてきた日々、警察とは、頼もしい存在としてこの世にあり、自分との係り合いなど無いものと思い込んできた。ところが、アメリカ生活二年ちょっと、満艦飾、フルセットの救急隊を、自分の為に騒がせるということを三回もしてしまったのだ。アメリカに住むということが、よほど下手で合ってない人間なんだなあと思う。

まず一回目は、我が家に泥棒の騒動。次は玉由のセキュリティ装置誤操作、すっかり解除して出かけたにもかかわらず、中央のコンピューターが察知し、指令を出したとか、救急車、パトカー何台か、留守にした我が家の三階の窓を梯子車でこじ開け、中の様子を調べた！　という大騒動があったとか、出先に知らせがあり、たまげた。この時は、罰金50ドルのチェックを警察に送った。セキュリティシステムとは、いざの時、このようにして助けてくれるのだ、と知る。

さて三回目。玉由の時。麻薬だ、ギャンブルだ、と恐ろしかった同じ学校に由野を通わせる親も親だけれど、由野については、優等生のお誉めがあるばかりで、恐ろしい話は何もない。いかにこの二人が同じに育てて同じでないか。その学校への由野の送り迎えが、免許取りたての子たち、子供のことに目が眩んで前後の関係が見えない親たちの集団で〝危ない危ない〟とは言っていたのだが、気が付くと、私の車のフロントにデカイ、バンが乗っかって目の前に車輪がクルクル回ってい

た。

見かけは、物凄い事故だから、誰からかの通報で、すぐピポピポウーウー。私は、潰れた車の中で常に車に入れてあった〝事故の時は〟という本を取り出して読み、まずエンジンを切る！　に従い、誰も怪我のないのを確かめに車の外に出て足が疎んだ。パトカーが五、六台、オートバイのお巡りさん多数、救急車、なぜか梯子車も、それからクレーン車……道は通行止め。

この世に、他の車が走っているということを忘れてしまった相手が、私の隣の車線から急にUターンを思ったわけで、〝事故の時いくら悪くても決して謝まってはいけない〟といわれているアメリカ人が「ソーリー、ソーリー」言っていた。

修理代、直している間のレンタカー代、警察への罰金も相手が全部払った。だけど、いくら自分が気を付けても、降って湧くことがある恐ろしさに、しばらく動揺した。だのに、現実は厳しい、我が家のガレージに玉由の車が加わった。

「お母さんは、玉由の悪振りに散々困ったのに、どうして〝良い子ね〟って良いことしか言わなかったの」と私を試すごとく、三歳から反抗を始め、ずっと跡切れることなく反抗のしっぱなし。普通、反抗期という時があっても、少しは平静に育つ時期だってあるだろうと思うのに……何とも激しい子だった。

ただ激しさだけだったら、疾っくにこちらの力尽きていたところだけれど、激しさの中にチョコッと見え隠れする〝やさしさ〟に、これじゃ本当の悪にはなりきれない、と叱り、諭し、励まし…。

由野は、物心つくと、私と玉由の葛藤を見て育ったから、さっさとその辺を避けて通り素直すぎ、真面目すぎ、「そんな面白くないから、もっとリラックスして生きなよ」などと文句を言うほど。「人に対してやさしくなれなかったら車を運転してはいけない」って言い続けてきて、そして、玉由が「もう反抗期は終わった」と自ら宣言した。私の、出来る限りをしたのだから、もう信じていられる。

前後左右ミラーに写るはみな車その只中に私の顔

四五

「日本のおばあちゃまたちに逢いたいな、もう二年半も逢ってないよ」と子供たち。
「そうだ、今年の夏休みは、おばあちゃまへ直行しよう」
「もう幾つ寝ると夏休み」幼児のごとく数え始めた日数は、たちまち消化されてゆき、そして、梅雨の日本の田園調布のおばあちゃま宅にどやどやとカリフォルニアが入り込んだ。「しっかりおばあちゃまと過ごすのだから」

田園調布のおばあちゃま、すなわち子供たちの父親の母、八三年前の丙午生まれ、名は福子。女学校時代は、土屋文明先生の教え子というタイトルあり。歯科医師生活六十年、診療し続け、立ち

続け。従って、根性、足腰の強いこと。私も子供たちも一緒に歩くと「意気地なし」と叱られる。最近、目と耳が多分に不自由と申告ありだけれど、「大きい字で手紙書くから大丈夫だよ」と由野。「玉由は声が大きいんだから、気にしない、気にしない」と玉由。

現在は診療をやめ、跡継息子（子供たちの伯父）の診療室、技工室の「お掃除バアさんになったのよ」と新しい職業にいたく御満悦。共に住む長男の嫁は「私が掃除しないみたいでいやだわ」と陰の声ですが、そんなのは聞こえない部分に入り、何のその。

福子さんの歯科医学生時代は、原宿に家がありました。人っ気のない、うっそうとした所だったそうです。まったくの偶然とはいえ現在、私の弟、今泉邦良のフォトスタジオがある所が、福子さんの若き日の住まいだったそうです。

玉由・由野が日本に住んだ間の学校は、原宿にあり〝校庭が表参道〟といった雰囲気で、あまりに時が隔たり、町の様子が変わったとはいえ、おばあちゃまと子供たちは、原宿という共通の所へ、手を取り合って散歩に出かけるのを見とどけると、私はもう一人のおばあちゃま、すなわち私の母米子さんが気がかりで、御馬に来ています。

子供たちからは、「いつおばあちゃまに逢いに行っていいの？」と電話が掛りますが、私は咄嗟に「来てはいけない！」と言っていました。

玉由に困った時、離れ住む父親に、私の子育ての失敗？　を知られたくなく、自分を盾に玉由をかばい続けてたのでした。結果が良かったか悪かったか……多分、本当の姿を見せ合うのが親子で

あり、家族であるのでしょうが……。

そして今度は、母をかばってしまった。あまりに悲しいことだけれど、今の母に「逢う」という言葉はない。「病に苦しむおばあちゃまを見せる」そんなこと、おばあちゃまと子供たちと両方の立場にたって、出来ない。私が、母になりかわって考えると、「病んでいる姿を人に見られるのはいやだ。信頼のおけるお医者様がいてくれたら、一人密かに苦しみたい」

美しく、けなげな、人のことばかり考えていたおばあちゃまが子供たちの心にしっかり入っているのだから、そのままおばあちゃまを、ずっと心に持ち続けさせたい。

人間ということの本当の姿を子供たちに見せるのが、私の子供たちに対する義務かもしれない。このことで、子供たちが心足りない人間に育ってしまったらどうしよう。私の一世一代の取り返しのつかない大失敗になるかもしれない。だけど、今の母を誰にも見せたくない。私が守ってあげられる母の最後のプライバシー。

もう少しもう少し地球にいて下さい命のことに欲深くなる

四六

何よりも怖がっていた日本からの国際電話のベルが鳴ってしまった。母の命が、心もとないこと

は充分にしっていた。だけど私の母に限って…この期に及んでも、母への甘えはとてつもなく大きく…。

もっとも身近な人が居なくなってしまう、こんなに大きく重い出来事も、平然と乗り越えてゆかなければならないんですね、人間って。

枕をギュッと抱きしめ、声を忍ばせて泣く由野。「お母さん！　死んでしまうってどういうことなの！　わからないよ！　わからないよ！」と叫んでいる玉由。私の自制出来ない神経はゴウゴウと涙を流した。

そして、気付くと玉由が、狂ったみたいに地球上各所の電話番号をまわしまくって父親を探していた。心を共有出来る人が誰も居ないロサンゼルスで、私たち三人は持ちこたえられないこの重さを、父親に支えてもらいたくて。

スペインから、たちまち飛んできた父親に子供たちをあずけ、私は全身母の子供となって帰ってきた古里で、私の幼い、拙い涙を振り切るように、シャンと姿勢を正し〝人間とはこう生きるものなのですよ〟という立派な方の見本みたいな思い出話、となってしまっていた母。

母の六人の子供の中の五番目の三女、そのうえ多分にものが悪かった私とはいえ、自分の方を向いてもらいたくて……でも、身のほどということを、まず悟らされての私の生い立ちでした。

現在、私と私の子供たちがしているような甘っちょろい親子関係なんかではなく、大勢の人の為の、大きな存在だった母を、遠くの方から憧れて見ていたものでした。

自分の置かれた位置への抵抗、やけっぱちみたいで、日本から最も遠い国、アルゼンチンへ行き、こうすれば、少しは私のことを思ってくれるかな…。もうこれ以上遠くはない所より父母を思うのは、私に合っている気がしました。

自分の子供たちについては、甘やかせられる限りを尽くし、手をかけ心をかけ……この方法が子供たちにとって究極であったかどうか、私の母に対する羨望をうめつくしたかどうかわからない。「由利に負けちゃいられない」と短歌の数がぐっと増した母、私は、母には勝てっこないからグズを決め込み、適当で楽をしましたが、父母を恋する短歌を歌いました。

働き、尽くし、すべてのことをキッチリと決めあげ、身も心も精いっぱいだった母を、労り助けてあげることもないまま、ただただ何の役にもたたない部分で思い続けることだけが、私の母へのすべてでした。

でも、もう安心。年を取らない母、苦しまない母、母が身体でもって示した数々は、消えてゆかない形で私に入り込んでいるんだし、私の位牌となった母を、大勢分の一と遠慮がちに思わなくてもいい。

兄弟姉妹が、それぞれの母を持ち、みんな一人占めに出来なかった寂しさを取り戻せばいい。

私の母は、私と一緒に世界ジプシー生活をするのです。「これがどうなりましょう」と母の生涯に出逢わなかったことばかりにとまどい、文句を言うでしょうことはわかっていますけれど、六十年間、どこにも行かないで、家の為の家の中に居た人を、さあ、世界に引っぱり出しますよ。

忘れ得ぬ母とのことの浮びきて母の子になる心ゆくまで

四七

長い外国生活をしていて、思い定めることは唯一つ、私の古里、私の父母。

思いの中で豊かに甘え、厳しさもあり、父母のモラルから外れまいと心して、少しでも良いことを聞かせてあげたい……こんな風に心の中で会話する焦点が〝無くなってしまったらどうしよう〟と、そのことがとても怖かった。

母が亡くなってからの日々、驚いたことに今まで、決して母が登場しなかったような、岩っぽく砂っぽい風景にも、いとも気軽に笑顔を見せてくれる。私が見る物、すること、何にでも参加してくれる。以前よりもっと世話をやいて私を見張っていてくれる。このまま、ずっと母と共にいられることを知る。親離れなんて出来ない。親と子という生き物の法則に、オリジナルな自分の心を織り混ぜて、死んでしまったらお仕舞い、なんてものではなく、もっともっと〝私の必要〟になってくれていることを知るのです。

そして、私の子供たちも、私が母に思うような〝必要〟を思うようになるのでしょうか。

時代、食物、習慣、国……が違ってゆけば、人間の心というものも変化してゆくものでしょうが、

いつか、私の子供たちの、少しでも役にたてる〝思い出〟になってあげられるために、まず今、幅の広い人間にならなければ……と、またまた母が教えてゆきました。

「お母さん、短歌作ろうよ、書き留めるから何か言って！」という私に、「それどころじゃない」となかば怒った、全身短歌の母が!!　本当に本当に、どうしようもない苦しさということに、心が裂けた。「子供たちに、こんなのでなくてよかった」と一人で苦しさを引き受け……その母の生涯の部屋で、母の蒲団、母の位置で寝泊まってみて〝小さかった時、ここに寝ていた〟と思いあたった。

六人兄弟姉妹のうち下の方の三人が、三チビと呼ばれていたのだけれど、その三チビと父と母とが、タンスが置いてある八畳に寝る。

大きな家の、いっぱい部屋があり、女中、看護婦、子守りに、祖父、祖母と目があったその当時、「どうして、あんなにギッシリになって寝ていたのだろうか？」

母の枕元は私。母の右側が君義、左が邦良。そして、その寝室のガラス戸を叩きにくる急患に起こされ、寝始めといい、夜中といい、一晩に二度も三度も、往診があった医師の父。出かけた父を待つ母と私たち。

〝夜中ぐっすり眠るということはない〟ということを、物心つくと知った。

〝眠い　疲れた〟という言葉もなく、全身で町の人に対する父の情熱とやさしさをも、物心つくと知っていた。

崇高に子育てをしたかにみえる母だったけれど、あの時点では、盲目的に子供たちを彼女の身体

で覆うように、庇うように育てていたと、父母の天井を見ながら、幼児の時の記憶にかえった。
母が亡くなったことで、どっさり〝思い出〟が蘇った。今、思い出しておかないと永遠に忘れ去ってしまうかもしれないようなことも、法事に集まった叔父、叔母たち、従兄弟、従姉妹、姉、兄、弟……との会話から私のものになって来そうなのだ。こうして、「こういう父母のもとで育ったのだ」と。
祖父、祖母、もっと先祖にまで思いは及び、自分の存在ということを確かにする。
懐かしさ、ありがたさ、やさしさ……私の持ち得る心のすべてを尽くし、父母を思い続けるよ。

何事も無かりしごとく続けゆく常の心に母を加えて

四八

瑠璃子姉、闘病の彼女は、私の心を常にぎっしり埋めていました。そして、細かいことにも激しく揺れ動き……彼女が、私の心を限りなく人間へと導いてくれました。
そして、そして、そっと亡くなってしまった。二十年間病が彼女を支配して。
私たち六人兄弟姉妹の上の方三人と、下の方三人は、人種が異なるくらい離れて育ったような気がします。

年齢の差もあり、三チビが活躍を始めた頃には、上の方三人は、学校のため、他人のご飯を食べるため、と名古屋の知人に預けられていて、夏、冬休みに帰ってくるくらい……家に帰っている長姉は、二階の和室で琴を弾いており、瑠璃姉は、和室とは一番離れた洋間でピアノを弾いていた。私は、和室へ行って琴を教えてもらうみたいな邪魔をし、洋間へ行って瑠璃姉のまわりをウロウロし……もう姉たちがそれぞれに上手なんだから、今さら私が…ということで、もっぱら木登り、蝦蟹取り、庭の草々遊びに励んでおりました。長兄は、ハレモノみたいに大切にされていたから、私には反発することしか残っていなかった。

喧嘩をしたり、ゴチャゴチャ兄弟姉妹らしくという次元ではなかったうえに、姉たち二人はあっという間にお嫁に行ってしまい、母が、あまり里へ帰らなかったみたいに、母に育てられた姉たちが、家に帰ってくることもあまりなかった。

私が、学生として東京にいた時、転勤の多かった義兄が丁度東京の支店長で、この時に妹として瑠璃姉から充分に姉を味わった。

ゴルフもスキーも音楽会も、おいしい物の食べ歩き、何やかやパーティーに……とにかく瑠璃姉の後から付いてゆき、学生の身分では味わえないようなことを経験させてもらっていた頃、出来心で、アルゼンチンまでも引越すことになってしまって、その国が、地球上のどの辺にあり、どんな様子なのかも調べる智恵すら持ち合せていないような幼さのまま、船に乗って四十五日間、着いてしまったアルゼンチンで、案の定、私が生きているうちで〝今日が一番淋しい日かしら〟〝明日の方

が、もっと淋しいのかな〟……と途方にくれているところへ、瑠璃姉が、せっせと本や雑誌を送ってくれた。日本語の本が買えない国へ。どんなに、どんなにうれしかったことか。だのに、ある時、本は送られて来なくなった。瑠璃姉の病気。その時、脳腫瘍という予備知識は、私には何もなかった。ただただ、はるか彼方から思った。瑠璃姉の病気は私の病気。瑠璃姉の苦しみは私の苦しみ。瑠璃姉の淋しさは私の淋しさ。瑠璃姉のやさしい愛らしさは私とはいわれないから、その上等の部分を瑠璃姉に返せば、瑠璃姉は私そのものだ。

玉由は、生まれたその日から、私の唯一の日本語の話し相手として、瑠璃姉のことを聞き続けてくれた。

最後になってしまった瑠璃姉を見舞ったのは、母の忌み明けに日本へ帰った時。弱っている瑠璃姉に、オタオタ動揺する私を、玉由が「瑠璃姉ちゃんの所へ行かなければだめ」と励まして、吉祥寺の病院まで付き添ってくれた。「玉由も、由野をこんな風に思うのかなあ……」と。

外国で、誰に遠慮することも叱られることもなく、勝手気儘に自分の心を動かす癖がついてしまった私はだめです。子供たちまで巻き込んで今は、瑠璃姉への涙をこぼしているばかり。

一人来てレモンシャーベット頼みたり姉と坐りし窓辺の椅子に

四九

「南米は、政治も経済も変動が激しく、一つの国だけに頼っていると、たちまち飢えるようなことになる」という私たちの経験からの発想で、幾つかの国と係わり合いを持つのに至り、「お父さんは、飛行機に住んでいるの」と小さかった由野が言ったように、彼は宙に浮いているほどに地球を飛び回る人となり、従って、私と子供たちは「何処の国に居ても、どっちみちすぐ来てくれるのだから」と気易く、玉由が十歳の時「外国で生まれても、日本人の子供だから、日本を知らなくてはいけない」と日本で生活を始めてしまった。

日本では、日本を知るのと共に、英語を身につけさせたく、アメリカンスクールに通わせた。そして、玉由十二歳の夏休みに、「一人で英語で暮らせるかどうか」とニューヨーク郊外、カナダとの国境に近い所の「同年代のアメリカの子たちと走ったり、泳いだりのキャンプに入れよう」と父親の思いつきでした。

ニューヨークの飛行場で、日本から一人来た旅の玉由と、南米からの父親が逢い、そこからレンタカーで何時間もドライブし、目的のキャンプ場まで連れてゆき、彼はトンボ返りで南米へもどり、二週間たったらまた南米からキャンプまで迎えにゆき、〝一人の経験〟の褒美は、マイアミのディズニーワールド、という大変な飛行時間の割には、小さな大義名分のスケジュールをことなく決め、実行した彼に、〝呆れ返った〟のだけれど、このキャンプで、玉由はすっかり英語に自信をつけ、ネ

イティブと変わらなくなったのだから、男の発想を尊敬しよう。

動き癖のついてしまった彼は、仕事の他にも「イタリアまでちょっとスパゲティを食べに行ってくる」と本当に出かけてゆき、スパゲティを一皿食べ終わると帰ってきたり、アルゼンチンが暑いから「涼みに」と気候が反対のモンブランの麓までスキーに行ってみたり……いつも子供たちを誘っても、「学校があるから」。「ちょっと暇がないから」と断わられ続けていたけれど、この冬休みには、アメリカに来てから始めた〝フランス語が通じるか、パリまで行こう〟という誘いに由野がのり、たちまち二人で出掛けて行った。

外国で生まれてしまった子供たちが、私の範囲にいる間に、正しく使える言葉を四カ国語持たせてあげることが、私の子供たちへの責任だと思っていたから、英語が大丈夫と思えた時から「フランス語を！」と言い続け……パリへ着いた由野からの電話で「どう！　フランス語通じている？」「うん、何も困らないんだよ」「よかったね、学校で習っただけなのにもう通じるなんて！」「欲しいものがあったらお父さんに買っていただいていいのよ」「うん、もう買ってもらっちゃったよ、フランスの雑誌、今読んだんだけど、良くわかる。もう一冊買ってもらっていいかな？」「由野がいなかったら、タクシーも困るし、レストランだって上手に注文出来ないのに、ちっとも有難がらないんだから、お父さんは……」「ヤレヤレ」。フランス語に対しての肩の荷が降りかけた。もっとも、私に関しては何語も重くのし掛かっているままだけれど。「まあいいか！　子供たちの後から付いてゆけば」

飛行機家族の飛び頭、彼は「飛行機に乗っている時が一番安まる」といいます。「電話が掛かってこないから」。でも先日、私が乗った飛行機には公衆電話が付いていて、隣の人がコードレスで地上と話しをしていた。願わくば、飛んでいる飛行機に電話が掛けられるような世になりませんように。

好きですよ冗談混じりに言う声はエッフェル塔のその近くより

五〇

アルゼンチンに辿り着いた当時、もう二十四年も前のこと…その頃は、普通の人がウロチョロと地球を動き回るような風潮ではなかったから、アルゼンチンに移り住んでしまえば、しっかりと長年住み続ける訳で…その長年住み込んだ日系の人たちに逢って話しをした時の驚きは忘れられない。

聞いたことがなかった日本の単語が、たとえばブラジャーが乳バンドと言われていたし、また、彼等の間だけに通用する、スペイン語と日本語の合成語……スペイン語で〝私〟とのことを〝yo（ジョ）〟という。そこで、私たちというところを〝yoたち〟と言うような……こんなのが沢山会話に入っていると、何を言っているのかさっぱり分からなくて、そのうえ、スペイン語の単語が夥しく入り混じり、アルゼンチンの人たちにも、日本人にも、どちらにも通用しない言葉が話されていたことでした。もう一つ、親が日本語だけ、子供がスペイン語だけというコミュニケーションの仕方。

子供たちが生まれると〝私と同じ日本語を話させる〟ということに情熱を注いだ。子供たちと私の会話の中にスペイン語が混じると〝ビンタ〟したし、家の中で子供たち同士がスペイン語で話しても、何メートルもすっ飛ぶほど蹴飛ばしたりした。「アルゼンチンの遊びは、スペイン語じゃないと遊べない」と子供たちは文句を言いましたが……今時、日本語の中に何国語かも知れないカタカナが溢れているのだから、私の方がいけなかったのかなあ……とも思う。

保守的な我が家では、今でも私から知った日本語以外で玉由と由野が私に話し掛けることはない。善し悪しにつけ、現在進行形の言葉というのは、やはり日本に行かないことにはと、せっせと日本語、日本文化への旅を、アルゼンチンより繰り返すことになるのだけれど、日本に着くと、私は俄然おしゃべりになってしまうのに、由野はほとんど一週間、彼女からの言葉が消える。何でも分っているのに彼女は口を開かない。玉由は何事もなく「飛行機の中で、頭の中を日本語のカセットに入れ替えたから」と。そしてやっと由野が普通に日本語を話すようになると、またまたアルゼンチンへ帰ってゆく。

この反対の時も「飛行機の中でスペイン語のカセットに、もうしたからね」という玉由と、アルゼンチンに着いて、アルゼンチンの友たちが我が家に溢れても、まず一週間は由野はものを言わない。「由野が何も言わなくなった」とアルゼンチンの子供たちが心配してくれましたっけ。

こんなのは、児童心理学的に言えば〝要注意〟なのでしょうが、無知で通り抜けた。

日本に住み始め、アメリカンスクールとはいえ、日本にある学校へ通った子供たちは、大きなカ

ルチャーショックを受けたようだ。今まで、祖父母、両親と限られた人と話していたのとは違う日本語があるということに。

ここでは、さすがの玉由も、入れ替えられるカセットが無く、しばらくものが言えなかったそうだ。

そして、私が生涯使ったことがない、人を冒瀆したり罵ったりする言葉を覚え、一人前の日本語を使い、となっていったわけで、それにしても、私の育った環境には悪い言葉は一つも行き交ってはいなかった。私の方が言葉の範囲が狭いのかなあ。スペイン語でも英語でも、私は汚い言葉、悪い言葉を知らない。こんなに年を重ねてきたのに、温室言葉だけの自分がちょっぴり恥ずかしくなってきた。

いつまでも易しき英語の辺りより抜け出せなくて加州（カリフォルニア）に住む

五一

私の生まれ育った家の玄関の方が医院であり、患者さんがいて看護婦さんがいて、薬が作られ、応対するのは私の父医師今泉忠男。

家の奥の方では月に何度かアララギの歌人が集まって歌会が開かれ、歌誌「三河アララギ」が発

行されていた。主幹は私の父御津磯夫。

今泉忠男と御津磯夫の範囲の中で、あのことこのこと、見上げながら私の幼児がありました。

私は父に〝叱られた〟ということがない。もっとも私だけではなく、父の六人の子供をただの一度も叱らず、抱かず、それぞれに合った生き方に導いたということは大変なマジックだと思う。私たち子供に対してだけではなく、母に対しても、声を荒立てたり、苛立ったり、要するに喧嘩みたいなことを見たことがない。私が見たことがないだけではなく、本当に六十年間の母との生活で一度も。今、はじめて、先に逝ってしまったことを怒っているのだろうけれど。

私は、他人に〝あんな良い人〟といわれる旦那様を持ちながら、喧嘩しかすることがないみたいに喧嘩ばかりしている。いつも、きっと私の方が無理を言っているのだろうけれど……。父と母に照らし合わせて、自分は本当に愚かだと思い至る。

父が子供たちを叱らないぶんだけ無関心だったかというと、そうではない。

私が小学校に入学する時、まだ戦後の物資が豊かでない頃のこと故、ランドセルは白いズックだった。そのズックに父が診療の合間合間に、油絵具で百合の花と御津南部小学校の校章を描いてくれた。父の書斎を覗きにいった日々。百合の咲いている頃生まれ、百合ほどではなかったから〝由利〟と名付いた私の心が、父の子供である喜びに弾んだその時を、今もとてもよく覚えている。

小学校時代の夏休みの間中、すぐ上の兄と弟と私の三人を毎朝六時に起こし、海へ連れてゆき、泳ぎを教えてくれたのは父、ボートに乗り、沖の船まで泳いでゆき、波のある日、穏やかな日、夜

中に往診があったのに、そんな様子は全然見せないで、父に平和に見守られた日々がありました。

日本語を読むことも話すことも限られたアルゼンチンでの生活で、子供たちと日本人の日本語でありたいと焦っていた私の戯れの歌擬きを、父が三河アララギに乗せてしまった……。母が会費を払ってしまった……。短歌とは、父や母、父母の友人の先生方が作るものであって、私などが〝とんでもない〟と心から思っていたのに〝一回きりでやめてしまった〟というのではあまりに父母の大切な生き方に申し訳ない。ただそれだけの気持ちで、訳が分からないまま文字を連ねて日本の父母に送ることを続け続けてもう十五年になるかしら。今、短歌ということに関われたことをありがたいと思う。そして、父のように、母のように、命ある限り続けてゆきたいと思う。私のことのみならず、六人の子供たちが各々父母との心に残る数々を重ね重ねて……。

いよいよ父が八十八歳になる。小さかった時仰ぎ見ていたその時と同じように、今も仰ぎ見る距離は変わらないけれど、父との思いをもっともっと重ねたい。

そしてもう一つ、私たちの父というだけの存在ではなく、今泉姓の百人余に及んでいった一族の長として、今生まれたばかりの一族の赤ちゃんに至るまでの心の支えとなって、いつまでも、いつまでも。

花びらや花房のことも思いつつ桜の国へ向けて飛びゆく

五二

日本へ帰るとなると、いつも一家で揉めることは、〝何処に泊まるか〟ということ。田園調布の子供たちの祖母の所、私の兄弟の家。友人たちだって皆〝おいで〟と言ってくれている。だけど、日本のあわただしい生活を知っていると、とてもその中に割り込んで行くなんてそんな迷惑なこと出来ない。その都度、滞在目的に一番合ったホテルにすることが合理的で、私は一人の時などは強行に実行してしまうけれど、一家揃っての日本へとなると、そうも言っていられないことにもなり……私たちって「もう日本へは〝帰る〟という資格なんかなくなってしまったんだ」と落ち込み、考え込むわけですが……たちまち日本談義にすりかわり、「こんな風に考えた方が絶対合理的だ、ということでも日本では、それじゃいけないといっぱいあるのね」「もう上手に合わせられない所も出来てしまった」「それでも日本は大発展したんだから、日本風が正しいんじゃないの」「こんなに日本人中心の考えしてて、よくまあ世界一になれたものね」「つまるところ、隣り近所に負けまいとするエネルギーが盛り上がって国の力になったんだ」「日本人より働かないで勉強しないで、それで楽しく立派な生活している外国をあまり沢山見たから、日本の中で、よいしょ、よいしょすることの意味を考えてしまうよ」「日本人に生まれたら、日本に住んで、外国の一番おもしろい所だけを旅行して……なんてのが一番幸せなんじゃないかな」「日本に住んでいると忘れられる日本人ということも、外国に住むと常に〝日本人の身のほど〟がこびりついてしまって」「だけど、日本へ帰るってこ

とはいいなあ」「そのことのためだけに外国に住んでいるみたいなところあるね」などなど、勝手気儘に言い合いながら日本に到着。

せっかく日本に来たら、日本に貪欲。町に出かけ、田舎にも行き、友人たちに逢い、何でも見、食べ、日本語も心ゆくまで話す。忙しい日本の人たちに負けないほど、じっとしてはいない。

子供たちの父親由比古は〝日本へ行く〟といっても、このところ台湾での仕事の方が多いけれど、東京では大学、高校時代の山登り仲間たちと山小屋を作る相談、友人が入院している、先輩が還暦、同期の友が離婚した……とノーマルな日本に交じっている。

玉由は、現在、ハリウッド辺りがトレーニング、習い事などの場だから、従って友人も〝日本へモデルの仕事に行っていた〟〝これから行く〟というのが多く、今回の訪日時に〝モデルとして日本へ売り込みたい〟友人の通訳など手伝っていた。そんな訳で、常には行き当らない日本の世界に名を轟かせる部分の〝偉い人〟にも逢えたりして、良きにつけ悪しきにつけ玉由にとって〝新しい日本〟との出逢いに興奮していた。

少し前まで、こうもハチャメチャに育てられたことを迷惑がっていたけれど、今回つくづく妙に育てられたことを喜んでいた。それから先の人生、うまくやってゆける、の感触があったみたい。そして「お母さんもよくやったねえ」と褒めてくれたんだけれど、「私はまだ何もやってない。始めてもいない。そろそろ自分の人生、楽しくしてやせねば」と思っているところ。

由野は、学校友だち、体操友だちとセッセと逢い、私に押しつけられたのではない、玉由の真似

でもない、自分の生き方を探しているみたい。
　我が家の四人が東京で四方に散ると、一番早く宿に帰るのが由比古、その次の由野、次は酔っ払いの私。終電か送られてか、とにかく妙な時間に帰り着くのが玉由。

ＬＡの景色にこのごろほつとするジャスミン香る私の家

五三

　急にアルゼンチンまで行く用事が出来た。「明日行ってくる」と宣言すると、飛行機の予約、美容院の予約取り消し、デート断わり、絵描きさぼり……とかなり慌ただしく受話器を取った。いつも用意する「気軽な読み物」が手元になかったから、ロサンゼルスから二日間かかってアルゼンチンに着くまで、「マラソン短歌」を思いついた。歌といえるかどうか。とにかくとにかく……。

○飛行機に乗るたび気弱く思うなり今が接点私の生死
○真昼間のフライトなればアメリカの砂漠見てゆくマイアミまでを
○母と姉との終りてしまいし世の中を続けています飛行機に乗りつつ
○晴天も雲に隠るる地域もあり本物地球を見下ろしながら
○出来たてのやわやわ白き雲の中一時間ほどただ白く飛ぶ

○無事に無事に水平飛行に移りたりドライシェリーに肩ほぐしつつ
○人の住む気配の無かりし沙の地も道ひとすじは続く続く
○安全を確かめ我が家を後にしてもう惑わない帰り着くまで
○地図持てば名前ありなん山中の小さき村の上空にいる
○乾燥の機内に備え常の日の倍のクリームつけて私
○穏やかな空を飛びつつ戦いの映画見ているおしきせなれば
○ガムを噛みペプシコーラをがぶ飲めるアメリカ人隣にいたり
○星々の光り始める少し前空も暗い地球も暗い
○砂漠色に慣れし我が目に緑々ブラジルの山々は濃き濃き緑
○濃緑のブラジルを見下ろして飛ぶ時は出来たて空気の中にいるごと
○絵葉書と同じ景色の見えているリオデジャネイロは低空飛行
○ブラジルの朝の太陽我が窓にきたりて小さき虹作りゆく
○イパネマもコパカバーナも見下ろしてその砂サラリ踏みしことあり
○スペイン語ポルトガル語と英語にて飛行アナウンスサンパウロまで
○砂漠にも緑深き山中も地球に道を作るよ人間
○あちこちに代赭色の垣間見えてブラジルの土に深緑萌ゆる
○原産の国にきたれば背高くてハカランダの木陰大きい大きい

○ノボタンの背高き梢に花ありてノボタン色のブラジルにいる
○オルガンを作る工場も我が家業ブラジルでの時背筋のばして
○ブラジルのワインたちまち飲み干しぬもう一つの自宅サンパウロにて
○ブラジルを赤く明く紅くする巨大夕焼けに私も赤い
○ひょうきんなトックリ椰子も無造作に道端にありサンパウロの街
○アマゾンの闇を見つめて飛行中見えない物に心通わせ
○アマゾンの深き闇を飛びながらチョコレート食むコーヒーを飲む
○緊急の着陸といえどアマゾンの木々の見えない闇恨みつつ
○ブラジルのワイン造りの本なども旅に加わるアルゼンチンまで
○私の足下にワンと感じられ我が飛行機に犬も乗るらし
○どれ程の電気消費の量かしら地球の夜を眺めつつ飛行
○LAマイアミリオサンパウロ緊急着陸プエルトアレグレブェノスアイレス
○ショボショボと目許疲れに比例して目的の地に近づいている
○疲れゆく目許着ている洋服に皺増え増えて目的地まで
○窓側を選び坐りて昼も夜もこよなく地球を見つめていたり
○何国の何時何刻か失えり時差むつかしい身体と時計に
○髪直し常の私に戻るべし関わり長きアルゼンチンに着くため

○夥しいブェノスアイレスの灯の中に私の家の灯を加う

空を飛ぶ翼を持たぬに飛び出す角度になれたり私の身体

五四

「世の中変わった」。いつの世も、何処ででも誰でもが口にする言葉だけれど、今度アルゼンチンへ行ってみて「変わってしまった」。

街の角々にあって華やぎを振り撒いていた花屋が姿を消してしまい、花を愛し、花を飾り、花束を贈り合った人たちは何処へ行ってしまったの？　そして、その花卉（かき）生産の人々は？　アルゼンチンの花卉は、日系の人たちが支えていました。

その昔、日本国の口減らし政策の口車に乗ってしまってアルゼンチンへ移り住んだ人たちは、あまりにも遠い国へ着いてしまった現実と、飾られた言葉との大きなギャップの絶望感に耐え、長い年月忍そのものとなり、やっとやっと、ブェノスアイレスの街角に花を咲かせたのに、アルゼンチン国の政策は、豊かに食み、豊かに花を飾り、豊かに他国人を受け入れていた普通の人々の経済を痛めつけ、花どころではない生活へと追いやった。

〝この先ますます悪くなるのではないか〟の不安感をしっかりインプットした、新しい国への希

望で世界各国からアルゼンチンへやってきた人たちの子孫は、今度は逆に若い世代を母国に送り返している。

日系の人々も、口減らしに追われたことは今は昔。労働力を必要とする現在の日本の現状と算盤勘定で、若い一家の働ける者をどんどん日本へ出稼ぎに出し、残るアルゼンチンの土にまみれて年を経た老人たち。若者が居なくなった、耕されない畑の中の一軒家で、アルゼンチンの経済事情に、悪化した治安に脅やかされる。

私がアルゼンチンに着いた日、〝アルゼンチンの若者グループの強盗が、日本人老夫婦を殺した〟というニュースが流れていた。

同じように日本国を離れ、未知の国でゼロから生きてた者同士の感情に、私は大きく揺れた。誰にももってゆかれないこの怒りとも哀しみとも……。

すべて沈んでいっているのなら納得が行くけれど、反面素晴らしいショッピングモールが幾つも出来、エレガントに着た人たちが自国の〝アウストラル〟というお金の単位ではなく〝アメリカドル〟で買物をする。中産階級の多かったアルゼンチンは、今や有産と無産にますます分けられてゆく。

我が家の会社に関しては〝子供たちの生まれた国〟〝私たち人生初めての仕事〟というセンチメンタルに支えられ、幾多の競争会社が出来ては潰れてゆくのを傍目に健在ではありますが、「アルゼンチンの会社があってうれしい」と玉由もが気にするほど、この会社を維持するのに〝工夫〟が要り

ました。そして〝工夫〟を続けてゆくでしょう。

ブラジルに着くと、やはり勤勉で技術を持った日系の人々が〝ブラジルの経済事情に耐えかねて、日本へ出稼ぎに行ってしまう〟と新聞にも、人々の会話にも持ち切りでした。

ブラジルは、アルゼンチンより日系人がずっとずっと多いし、その広がりは国を挙げての存在で、野菜、果物、花卉栽培に従事していた日系人が耕作地を放棄し、日本の円の力に吸い寄せられてゆく。そして、サンパウロ市民の食糧供給は日々狭められて……とか。

サンパウロからロサンゼルスへ帰る私が乗った飛行機は、終着が成田でしたから、日本へ働きに行く人たちがぎっしりでした。警備員、工場、建設関係。女の人は、病院や養老院の付添い。みんな各々自分のことを考えて、一番良い方法をとっているのだから、私などとやかく思い惑うのはやめよう。

アボガドの小さな実のなる木の下にて大地に立つを喜びており

五五

私の歌集『地球にて』が、引越ししたばかりのサンタモニカの家へ航空便で届いた。

赤い〝ハナギレ〟も可愛らしく、土屋文明先生や御津磯夫、今泉米子……の歌集を作ってこられ

た石川書房の石川靖雄氏が、あたたかく見守りつつの清々しい本。

出来上ってきたものを喜んで、一人シャンパンを飲んだ。そして、その華やぎが過ぎると、ノンフィクションの自分を活字にしてしまった〝不敵さ〟にちょっぴり減入ってみたり。

日本語を使わない国で生まれてしまった私の二人の子供が、いつか私の教えた日本語で私の心の文字を読んでくれたら……そんなことが動機の歌集だったけれど、四カ国語を使いわけ、世界の何処をも遠いとも、困るとも思わずに行ってしまうようになった子供が、時々は私を振り返ってくれたら……なんてことに目的が変更されそうな此の頃。

スイス留学中の由野に送った一冊は、「寮の同じ部屋の日本人の友だちが、お母さんの本読んで、ひっくり返って笑ってる。どうしても一冊欲しいって言ってるから、もう一冊送って！　由野はもう読んじゃったから次の本をはやく作ってね」という報告。

まず、高校生が、わけ知らぬ、価値が定まったわけでもない人の短歌の本を読もうとするということが私には不思議な気がしているうえに、〝マンガ〟でもあるまいに笑いころげるとは！　面白い反応。若い人って計り知れない。

アルゼンチンのセリーナからは、「読めないけれど、何度も何度も開いては見ていますよ。私の本棚の一番大切な一冊」と手紙が届いた。アルゼンチンに辿り着き、セリーナと知り合っていった日々のことが、私の身体をかけ巡る。

何事からもあまりに遠く、ポツンと一人、涙ばかり流していたけれど、涙は勝手に流れるにまか

せ、「もう親の光は届かないんだから、仕事ということをしなくてはいけない」と気付き、私の出来ることと言えば図案を描くことだけ。自分の図案が、どんな仕事に結び付いてゆくのかわからないまま、自作を抱えて幾つかの画廊へ行った。その中の一つにセリーナの画廊があり、「気に入ったから個展をする」とセリーナがその場で決定し、たちまち実行に移されてゆく中、それでも「当人としては〝こうありたい〟」という意見を言っただけなのに、大変な名家、知る限りの人を支配してきた女王のようなセリーナが、「自分に逆らった日本人がいた」と変なことで、彼女の心にコトンと私がおっこちた。

もう一人のアルゼンチンの友は、日本語を習い始めてしまった。私の本を読んでくださる為に、ですって。私の方が遅れている。自分の歌といえども、スペイン語に訳そうという発想はなかったし、また訳せないもの。

アルゼンチンに着いてから、初めの歌が出来るまでに十年のブランクがあることを指摘してくださった日本からの手紙も……。

ゼロからの出発。地上に花が咲くことも夜空に星がでることも、みんな忘れ果てて、ひたすら基本的人間の生活に辿りつくための戦いの日々。そっとオブラートにでも包んでおきたい十年間。

「さっき開いた所に『安々と虹を幾つも作る土地カリフォルニアで虹を追いつつ』っていうのあったけど、これいいね、ずっとずっと虹を追っていようね！　そのうちにみんな読むから」とは玉由。

こんなことあんなこと思うためにとてサンタモニカの渚に居たり

五六

玉由「もう、これ以上、お母さんの時間もお金を使えない。どこか遠くへ行って、自分で働きながら何とか生きてゆくから、見捨てて」

と、目に涙をためて。

私「どうして急に出てゆきたくなったの」

玉由「今まで、〝お母さんに無理やりスケートをさせられている〟ということで、玉由の思いつく限りの悪や、抵抗をして困らせようとした。お母さんが作ってくれたチャンスは、みんなみんな玉由が打ち壊してきた。だけど、気が付いたんだ。誰に何と言われなくとも玉由はスケートが好きだ。才能もあると思う。スケートが無くては生きてゆかれない気がするほど。気付いてから、本当に必死で取り組んできた。だけど、何かが嚙み合わないんだよ。良い結果に結びつかない……。このまんま、お母さんを喜ばせるところまで行き着けないかもしれない。それを思うとたまらないんだ。お母さんの時間を台無しにしてしまったことが辛いんだ。こんなにも大きな犠牲を払わせて……」

私「私は、貴女といた時間中、これ以上はないいとおしみの心を知り、無抵抗から抵抗へ、そし

てやさしさが残り……本当の人間へと育つさま、貴女のおかげで、私に必要な心をいっぱい自分の物にした。感謝ばかりで、何が犠牲なものですか。結果より、取り組んでいる貴女を見ているのは嬉しい。考え方、環境、表現方法、人それぞれに違うけれど、地球始まって以来の親が子供に対して出来る限りのことをしたい、する、ということは生物の法則なのだから。動物だって、魚、物思いそうもない植物も煎じ詰めれば……だから〝親がこんなに〟と負担に思うことはないのよ。貴女が中途で私を拒否して出ていってしまえば、そのことの方がお互いどれだけ傷つくことか。どこまで逃げていっても、私と貴女の親と子という関係はなくならないんだから。アルゼンチンで、辞書を持ち、一人で病院へ行き、東洋人を初めて診るというお医者さんに、生まれてくる私の赤ちゃんには蒙古斑のあることを説明し(女の子だったらすぐ耳に穴を明ける習慣に)、私の赤ちゃんに限っては耳に穴を開けないで！　と頼み……そして小さな小さな貴女を受け取った時、本当にびっくりした。あまりの小ささに。〝守ってあげなくては、守ってあげなくては〟……あの時の初心が今に続いて。外国で生まれたことをハンディにさせないように、私の経験を総動員し、その時々考えられる最善を選んで貴女を育ててきた。だけど、私の独り善がりは、世の中の普通の常識じゃなかったかもしれないことと、貴女の才能を頂点にまで導いてあげられなかった私の未熟さは、本当にごめんなさい。こんなに大きくなって、もう私が指図なんかする次元じゃなくなった。今、玉由に何が必要か、自分でしっかり考えられるんだから、自信を持って、思いどおりに生きてゆきなさい。ちょっと真面目に親子しすぎちゃったね。お互い解放しあって、そして一番近い人間同士という関係

を楽しもうよ。スケートも楽しまなくちゃあ」

玉由「玉由は、この家に居てもいいの？　スケートを続けててもいいの？」

私「もちろん今はね。だけど、学校を終えたら誰に頼るということなしに、自分の仕事ということをして、自分の力で自分のしたいことを手に入れるのよ。貴女が考え、貴女が作る貴女の未来が楽しみだわ。私の未来だって、二人の人間を育ててきた経験をしっかり利用して、私自身にとって魅力のあるものにしてゆくわ」

玉由「話してよかった。軽くなれた。これからも話すことがいっぱいでてくるね、きっと」

お母さんのハッピーを探せと言いおきて自らの事に忙しき玉由

五七

玉由「日本でインターナショナルスクールに行ってた時、イラクの友だちがいて、イラクという国を知ったよ。仲良しだったから、イラクにも彼と同じような良い人がいっぱい居るんだと思いつくよ。彼、どうしているかな！　玉由と同じだから丁度兵隊さんの年だ。どこか戦争じゃない所にいてくれるとよいんだけど」

玉由「アメリカの兵隊さんのインタビューを聞いていると、『なるべく沢山のイラク人を殺したい』

って言っているよ。どうして人を殺す、なんてことが平気で思えるの！　戦争って人間を変にしちゃうんだね」

アメリカの学校に通ったのだから、玉由の知ってる子たちが沢山兵隊さんになっているし、由野のボーイフレンドも本当に良い子。アニメが好きで、〝兵役が終わったらディズニープロに入りたい〟などとアニメ入りの手紙が来てたのを由野が見せてくれたっけ。

あの子たちに〝人を殺せ〟だなんて……。〝殺される〟かも……。

玉由「今、アメリカでは、兵役のがれを作る弁護士が一番はやっているんだよ」

いよいよ戦闘が始まるからと、輸血用の血液を沢山戦場へ送る映像を見ていて、堪らなくなった。みんなみんな遣り切れない映像ばかりだけれど、見ないで逃げているのも卑怯な気がする。無力なりに心を痛めていなければいけない。献血くらいは出来ると思ったのに〝体重50キロ以下はだめ〟と断わられた。

男とは、生み育てるということに対して大きな実感がなく、人を傷つけ、殺したり出来るのかな、と思ってみたけれど、サッチャーさんもフォークランド戦争を始めて、沢山の人が死んだ。男、女に関係なく、偉くなると、人の痛みより優先した思惑……。

作り過ぎてしまった戦争用品を消費しなければならないとか、国民の不満の鋒先を変える目的もあるかもしれない。面目、威信なども加わるだろうし、一人一人の人間に各々の心があることなんかに構っちゃいられないんだ。

いつの世の、どんな戦いも、一番係わりのない辺りの人たちが苦しめられる。この辺が嫌い。戦いをしたい張本人同士で決闘なり、ジャンケンなりして争えばいいのに。それがだめなら、開戦と同時に、お互いの戦争準備の手の内を机上に広げ、今風ならコンピューターにインプットして、テレビゲームみたいに相殺してゆき、勝った方が勝、負けは負け。これだけすべての面で進んだ世になり、今さら国を壊してみなくても、人を殺してみなくても、地球を汚しに汚さなくても……コンピューターが上手に終結させてくれる。

コンピューターの中だけで戦いをするように日本が役に立つべきだった。得意な平和憲法とお金で平和を買えばよかったのに。遅れに遅れて、どうしようもない戦いになってしまった戦争を少し買うなんて……。

それから、早急にガソリンというエネルギーに頼ることをやめようとしなければいけない。多少能率が悪く、進歩しない世の中になったからといって、今以上に急速に変わってゆく地球を喜ぶ人なんて居ないと思う。運んで零し、使って空気を汚し……あげくにお金に絡んで気が狂う。石油が無用の長物となれば争いは減るかも……。

戦争に使われるべくしたエネルギーは、太陽なり、各国の身辺でまかなえるような新しいエネルギーの開発とか、砂漠の緑化、地球を汚す為にだけ生まれてくるのではなく、地を楽しみつつ生きるべく、世界人類の教育強化に向けるとか……。

私がこんな戯言をしてみたところでしようがないことと知りつつ、戦争という重さに耐えかねて。

はるかなる地球の丸み見ゆるまで巨き夕焼け椰子の木を添えて

五八

「結婚式には、きっと行くからね」と台湾事務所の青年と約束していた。
不本意であるとはいえ、世は戦争中だったから「約束果たせない」と半ばあきらめていたのに……
「終結」というが響いてきた。
「じゃ行ける」「行こう」と決めたのが結婚式の二日前。すぐ台湾のビザを取りに在ロサンゼルス中華民国領事館へ行く。まだ移動をひかえている人が多い時期だったから、飛行機の席もなんなく予約出来た。
「中国式結婚式って、どんなだろう」「参列する人たちの衣服は?」「台北の気候は?」
中国語で「おめでとう」くらい言えるように〝中国語入門〟を携え、たちまち飛行機の中。「まさか、我が事務所の青年が結婚するからと台湾中が花火をあげる訳ではないでしょう」とは思いつつ、幾多はじける花火を見下ろし、花火と同じ位置となり、そして台北に着陸。
不思議な予期せぬ出来事に心踊らせつつ、中国のお正月に続くランタン祭りという日なのでした。
台湾式のお嫁さんを見たかったけれど、時代はウェディングドレス。お色直しのドレスの着替え

も三回ほど。でも台湾で一番親しい人の弾む様子に心がなごむ。台湾の人たちばかり。台湾語の中に、日本人は東京事務所の青年と私だけ。日本語が話せる台湾の人に助けられ、次から次から十何種類も出てくる中国料理の説明を聞き、質問をし……。

だいたい私は妙な質問をするらしい。「私の質問、わかってもらえてない！」という辺りの返事をもらいつつ、想像逞しく、日本との共通の喜びの表現にふれたり、初めて見、初めて味わった幾多の味は、とてもうれしいことだったけれど、何にも増して大きかったことは、「自分たちのために、わざわざアメリカから飛行機に十二時間も乗って来てくれた！」と大感激してくれたことだった。「良い仕事をするよ。仕事以外のことでも由利さんの為なら何でも出来る」って。そして感激ついでに、新婚旅行に私を連れて行くと言いだし、お断りするのに骨が折れた。

うれしさついでに飛行機を乗り継ぎ、スペイン事務所の営業担当の青年の結婚式にとマドリッドに着いた。いくら飛行機に乗り慣れているとはいえ、着いた日の夜の結婚式は、立っていれば斜めになっていってしまい。坐ればコトンと眠ってしまいそうだったけれど、次の日の日付けになってゆくスペイン式時間帯をのりきった。

教会でのセレモニーは、我が事務所の全員がタキシードでとても可愛らしい。主役の青年も、スペイン中で一番美形だと私は思う。こんなこと関係なかったかな。

教会の後は、スペイン式カナッペのカクテル、テーブルに着いてのディナーと続いたけれど、ウェディングドレスを着替えるということはなかった。

初めは、「何故ここに日本人が？」との視線があちこちからだったけれど、忽ち新しい人たちとも知り合ってゆき、スペイン語の生活の中にもう二十五年も過ごしていることをあらためて思う。新しい国に仕事を始め、信頼出来るスタッフが出来、世界に争いのない仲間が増えてゆくのがうれしい。

以前、結婚式に出席したブラジルの青年の子供たちの成長してゆく足型がいつも私のハンドバッグに入っている。靴を買うため。アルゼンチンの幼子には、ディズニー用品がいいかな。各国事務所の女の子たちには……。我が子等にやっと要らなくなった子供用品や、自分には買わない品々もスーツケースに詰め、人種を越えた人間と人間の触れ合いに、私は飛行機に乗り続けてゆくでしょう。

水平線地平線また雲海線みつめて私の日々のなりたつ

五九

小学校は、アルゼンチンでスペイン語を。中学は、アルゼンチン生まれといっても、日本人の血なのだから、私と同じ心も言葉も生活も、と日本で。高校は、世界語英語をアメリカで。大学は、ヨーロッパも知るべく、ヨーロッパのいずれかの国で。

私の気まぐれ子育てのパイオニアとして、由野が素直にスイスを選んだ。

生まれた時から、世界をあちこち連れ歩き、言葉も四カ国語が自由になっていた由野に安心しきって、新しい学校へ行く由野を送ってはゆかなかった。

「スイスは、安全で小さな国だから、飛行場からタクシーに乗って、学校の名前を言えば連れていってくれるよ」と私が言いだしたら「もうそうするしか仕方がない」と悟っている由野は、自分のスーツケースを満たし、一人で飛行機に乗っていった。

「着いたら、どんな所か知らせてね」とLAで送った私に、「世界中から生徒が集まってきてて、いっぱい友だち出来た」「英語がうまくない日本の子たちを助けるのに、ジャパニーズイングリッシュにしてあげると皆意味がわかるんだよ」「楽しくて、楽しくて」

一人で考え、一人で実行するという、生まれて初めて自分自身になれた由野の潑溂とした声が、週に一度はきちんと電話されてきた。

「由野の居る所を見に来て！」「スイスを案内してあげる」「スイスは物価高で、自分では買えないから、由野の洋服買いに来て」「そのうちにはね」といいつつ、なかなかおみこしあがらなかったけれど、スペイン事務所まで行けば、スイスは近い。

スペインから、由野に「今から行くから」と電話したら、あきらめきっていた由野が、「まさか！」とびっくりした。そのびっくりしようにに、こちらもびっくりした。「あんなに変テコリンに育てても、やっぱり普通に親みたいなこともしてほしいんだ」と。

スイスに降り立つと、他の花々に先がけて連翹が今日を盛りとあざやかに黄色かった。心憎いまでに、きれいに磨きあげられた風景の中に、「法律でもあるのかしら」と思われるほど、どの家々の庭にも連翹が咲き、連翹の道を通って、春風に波立つレマン湖畔、由野の学校に着いた。

イースターの二週間にわたる休日が始まっており、ほとんどの寮生が飛行機に乗って自国へ帰ってゆき、飛行機待ちの生徒がほんの少し顔をのぞかせるだけ。寮に「誰某が、どの飛行機で、何国へ帰る」と掲示してあったのがユニークだった。

由野がちょっとテレつつ現われ、彼女の部屋へ案内してくれた。私には決して見せないような一面も、彼女の部屋から感じられ、大きくなったんだ。

「お母さん、これ何の木だろう。少しずつ芽が大きくなってくるのを楽しみにしているんだけれど……」「ユリの木みたい」

由野の窓の手がとどく所に。

小さかった玉由が、由野が、人種での異和感に涙を流したアルゼンチンでの時。無力で弱かった由野に、体操のアルゼンチンチャンピオンを毟り取ったみたいなこと。日本の子供たちから外人扱いされて、日本が嫌になってしまったり。「アメリカで、やっと自分の居場所を見つけたの」としみじみ語られたこと……。

私の気まぐれ子育てが、こんなに子供たちに物思わせ……その責任感で私にも重かった日々。

「由野、よかったね。こんなに大きく世界に育って……」。これからだって、いろいろあるはずだ

けれど「もう私より強くなった子供たちに委せることにするね」

さりげなくスイスの国を離れゆく由野と私と振り返るなく

六〇

二十五年も前のことになってしまった。何知ることも、何知ろうとすることもなく、ひたすら単純に明るく、アルゼンチンへ移り住むということをやってのけた。

移動する四十五日間の船中の未知への事始めも、まだ不安という言葉を知らなかった。辿り着いた国で、一緒に船旅をしてきた大した引越し荷物を持って、納まるべく家の無いことを知った。私の〝日本語だけ〟を、誰も理解してくれないということも知った。そして、矢継ぎ早に、日本から一番遠い国で、ゼロから出発するのに必要なことが〝わんさかわんさか〟私に押し寄せてくることをも。

〝勝手に日本から出てきたんだから〟〝自分が仕出かしたことへの後始末をする〟という常識だけは持ち合せていたのが情けない。

〝しなければならないことをする〟といういたって簡単なことも、〝しなければならないことが出来ない〟。ああしても、こうしても、出来はしない苛立たしさ、絶望……それでも、しなければと

思う義務感と……そのうえ、どばっと重い、ひとりぼっち感。

「コンデンサという物を作らなければいけない」という事実が出現した時、その物に対する知識……何に使うものであるか、必要性、将来性……とにかく、いつもの無知に輪をかけた無知のまま、かろうじて存在したノウハウだけを頼りに、それを作った。販売態勢を整えていった。

本を読み、日本へ帰って実習もし、純度を要する製品の、純度を守った一人前のコンデンサ作りとなってゆくのを助けてくれた現地のスタッフたちがいた。独占企業の時代、数社競合の時も、アルゼンチンの何社と上位に数えられる輸出入製造の時期もあった。

南米の、日々定まらない政策に作用され、〝国の方針じゃどうしようもない〟と製造業が痛めつけられた時は多く、一介の電気部品の運命は、いたって不安定。関連製品との併用、アルゼンチン以外の国への進出、と工夫を重ね、健気に続けてきたつもりも、他国よりの援助でもって、かろうじて維持することとなる。それでも、私たち人生初めての仕事、私の二人の子供が生まれた国、何とか明るく思いたい。切ないばかりのセンチメンタルだけの存在となってしまった会社。今、続いている少しのことを除いて〝新しく何かを〟という勇気を、アルゼンチン国は与えてはくれない。気丈に思ってみても、もう身に余る。

子供たちの教育の場を、アルゼンチンだけにしたくなかった私の独り善がりで、子供たちを連れてアルゼンチン国を出て来てしまって、そして、人にまかせて不安定な会社を続けてゆけるわけがない。会社に対する反省は、いくらでもあるけれど、私の意のままに育った子供たちを思うと、〝こ

れで良かったのだ〟と思う。

こんな形で、私の二十五年間は終わってしまったけれど、子供たちのこれからは無限大。私も、二十五年間のアルゼンチンとの関わり合いを経験した一人の人間として、自分自身を生きる時がやってきたのだと思う。

アルゼンチンを始めて以来のスタッフたちに〝さようなら〟をした。「ごめんなさい。私の至らなさを。勝手すぎることだけれど、これからは、雇用関係ではなく、アルゼンチンで出逢えた友人として付き合ってください」と。

アルゼンチンに着いた時、自分の意志に反して、どうしようもなかった未知への涙が止めどなかったけれど、終わりにも、限りない涙が流れる。まだ止まらない。

ただ白き雲海の上を飛びをりてわが身を晒す白の反射に

あとがきにかえて

三河湾の一番奥まった、やさしい海辺の開業医の家の末の方の位置に、私は生まれた。自分の存在を身のほどということからはみださないように気遣う、おとなしい子供として、父母のもとから通える範囲の高校までを終えた。

勘によってあるいは自然に知ってしまっていること以外の規則どおりの勉強は好きではなかったから、一人勝手の美術を選んだ。三河から東京へ移り住む道中、心を決めた。

「親やまわり好みではなく、自分好みの人間に変身する」と。

「女子美」では、テキスタイルデザイン、織物、染物……と気に入って過ごした。学生の日々はあまりに満ち足りていたから、もう何もかも知ってしまった気がして、今度は、外国へ行ってみよう、と思いたった。

たまたま出逢った人が、「アルゼンチンへ行こう」というから、「まあ、いいか」くらいの気持ちで、たちまちアルゼンチン住いとなってしまう。

まったく、日本から一番遠い新しい国で、新しい自分を始めるのには、吃驚(きっきょう)して、泣いてばかりいたけれど、もう一方の私は、そのひたすら感がとても気に入っていた。

アルゼンチンで始めた家業・製造業を、私にしてみると命がけで手伝っていたつもりの時が過ぎた。

自分は、外国へ行って、その国の外国人の立場で暮らしていたのに、私の二人の子供たちは、アルゼンチンにとって外国人ではなく、アルゼンチン人であるということに、また吃驚してしまった。それならばと、アルゼンチンの何らかの役に立てるように……考えられるすべてを尽して、子供たちと付き合った。そして、その子供たちは、結果より先にミニ独立していった。

今までは、家業、子供たちと紛れてはいたけれど、今、自分にかえってみると、結婚ということは、一人の人間であることの前に、属するということで、私は、どう考えても属してはいられない性格を持ち合わせてしまっている。

長く、外国を飛び回る生活をしてみて、つくづく、本当の年相応の日本人にならなければ、と思い至る。

自分の力で、地球で生きてゆかれるようにと、今、切に願っている。

一九九二年十月

掲歌一覧

日本を離れゆく時いつまでも見えていたよ淡紫の私の母
生まれしは三河の海辺太平洋ハワイまで来ぬまだ太平洋
太平洋に白く引きゆく航跡に矢車草を投げ入れし日よ
パナマ運河を越ゆる時刻は闇の中何も見えずに何か探して
パナマにてわが前をゆきし大とかげいついつまでもその顔忘れず
土の上歩みていたり赤々きハイビスカスのキュラソー島
肌の色は夕方に同化してゆけり目ばかり歯ばかりカラカスの町
見ゆる物皆実物にしてジャングルの湿度の中にしばし立つ
今来たり今いでてゆくサントスの海辺の石ころ拾わぬままに
羽根枕を抱えておりぬしつかりと未知なる国に着くという時
明けてゆく朝の光に未知の音異国の音のまつ只中に
安らかに眠る所のなきままに夕暮れてくる今日もまた
はじめての物あり味あり言葉ありひたすらひたすらアルゼンチンに
汗ばみて体温伝えし銅貨にてアルゼンチンのバスに乗りたり
肉食の歴史の中へ割り込みぬ岩塩もちて焼かるる獣ら
戸惑いを幾つも重ねてアルゼンチン今日は点すよ自分の明りを
何もかももう無いという安心を求め来たりぬアルゼンチンまで
日本より一番遠い国に来て思いていたり日本のこと
手を足を話すことすらおどおどと生きて知りゆく自らのこと

石ころは方をたがえてころがれりアルゼンチンのこの石畳道
立つているほほえんでいる涙の顔ショーウインドーに映つていたり
ようやくにスペイン語の国に住み始め教えられをり目玉焼次第
地の色を淡紫に変えているハカランダ並木をひとりでゆきぬ
蓮華色母子草色菫色草汁絞りて並べし日ありき
ティパの実の黒きを踏んでゆきゆきぬラプラタ河の水寄るところ
すき焼の湯気の向うに花咲くよアルゼンチンの紅のバラ
私の命を保つ幾日か日本人形売られてゆけり
かそかなる気配を肩に感じたりハカランダは散る私に散る
夜の星朝にも星あり星尽し俯き加減の私の日に
太陽を吸いたるトマトのまる噛り塩の砂漠の塩ふりかけて
緑濃き川根のお茶を飲む時に南米に住むを思いいだせり
日本より移し植えたる紅梅の花の散りくるところに坐る
視野広くなりたる心地しておりぬアルゼンチンより日本思いて
わが話すスペイン語少きにありありと見破られたり外国人と
梅檀の木の下に梅檀の香りあり梅檀の木影に長くいたり
地平線まで続く平らな国にいて白詰草を描きていたり
ユーカリの落葉焚きいる煙の中資材不足のこと思いつつ歩む
海を来たりし自動機の始動する花ある枝のユーカリ揺れて
手に受くる如く数多の星の中を翔びてゆくなりアンデスあたり
強烈に肌を刺しくる光に慣れて今日は東京の冬の淡き日

久し振りの人を待つ間の短かかりひと花残る山茶花の下に
切々と心に重きことありて真白き雪に足跡続く
芽ぶきいまだ柳の枝のゆれゆれて帰る日来たり帰りてゆかむ
髪の色金茶白赤色混る中黒き光りて吾が子は跳ねる
アンデスの麓に来たりて足元の雪が舞うのみにみとれておりぬ
同じ想い十二度重ねて白々とカラーの花は今年も咲きぬ
友のゆくニカラグワという国知りたくて地理の本地球儀の埃を払う
アマゾンの樹海の一枝削られてわがスープ飲む匙となりたり
日の丸と生まれしアルゼンチンの旗振りて二つの国に育ちゆく吾が子
日本より伝わりきたる映像に紙吹雪舞い乱るアルゼンチンの街
その昔狩猟に使いしという石鏃並べ置くなり私の枕もと
肉を食うナイフで削つた木のペンにて線を描きたり裸婦が描けたり
洗足の池に緑の映る日を思い描きつつ立ち帰りゆく
日本とアルゼンチンとを棲み分けて仰々しきことは嫌いになりぬ
日本へは行くアルゼンチンへは帰るよと言いつつ寝たり私の幼子
鳩のみを追いたる視野の育ちゆき玉由は見るアコンカグワを
今日よりも寂しさ深き日は無しと過ぎし日のこと思い出づる日
日本より一番遠き国に住みてもつとも贅沢は日本の真似
地の色を淡紫に変えているハカランダの並木を通りてゆきぬ
一匹の犬の走りてゆくことも麗しきかなセーヌ湖畔は
スペイン語の会話さまざまの人らの中私は一人日本語思考

朝夕に眺むる池に足を洗いし日蓮上人の二十八代目のわが子傾きし光の中を降るごとし淡き花弁を追いかけ追いかけ暮れてゆく空にアルゼンチンの星を探す私の幼子日本に来て良き風の通りゆくのを喜びてアルゼンチンを思うしばらく新しき枝先に蕾まだ幼しアメリカデイゴはセイボなのです霞草の花にあたりのおぼおぼし眺めていたりただそれだけのこと常に描くモデルの肌の光りをり楽しき心を今日持ちおらむ絶え間なきごとく電車の走りおり時々大きく一つ聞えて我物と言う土なくて住みをれば移りゆくこと安々決めぬ豆（フェジョン）を煮る処方はポルトガル語にてルイスは唯に豆（フェジョン）を食みつつ昆布の根を持ちて海牛を突（つつ）きたりいじめというを思い思いてはるばると来たりて入間川の堤防の土筆摘みおり少しほけしをお互に理解出来ざる会話には車を停めて漢字を書きぬつらなれる万里の石垣割りて咲く花はやさしきナデシコに似て散りいそぐ花見るごとく今日のわれは車走らせて北京を見たりわが身体（からだ）にタンゴのリズム残りいてタンゴに歩む石畳道不自由をするが好きねと我が子等に言われているよ英語モタモタ高々のパームツリーに風見ゆるこの木の下に住んでおります日本とアルゼンチンにブラジルも混りて私のアメリカ生活揺れ揺れる竹叢の色松の色日本の色のその中にいま0メーターより始めて今日は三万キロアメリカ国を走り走りて

ほうれん草日々に食みつつ一年をポパイの国にわれは過しぬ
飛行機は九百キロのスピードにて我が母の国日本へ向かう
南瓜とは言わず今宵はパンプキンパイ感謝の日には感謝をしつつ
たおやかに続ける丘よスペインの歴史と落ちている石ころ石ころ
前後左右ミラーに写るはみな車その只中に私の顔
もう少しもう少し地球にいて下さい命のことに欲深くなる
忘れ得ぬ母とのことの浮びきて母の子になる心ゆくまで
何事も無かりしごとく続けゆく常の心に母を加えて
一人来てレモンシャーベット頼みたり姉と坐りし窓辺の椅子に
好きですよ冗談混じりに言う声はエッフェル塔のその近くより
いつまでも易しき英語の辺りより抜け出せなくて加州（カリフォルニア）に住む
花びらや花房のことも思いつつ桜の国へ向けて飛びゆく
ＬＡの景色にこのごろほつとするジャスミン香る私の家
空を飛ぶ翼を持たぬに飛び出す角度になれたり私の身体
アボガドの小さな実のなる木の下にて大地に立つを喜びており
こんなことあんなこと思うためにとてサンタモニカの渚に居たり
お母さんのハッピーを探せと言いおきて自らの事に忙しき玉由
はるかなる地球の丸み見ゆるまで巨き夕焼け椰子の木を添えて
水平線地平線また雲海線みつめて私の日々のなりたつ
さりげなくスイスの国を離れゆく由野と私と振り返るなく
ただ白き雲海の上を飛びをりてわが身を晒す白の反射に

随筆集　地球にて

一九九二年十一月二〇日初版第一刷

著者　今泉由利

発行人　荒木　清

発行所　蝸牛社

東京都練馬区谷原六-二〇-三四
〒177 ☎〇三-三九二四-四九一一
FAX〇三-三九二四-四九三二

組版　レオ・データ企画
印刷・製本　中央精版